

山口大学創基200周年記念

地域と共生する大学づくりのための全国縦断熟議

熟議 in やまぐち

報告書

熟議



国立大学法人 山口大学

はじめに

山口大学は、1815年に長州藩士・上田鳳陽先生が創設した私塾「山口講堂」（のちの山口明倫館）を前身とし、明治・大正期の学制を経て1949年には、平和と繁栄を願い、地域における高等教育および学問研究の中核たる新制大学として創設されました。これまで、地域の人材育成に貢献し、世界で活躍する多くの人材を送り出し、2015年には創基200周年を迎えます。ご存知のとおり、山口県で有名な私塾は松下村塾でありまして、ここで学んだ門下生のなかから、近代日本をつくった人材が輩出されました。松下村塾は、1842年に吉田松陰の叔父、玉木文之進が自宅で開いた私塾で、1857年に、藩校明倫館の塾頭を務めた松陰が引き継ぎました。松陰は、身分の隔てなく平等に塾生を松下村塾に受け入れ、一方的に教えるのではなく、対等に語り合い、共に学ぶというスタイルをとりました。このスタイルは、山口大学の基本理念の「公正・平等・友愛の尊重」「共同・共育・共有精神の涵養」と重なります。また、松下村塾は、木造瓦葺き平屋建ての小舎の18畳半の小さな空間でした。場所や建物が重要なのではなく、志ある人々が集まって「知の広場」を創造したことに意義があるといえます。「熟議」を提唱されました鈴木寛元文部科学副大臣は、新しい時代を創るのは、大きなものではなく、小さいけれど濃い学びの集団である、すなわち、世の中を変えるものは塾であり人であると言われていました。山口大学の基本理念の筆頭には、21世紀の多様な課題を「発見し・はぐくみ・かたちにする」、豊かな「知の広場」を創り出すことを掲げています。「目の前に起こっていることをどのように解釈し、どのように意味を見出し、意義づけ、再構成していくか」という「熟議」は、すぐに結論は出ませんし、事態はすぐには改善しませんが、目先のことに捉われず、本質を見極める「知の広場」が、今、必要となっています。

ゆえに、2012年3月17日に開催された「熟議 in やまぐち」では、「熟議」を「知の広場」のひとつとして位置づけ、「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」をテーマとして掲げました。会場は、学生や教職員が日々利用している学食でした。いつもの学食が「知の広場」に変わったのです。実際に、私も、グループ熟議に参加いたしました。何かしら底知れぬ「氣」を感じました。元気に、活気があって、熱気があった「熟議」でありました。様々の立場の方々が、学内外から参加され、11グループに分かれ議論をして、このように「氣」が集結したのは初めてではないでしょうか。

山口大学は地域の基幹総合大学であり、地域とはできるだけ密接に活動したいと考えておりますので、「熟議」は、大変意義深いものと思います。ただし、このたびの「熟議」を一時的なイベントで終わらせてはなりません。「ゴール」ではなく「始まり」なのです。今後も、山口大学がイニシアチブをとって、それぞれの課題について議論を続ける努力をしなければならないと思っております。なぜなら、議論を続けていかないと課題を本当に解決することにはならないからです。そういう意味では、熟議の内容を整理し、まとめますと同時に、今後の議論を展開させたいと思っております。このような「熟議」を重ねていくことは、まさに、これまでの200年を振り返り、さらなる200年を地域とともに歩んでいくための布石となると思っておりますので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

最後になりますが、丸一日、熱心に熟議いただきました皆様方、心より御礼を申しあげます。本当にありがとうございました。また、今回の熟議の共催者であります文部科学省からは、城井文部科学大臣政務官、平林生涯学習推進課長をはじめ多くの方にも、お忙しい中お出でいただきありがとうございました。

国立大学法人 山口大学 学長

丸本 卓哉

山口大学の「熟議」とは？

熟議とは、「熟慮して議論すること」である…ことは容易に推定できますが、もう少し詳しく述べるならば、地域において関心のある、あるいは関係のある事柄について、関係者が集まって、まずは情報を収集・共有・学習し、直面する問題の状況を理解し、議論を熟します。熟議によって、お互いに直面する問題についての理解と信頼が深まり、自ずと解決策が醸成されます。それが、さらに洗練され、それぞれの役割が浮き彫りになった段階で、改めて協働することにより、お互いが新たな自覚と尊敬と感動を持つに至り、新たな一步を踏み出すことと言えましょう。

近年は、先が見えない社会、不安、不信、混乱というネガティブな言葉が行き交っています。混沌とした時代に新たな光は見いだせないものでしょうか。かつて、山口の地は明治維新の原動力となる多くの人材を輩出しました。こういう時代であるからこそ、改めて山口の地において何かを見出せるのかもしれない。山口は、少子高齢化、過疎化、それにとまなう地域社会での問題など多くの課題を抱えています。視点を変えますと、正に熟議が必要とされています。かつての高度成長時代には、先進地の成功モデルが提示されましたが、今日に至って私たちは今までに経験したことのない課題に直面しています。個々の課題には、固定的なモデルはありません。言い換えると、地域住民ひとりひとりが当事者性をもってそれぞれの役割を果たしていくプロセスを構築することによって、より良い結果に向かって進めると言えます。そのためには、多種多様な主体（市民、行政、企業、大学教職員、学生等）が集まり「熟慮」と「議論」を重ねる「知の広場」が必要となります。

このたびの「熟議 in やまぐち」では、「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場～実りある知の循環をつくりだすために」をテーマとして掲げ、地域の喫緊の課題を明確にし、その解決策について意見を出し合い、各個人・主体がどのような役割を果たせばよいのか、どのような共生・協働関係が可能なのか、どのような循環が実りあるのかなどを考える「知の広場」を創出することを目的としました。今回の熟議では、山口大学が地域や社会の知の拠点として、地域や社会の課題を共に解決し、その活性化や新たな価値を創造するための第一歩を踏み出すために、山口大学の理念の3本柱である「研究（究める）」「教育（育てる）」「社会連携（つながる）」を大きな枠組みとしました。A：研究（究める）では、①最先端研究、②地域連携型研究、③文学・人間を、B：教育（育てる）では、④基礎学力、⑤コミュニティ・スクール、⑥就職を、C：社会連携（つながる）では、⑦健康、⑧安心・安全、⑨農村の再生、⑩まちづくりというキーワードを掲げ、個別のテーマごとに「熟慮」や「議論」を深めるアプローチをとりました。これらは「小さな知の広場」になります。そして、個別のテーマの「熟議」の内容は連携することによって「大きな知の広場」になります。半日の「熟議」では何かが動く段階に容易には至りません。吉田松陰は「至誠にして動かざるものは、未だこれ有らざるなり」（孟子）という言葉を塾生に書き残しています。多くの問題を抱える状況から何かを見出し、それが動く瞬間に立ち会うためには、誠の心を貫きながら「熟議」を継続させ、そして、実りある知の循環を創り出すことが不可欠でしょう。

この報告書および映像が、このたびの「熟議 in やまぐち」が未来に向かって展開するための一助となればと祈念いたしております。

国立大学法人 山口大学 副学長[国際・社会連携担当]
「熟議 in やまぐち」実行委員会 委員長

松田 博

目次

1.	開催の挨拶	丸本 卓哉・城井 崇・田邊 恒美	1
2.	熟議シンポジウム		
	山口大学の『知の広場』とは？	三池 秀敏・平尾 元彦・富平 美波・松田 博	5
	手法としての『熟議』とは	牧野 浩司	25
3.	グループ熟議		
	「グループ熟議」の全体のながれ	辰己佳寿子	27
	A：究める（研究）	大学が研究する意義を考えてみませんか？ 林 里織	29
	① 最先端研究	大学の研究に求めたいこと 堤 宏守	32
	② 地域連携型研究	山口大学の産学公連携を中心とした共同研究と地域貢献 清水谷 卓	35
	③ 文学・人間	文学の「力」 吉村 誠	38
	B：育てる（教育）	社会を元気にする人材育成とは 辻 多聞	41
	④ 基礎学力	大学に求められる教育内容とは 小川 勤	44
	⑤ コミュニティ・スクール	学校・家庭・地域の協働による地域教育コミュニティづくり 長畑 実	47
	⑥ 就職	就職する力をはぐくむ 平尾 元彦	50
	C：つながる（地域づくり）	人々がどのようにつながることが社会を元気にしていけるのでしょうか？ 辰己佳寿子	53
	⑦ 健康	健やかに実りある生活を送るために 上田真寿美	57
	⑧ 安心・安全	防災対策はコミュニティづくりから 瀧本 浩一	60
	⑨ 農村の再生	農村に暮らす 高橋 肇	63
	⑩a まちづくり～ローカル～	住民・行政・企業・大学がつながるまちづくり 鍋山 祥子	67
	⑩b まちづくり～グローバル～	グローバルなまちづくりは可能か？ 松田 博	71
	聴講者の声	グループ熟議を観察する 聴 講 者	75
4.	講評	平林 正吉・丸本 卓哉	77
5.	学長の一文字	丸本 卓哉	79
6.	寄せ書き		80
7.	もうひとつの「熟議」	辰己佳寿子	81
8.	「熟議 in やまぐち」アンケート結果		83

地域と共生する大学づくりのための全国横断熟議

「熟議 in やまぐち」プログラム

テーマ： 発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場
～実りある知の循環をつくり出すために～

地域社会が抱えている課題をどのように解決していけばよいのでしょうか。このような課題にわれわれはどのように向き合えばよいのでしょうか。山口大学の「知の広場」に集まり、「熟議」を通じてみんなで考えてみましょう。そして、実りある知の循環をつくりだしましょう。

開催日：平成24年3月17日（土） 10:30～17:00

会場：山口大学 学生会館大ホール、第二学生食堂（きらら）

◆第一部：開会・シンポジウム（10:30～12:00） 会場：学生会館大ホール

- (1) 主催者挨拶 山口大学 学長 丸本 卓哉
文部科学大臣政務官 城井 崇
- (2) 来賓挨拶 山口県教育委員会教育長 田邊 恒美
- (3) シンポジウム「山口大学の『知の広場』とは？」 11:00～11:50

<パネラー>

A：究める（研究） 副学長〔学術研究担当〕 三池 秀敏
B：育てる（教育） 大学教育機構学生支援センター 教授 平尾 元彦
C：つながる（地域づくり） エクステンションセンター センター長 富平 美波

<コーディネーター>

- 副学長〔国際・社会連携担当〕 松田 博
- (4) 主催者説明「手法としての『熟議』とは」 11:50～12:00
文部科学省 生涯学習政策局
生涯学習推進課生涯学習推進係 係長 牧野 浩司

◆昼食（12:00～13:00） グループ熟議参加者はグループ別に昼食→自己紹介タイム

◆第二部：グループ熟議（13:00～17:00） 会場：第二学生食堂（きらら）

- (1) グループ内での課題・解決案の共有、まとめ 13:00～15:00
- (2) グループをこえた意見交換会 15:00～16:00
- (3) サブテーマごとのまとめ 16:00～16:30
- A：究める（研究） 産学公連携・イノベーション推進機構 講師 林 里織
B：育てる（教育） 大学教育機構学生支援センター 講師 辻 多聞
C：つながる（地域づくり） エクステンションセンター 准教授 辰己 佳寿子
- (4) 講評
文部科学省生涯学習政策局
生涯学習推進課長 平林 正吉
山口大学 学長 丸本 卓哉
- (5) 閉会

◇意見交換会・交流会（17:10～18:30） 会場：第二学生食堂（きらら） ※会費制・希望者のみ

開催の挨拶

山口大学 学長
丸本 卓哉

衆議院議員 文部科学大臣政務官
城井 崇

山口県教育委員会 教育長
田邊 恒美

<司会>

山口大学 エクステンションセンター 教授
長畑 実

司会

本日、司会を務めさせていただきます、エクステンションセンターの長畑実でございます。よろしくお願いいたします。まず、主催であります山口大学を代表して山口大学学長・丸本卓哉より挨拶を申し上げます。

丸本 卓哉

皆さん、おはようございます。学長の丸本でございます。今日は、「地域と共生するための大学づくりのための全国縦断熟議」と題しまして、「熟議 in やまぐち」を山口大学吉田キャンパスで開催することになりました。この熟議の開催は、東日本大震災の影響で開催日がなかなか決定いたしました。ちょうど1週間前に、震災から1年が過ぎました。この間、日本国内では様々な地域の



問題が浮き彫りとなりました。このような問題を加味しながら、本日の熟議のテーマが設定されました。今日は丸1日かけて皆様方と膝を突き合わせて、地域社会が抱えている課題をどのように解決していけばよいか、このような課題に我々はどのように向き合えばよいかについて議論をしていきたいと思っております。今日のシンポジウムやグループ熟議など、1日をかけての熟議となりますが、最後までご参加いただきまして、意味のある会議となればこのうえない喜びでございます。

今回の熟議は、実は、山口大学が3年後に創基200周年を迎えることで、この熟議の冠に「山口大学創基200周年記念」をつけさせていただきます。今回から200周年にむけて、いろんな準備をさせていただこうと思っており、今後、いくつかのシンポジウムも開催する予定でおります。そのトップバッターとしてこの熟議が位置づけられます。

今日は、外部の方も含めご参加いただき、ありがとうございます。最後までご参加いただき、熟議を盛り上げていただきますことをお願いし、開催者の挨拶といたします。どうかよろしくお願いいたします。

司会

それでは引き続き、同じく主催者であります文部科学省を代表いたしまして、文部科学大臣政務

開催の挨拶

官・城井崇様よりご挨拶をお願いします。

城井 崇

ただいまご紹介いただきました文部科学大臣政務官を拝命いたしております、城井崇でございます。

このたびは、地域と共生する大学づくりのための全国縦断熟議の趣旨にご賛同いただき、様々な立場の皆様が集まっていたいただき、熟議を行う機会が、この山口大学において得られましたことを、ありがたく、うれしく思っています。

大学は人をつくり、知恵をつくる、地域の中心の場であります。

その重要な役割に鑑み、人や資金をはじめとした多くの公的資源が投入されているわけではありますけれども、昨今の東日本大震災の復興に資するということ、国や地方の財政状況が厳しさを増すなかで、大学自体が地域貢献活動に取り組んでいただき、広く社会から理解され、支持をされることが必要となっております。

山口大学におかれましても、これまで、公開講座、開放授業、出前講義といった、地域貢献活動に熱心に取り組んでおられると伺っております。地域社会から一層理解され、ご支持をいただくには、それぞれの大学が学生やその保護者のみならず、高校や企業、地方公共団体、地域住民の方々など、地域でさまざまな関わりをいただいている皆様とのコミュニケーションを深めていくことが不可欠であります。

地域の様々なステークホルダーといわれる皆様とのコミュニケーションを強化し、そうした人々からの協力を得ていくという前向きな循環を作っていくことが出来るような取り組みとして文部科学省が推奨していますのが、本日、皆様にお取り組みいただく熟議であります。本年度からは、大学と地域の連携のきっかけ作りをお手伝いする取り組みを、地域と共生する大学づくりのための全国縦断熟議と銘打ちまして、全国各地で、実施させていただきます。

関係当事者が集まり、学び合い、分かち合い、支え合う、対話と協働、コラボレーションが一体となり、課題解決を目指す取り組みである熟議は大学が地域の様々なステークホルダーとのコミュニケーションを強化していく際にも非常に有効な手段となると確信しています。



山口大学におかれましても、今回の取り組みを一過性のものと終わらせることなく、大学と地域の連携がこれからもひとつひとつ繋がっていく、継続され、より有効なものとなりますように、引き続き、地域とのコミュニケーションの強化に向けた取り組みを続けていただき、地域貢献活動に向けて積極的に取り組んでいただけるものと期待しています。

結びに今回の開催にあたり、ご尽力いただきました、山口大学をはじめとする関係者の皆様に心から敬意と感謝を表するとともに、本日の熟議が是非実りあるものとなりますことを祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。本日1日、どうぞよろしく申し上げます。ありがとうございました。

司会

続きましてご来賓としてご臨席いただいております、山口県教育委員会教育長の田邊恒美様よりご挨拶をお願いします。

田邊 恒美

改めまして、皆さん、おはようございます。「熟議 in やまぐち」が開催されるにあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

山口大学におかれましては、山口県の基幹総合大学として人づくりに力を尽くされ、多くの人材を輩出されておられますことにまずもって敬意を表します。また、公開講座や放送大学との連携など、地域に開かれた大学教育において、県民の皆様方の生涯学習の推進にご尽力をいただきますとともに、現職教員の研修、受け入れなど、本県教員の資質向上にお力添えをいただいております、この場をお借りして深く感謝いたします。



さらにご臨席の文部科学省におかれましては、「夢と知恵をはぐくむ教育」を目標としております本県教育にご指導、ご支援をいただいておりますことに対し、厚くお礼申し上げます。

さて、ご案内のとおり、情報化やグローバル化の進展、知識基盤社会への移行など変化のはげしい複雑化する社会におきまして、あらゆるライフステージで人々の生活スタイルや文化的欲求は多様化するとともに、教育におきましても、社会総がかりでの取り組みが求められております。このような中、生涯学習社会における知の拠点、地域と共生する大学づくりという熟議の趣旨の下、「究める」「育てる」「つながる」をキーワードに、「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」をテー

マとして開催されます、今回の熟議は地域課題の解決に主体的に取り組む県民の皆様の意識の醸成にとりましても、まことに意義深く、時宜を得たものと考えています。特にグループ熟議「育てる」におきましては、コミュニティー・スクールの課題も取り上げられると伺っています。山口県教育委員会といたしましては、地域全体で子どもたちを温かく見守ることができますよう保護者や地域の方々が学校運営に参画するコミュニティー・スクールの設置や、それを推進母体のひとつとして、学校と地域社会が繋がりを深め、教育活動を支援する「地域教育ネット」の構築に取り組んでおり、ご参加の皆様の熟議の成果に大いに期待しているところであります。

終わりに、本日の熟議により、実りある知の循環がより一層つくりだされますとともに、山口大学の今後益々のご発展、そして、ご参集の皆様方のご健勝、ご活躍を心から祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。

司会

また、本日は、同じく主催者であります文部科学省より、生涯学習政策局生涯学習推進課・平林正吉課長ほか6名の方にもご参加いただいております。





城井 崇 (きい たかし)

衆議院議員 文部科学大臣政務官

出身：福岡県北九州市、1973年6月生まれ

学歴：京都大学総合人間学部卒業

2001年3月松下政経塾卒塾後、衆議院議員前原誠司氏秘書を経て、2003年11月比例代表で衆議院議員に初当選。2009年8月小選挙区で衆議院議員当選し、2011年9月文部科学大臣政務官に就任。



田邊 恒美 (たなべ つねみ)

山口県教育委員会 教育長

出身：山口県山口市、1952年3月生まれ

学歴：九州大学理学部卒業

山口県立田部高校長、山口県教育庁教職員課長、教育次長などを歴任し、2010年4月から現職。



丸本 卓哉 (まるもと たくや)

山口大学 学長

出身：福岡県、1942年4月生まれ

学歴：九州大学大学院農学研究科博士課程修了

1973年九州大学大学院農学研究科博士課程修了後、山口大学農学部に着任。農学部長、副学長、大学教育機構長を歴任後、2006年から現職。専門は、土壌微生物学。土壌微生物学は、土の中の微生物を調べて土のを知り、作物などの生育を支援するための学問で、なかでも私が注目しているのが菌根菌です。植物からエネルギーをもらう微生物の一種で、養分や水分を植物に与る共生関係を構築します。自然界の構造は、現代社会にも適応可能で、現在は、山口大学の学長として、大学と地域との共生関係の構築に力を入れています。

山口大学の『知の広場』とは？

<パネリスト>

- 山口大学 副学長[学術研究担当]
A：究める（研究） 三池 秀敏
- 山口大学 大学教育機構学生支援センター 教授
B：育てる（教育） 平尾 元彦
- 山口大学 エクステンションセンター センター長
C：つながる（地域づくり） 富平 美波

<コーディネーター>

- 山口大学 副学長[国際・社会連携担当]
松田 博

松田：皆さん、おはようございます。今日は、「熟議 in やまぐち」にお集まりくださりましてありがとうございます。参加されるにあたりましては、「熟議」ってなんだろうと考えられていらっしゃる方も多いかと存じます。「熟」という漢字には、いろんな熟語があります。「習熟」「成熟」「熟慮」「熟考」などがございますし、ものを煮る時には、「半熟」という言葉もあります。そのなかでも、今日は、特に「熟慮」「熟考」に重きをおいていくことになろうかと思えます。様々な人々が集まり、あるテーマについて意見を出し合います。意見を聞いた後、熟慮して熟考して、発言していきます。このようなプロセスで議論することによって、糸口や解決策がみえてくる、そういうイメージでございます。

今日のメインタイトルとしましては、山口大学の基本的理念であります「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」を掲げさせていただきます。今日は、山口大学の「知の広場」に集まっていただいて熟議を展開したいと思います。

「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」についてですが、私が、よく講義のときに学生に話すことがあります。まず、山口大学に入学して、知らないことがたくさんあります。まずは知らないということを発見してくださいと言うのです。それゆえに、いろいろ調べるのです。図書館で調

べる、インターネットで調べる、共通教育や専門教育で学び、ゼミで学び、いろんな問題がみえてきます。つまり、「発見し」ながら、「はぐくむ」ということですね。そして、卒業する時は卒業論文として「かたちにする」わけです。

「発見し・はぐくみ・かたちにする」というのは、学生生活だけではありません。皆さんにもあてはまります。なぜなら、これを言い換えますと、「夢を叶える」ということだからです。夢は、あるひとつの発見なのです。夢を叶えるためには何もしなければ、その夢はかなわない。それはなにか努力をしないと、つまり、はぐくまないと泡となって消えてしまいます。はぐくむことによって、かたちにするということは「夢がかなう」ということではないでしょうか。まさにそういう意味で



は、「発見し・はぐくみ・かたちにする」プロセスは人生を豊かにするうえで必要なことではないでしょうか。

そして、この言葉の最後には「知の広場」がきております。本日、山口大学で開催することの大きな意味合いではいかと思います。今日のサブ・タイトルであります「実りある知の循環を作り出すために」ということは、「発見し・はぐくみ・かたちにする」ことによって、知が循環することを意味しています。「循環」にはいろいろな解釈がありますが、最初に戻るということではありません。私たちが意図していることは、一周することによって一歩前へ出ること、実りある進歩という意味なのです。一歩一歩前進することによって、皆さんの知が広がり、深まり、つながっていくということを考えてほしいと思います。

山口大学は、丸本学長からお話があったように2015年に創基200周年という節目を迎えます。1815年に上田鳳陽先生が山口講堂を創設されて以来、今日まで約200年間、山口大学が存在してこられたのも、やまぐちという地域に支えられてきたからと感謝しております。やまぐちという地域に活力がなければ、山口大学の活性化はありえません。ですから、今日、地域と共生する大学づくりを目指した熟議を行うことはたいへん有意義なことであるといえます。学生の教育はもちろんのこと、地域とともに歩んでこさせていただきました。昨今、やまぐちにおいては未曾有の課題が浮上しつつあります。改めまして、今日は、実りある循環を目指した「知の広場」を皆さんと一緒につくりだし、地域がかかえている課題をどのように解決していけばいいのか、このような課題にどのように向き合えばいいのでしょうかということを考えたいと思います。その時のひとつの手法が「熟議」なのです。実りある知の循環を作り出す第一歩を、今日の「知の広場」からつくりだしていきましょう。

さて、午後からは、市民、行政、企業、大学教職員、学生などの多種多様な主体で構成された、顔の見える小グループでの知の広場において、キーワードごとに熟議を展開していただきますが、その前に、午前中のシンポジウムでは、山口大学の「知の広場」とは何かを「研究（究める）」「教育（育てる）」「つながる（地域づくり）」の3つの視点から考えていきたいと思っています。午後の熟

議を展開するにあたり、参考にさせていただきたいと思います。

「明日の山口大学のビジョン」では3つの柱を掲げています。山口大学は学生を育てることが中心ですので、真ん中に「教育」、右側に「研究」、左側に「社会連携」を掲げています。大学におきましては、「教育」が中心になるわけですが、今日は、順番を変えて、「研究（究める）」「教育（育てる）」「つながる（地域づくり）」の流れで説明させていただきます。それぞれについてご報告いただくために、3人のパネラーにご登壇いただきました。

まずは「研究（究める）」というところで、学術研究担当の三池秀敏・山口大学副学長の発表をお願いしたいと思います。山口大学の研究の特徴に焦点をあててお話をください。

三池：先ほどから、「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」という理念のお話がされていますが、「発見」と「究める」「研究する」ということは通じるものがございます。

山口大学には、人文学部、教育学部、経済学部、理学部、医学部、工学部、農学部、さらに、4月から共同獣医学部が加わり、8学部目ができます。これらをすべて紹介していますと時間がありませんので、私の独断と偏見で山口大学の研究の特徴を総括させていただきます。

山口大学は、「教育」が中心ではありますが、見方を変えると「教育」と「社会連携」の要として「研究」を位置づけることもできます。研究を通じた人材育成とか、研究成果を発表する社会貢献、国際、産学連携、そういったものが考えられるからです。いずれも研究成果を発表するというかたちで、研究をとおして人を育てる、その中で、山口大学の研究の特徴はなにかといいますと、私の独断と偏見で申し訳ないですが、ひとつのキーワードとして「異分野間の融合による新たな分野の創造」ではないかと思っています。

そのなかでも最も特徴的なのは、時間学研究所です。山口大学の唯一の研究所でありまして、2000年に、広中平祐元学長が創設されました。文理融合をめざす、新たな研究所、オンリーワンをめざす研究所としてつくられました。

一方で、応用医工学、応用分子生命科学といった、医、工、理、農が融合する異分野間が融合す

る新たな分野の創造もあります。さらに、山口大学の研究を代表する組織として研究推進体があります。19の推進体があり、第2期目で練り直し、新たな研究推進体として出発していますが、そのなかに10の推進体が異分野融合の形で現在進んでいます。

この異分野融合の新たな分野の創成について少し紹介したいと思います。時間学研究所は、広中元学長が、2000年4月に学内措置としてスタートさせました。その後、時間旅行展の企画や「時間学概論」のテキストの出版、教育への展開、国際シンポジウム「東アジアの暦と近代化」開催などが行われ、2009年には日本時間学会が設立されました。2010年には大学の常設の研究所となりまして、国際セミナーを開催したり、昨年4月には、文部科学大臣賞をいただきました。本年度は、国際シンポジウムとして、「東アジアの最先端天文学」を開催しました。

時間学研究所のホームページに、広中元学長の「時間学研究所の発展を期待して」という言葉があります。少し紹介しましょう。「公開講演会では学外市民から熱心な聴講と温かい賞賛と心のこもった感謝の手紙を戴いている。時間に対する学問的関心やその不思議に関する好奇心は驚くほど強く広いことを思い知らされている」というものです。時間学は、市民との連携という意味でも親しみやすいものと考えられます。

今年の1月23日には、時間学研究所主催で旧正月を祝う餅つき大会が開催されました。旧暦の正月に行事を行い、旧暦の意味を問い直すという趣旨です。時間学には、社会学や民俗学にもとづくものも入っているのです。すなわち、時間学研究所の活動としては、幅が非常に広いのですが、今までに、見える時間、見えない時間、東アジア



の暦と近代化、死と時間、時間体験の基礎といったキーワードで市民の方に訴える、イブニングセミナー等も開催しています。現在のスタッフは、社会学、天文学、時間生物学、哲学の4人の先生によって構成されていまして、学外から、心理学、医学、非線形科学の先生方、学内外の幅広い研究協力を得ながら研究活動が展開されています。

その他に特徴をあげるとすると、医学、工学、理学、農学の連携による、学際的教育研究の推進ということで、ライフサイエンス分野の展開があります。2001年に応用医工学専攻ができ、2006年には応用分子生命科学系専攻が設立されました。医学系研究科を中心といたしまして、いろんな学部の融合として発展しているところです。

その中でも、もっとも特徴的なもののひとつとして、坂井田功先生の次世代型再生細胞治療法の確立を目指したトランスレーショナルリサーチユニットが研究推進体として活動しています。

その他にも、ライフサイエンス、グリーンサイエンス関係としまして、微生物の機能進化と環境適応ということで、藤島政博先生を中心とする研究推進体がありますし、環境共生フロンティア研究拠点ということで、宮本文穂先生を中心とする研究推進体があります。いずれも複数の学部をまたがる、ライフサイエンスおよびグリーンサイエンスの分野で活発に研究がされておりまして、国際的なレベルの研究となっています。

これらとはちょっと異なりまして、個性的で独創的な研究グループをひとつ、ふたつ、紹介いたしましょう。19の研究推進体の中で、非常に独創的な、メタマテリアルの概念に基づく超機能材料・デバイス創成というのが、真田篤志先生のもで行われております。通常は屈折がこのように起こるのですが、全く逆の屈折、負の屈折率を示す物資を人工的に開発するといった非常に挑戦的なテーマを研究されています。

まったくそれとは異質ですが、地元の研究ということで、やまぐち学推進プロジェクトを文系の分野で実施されています。田中誠二先生が中心となって進められております。2年前、第1回やまぐち学シンポジウム「萩藩研究の新展開」が一般市民を対象に開催されました。

ということで、山口大学の研究を全て紹介することはとても無理ですが、特徴的で独創的な研究がたくさんあるのです。このほかにもしゃべりだ

すと後1時間くらい必要となりますので、研究に関する説明は、とりあえずご勘弁いただきたいと思ひます。

次に、産学連携のことを少しお話したいと思ひます。研究成果を活用しますと、社会貢献に通じます。ひとつは、政府の施策と山口大学の産学連携活動の歩みをまとめてみました。産学連携活動が施策として始まったのは、1991年頃でした。この時、山口大学では地域共同研究開発センターができました。その後、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー（VBL: Venture Business Laboratory）、それから山口ティー・エル・オー（技術移転機関）ができます。第1期科学技術基本計画ができました1996年（VBLができた時）頃はポストク1万人計画が声高に言われた時期であります。第2期の科学技術基本計画では、重点4分野、ライフサイエンス、情報通信、環境、ナノテクノロジーが設定されました。第3期の科学技術計画ではイノベーションの創出、第4期は2011年度から始まりましたが、震災からの復興再生でグリーンイノベーション、ライフイノベーション、あるいは、科学技術イノベーション、というキーワードが打ち出されました。

その間、リーマンショックや東日本大震災がありました。産学連携に関しましては、現在、産学公連携・イノベーション推進機構をもう少し大きな枠組みで発展させるために、今年の4月からは大学研究推進機構を立ち上げる予定です。

過去20年間の受託研究、共同研究の件数をみてみますと、地域共同研究開発センターが立ち上がった初期は、28件くらいしかありませんでした。300件を越えた時期から考えると今は少し減少してはいますが、当初から10倍以上となっています。

時間の関係では詳しい話は略しますが、もうひとつ特徴的なものは、産学公の共同研究による地域開発イノベーションです。現在取り組んでおりますのは、文部科学省の知的クラスター創成事業で2009年から2013年までの「やまぐちグリーン部材クラスター」です。これは、中核機関は山口県の産業技術センターです。研究機関として、山口大学は只友一行先生が、東京理科大学は戸嶋直樹先生が参加されています。LED、太陽電池、ナノ粒子、液晶等の省エネ、省資源型の高機能部材の開発という3つの研究課題で、研究が進められ

ています。これも、山口県の地域を代表する研究だと思ひます。

山口大学の研究活動としては、研究推進体、大学研究推進機構、時間学研究所を紹介しましたが、この他にも、各学部所属の研究者への支援体制として「呼び水プロジェクト」や「若手研究者支援」もあります。

松田：三池先生、ありがとうございます。基幹総合大学ゆえの異分野間の融合による新たな分野の創造や産学公の共同研究による地域発のイノベーションというのは、まさに、ゴールといいですか、「発見し・はぐくみ・かたちにする」という理念の「かたちにする」というところがあらわれていると思ひます。

大学の研究というのは、地域のみならず、世界を相手にした研究ということでございますので、今日の熟議の内容からすると、世界と地域には若干隔たりがあると思われるかもしれませんが、人間社会を豊かにするという点では一致しておりますし、大学の研究は足元を常にみておきまして、地域に根ざした研究もございませう。様々な角度から「究める」というテーマを、午後、議論していただければと願っているところでございませう。

次に「育てる」ということで、大学が行っている現状を、ひととおき説明していただこうと思ひます。今、大学は、ちょうど入学試験が終わりまして、合格発表が出つつあるところでございませう。学生が大学で学ぶことの意味、大学がどういう教育を目指しているかという点を顧みたととき、大学で学生が学ぶということは、あらゆる面を含んでおります。一般的に、学生は、平日は朝から夕方までは大学におります。しかし、残りの時間は地域の住民として生活しています。そして卒業し就職して社会に出ていきますが、大学に入学して、大学で教え育てるということは、大学内だけの話ではないのです。地域での生活も含めて教育しているということでございませう。地域の方と接触することによって学生は成長していけるのです。このあたりの点も含みながら、大学教育機構学生支援センター教授の平尾元彦先生に話をさせていただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

平尾：それでは、「育てる」というテーマで、山口大学の取り組みがどうなっているのか、午後の

議論に繋がるような報告をさせていただきます。

そもそも、学生が大学で学ぶこと、そして、身につけることは、为什么呢。これはいろいろな言い方、答えがあると思います。人生を豊かにする力、自分の人生を自分で豊かにしていくためには、いろんな教養も必要ですし、能力も必要です。自分を育てていくことも、大学で学ぶことだと思います。

それだけではありません。社会の一員として、新しい社会を創っていく、よりよい社会を創っていく。そのために、仕事をする、働いていく、人のために何かをする、そんな能力、気持ち、このあたりも大学で学ぶことだという言い方もあるかもしれません。

そして、自分の道を自分で切り開いていくこと。子どもたちは、保護者の方が道をつくってくれる場合が多い。大学生にも保護者の方がいらっしゃいますけれど、学生たちは、徐々に大人の仲間入りをしていきます。とおる道の途中に大学はあるんです。自分のことは自分でやっていく、そして、自分の道は自分で切り開いていく、その力を大学で学ぶ、大学で身につけることだと、そんな言い方もできるのかもしれない。

大学には大学生がいます。大学生は、大学の中で、基礎教育、あるいは教養教育の科目を学ぶことによって、力をつけていきます。それだけではありません。専門教育も重要です。両方あって、大学生を育てていく。大学生は自ら育っていく、これが大学です。元々、こういう作りであります。今でも、もちろん、そういうことになっています。

最近、教育界も進化しておりまして、それだけでなく、「キャリア教育」という言い方もかなり出てきております。生きる力、学ぶ力、働く力、これは大学で提供しているいろんな授業等を通じて、しっかり学んできたものですし、今でもそんなのですけれど、もっともっと、世の中ってどうつながっているのかな、そこで生きていくってどういうことなのかなと、そういう力も、基礎教育・教養教育、あるいは、専門教育を通じて、培っていく。そのためのキャリア教育という考え方が広がっています。山口大学では、「キャリア教育基本方針」を策定して、すべての教育研究活動を通じて、学生たちのキャリアを支援していく体制をつくっています。

さらに、それらを通じて“社会を元気にする”人材を育成することが求められています。これはもちろん、能力も必要となってきますし、気持ちも必要です。こういった教育を、専門教育、基礎教育・教養教育を通じて、大学の中ではぐくんでいく。これが大学で取り組んでいる教育ということになろうかと思えます。

山口大学憲章の基本理念にこの3点をあげていますが、このなかでさらにいくつかに分かれています。ひとつは、教育です。教育目標として次の3つを掲げています。①専門性と社会性の育成、②自己啓発・自己研鑽・自己管理の徹底、自分で・・・ということ。そして、③知識社会に応える能力の醸成、この力をつけていくんだということを教育の目標に掲げています。

つまり、大学というのは、教えてあげる、教えてもらうということだけではなく、自分の能力を高めるために自分で学んでいく、自分でマネジメントしていく、社会とつながって、力をつけていく、こういった教育をする場なんだと。まさに、われわれが実現すべきことは「知の広場」であり、そういった「学ぶ場」としての大学教育を、今実践しているところです。もちろん、主役は学生です。学生だけではなくて、われわれ教職員だって、学生とともに学んでいます。そういう場です。今日、ご参加いただき、この場に足を踏み入れた皆さんも、この後の「熟議」で一緒に学んで、新しい世界を切り開いていきます。今日の「知の広場」はそういう場なんだろうなと思えます。

では、「知の広場」を具体的にどのように実現しているのか、いこうとしているのかを少しお話をさせていただきます。私の話は「育てる（教育）」の部分で、グループ④、⑤、⑥の3つのグループに分かれています。

その順に説明します。

グループ④は「基礎学力」がテーマで、大学に求められる教育内容について議論します。現在、山口大学では、様々な教育活動を行っていますが、いくつかのキーワードをご紹介します。ひとつにはグラデュエーション・ポリシー（GP）です。GPとは、それぞれの教育単位、つまり、学部、学科、共通教育で、いったいその教育で何を達成するのかということ。それぞれの教育単位で特色ある目標をもっています。何を目標として教育活動を行うのかということ。これは、

実際の教育活動は、授業等を通じて行われます。授業等がまとまってカリキュラムを構成しています。それぞれの授業がどういう目標をもって、全体の目標のなかのどの部分を担っているのかを示すのが、カリキュラムマップです。もちろん、シラバスには、授業の目標を書きまして、その中でどういう能力を育成し、これは学部、学科のどこにつながっていくのかを示します。全体に総覧できるのがカリキュラムマップなのです。その中で、この授業ではこういうことを目標としていますという達成目的を明確にして、学生たちもそれを理解し、もちろん教員も理解しながら、一緒に育っていく。そういうことに取り組んでいます。

英語教育の TOEIC を例にあげてみましょう。これは点数で出てまいります、山口大学は、これに力をいれていますが、これくらいの点数は最低取ろうという基準を設定しております。もちろん、たくさん取れる人はもっともっと成長していくわけですけれども、一生懸命学生たちを激励しながら、達成できるように全学部にわたって取り組んでいます。

また、情報基礎教育も、共通教育において全学的に実施しています。最近はいろんな情報化、IT 技術も進んでいますけれども、一方で、セキュリティの問題、モラルの問題が非常に重要となってきました。21 世紀を生きていく、ひとりひとりがちゃんとしてないといけない、そんな問題につきましても目標を定めて実施しています。

ここまでは、どちらかというと教育のシステム、われわれがどのように学生に対して教育をわかりやすくしていくかということ。これに関しては整備をすすめてきました。

一方で、学生たちの学びは、それぞれ違います。ひとりひとり違います。それぞれの学生がどのよ

うに、自分の学びをつくっていくのか。私はこういう夢があるから、こういうことを勉強したい、そのためには、こういうことをもっとしなくちゃというような、ひとりひとりにあった教育が必要になってきます。それぞれの学生がどのように学び、これまで何を、これからどうするのか。このことをまとめる、ポートフォリオを、現在、つくろうとしています。これからの課題にはなりますが、この側面にも足を踏み出しているところでございます。

次に、グループ⑤の「コミュニティ・スクール」です。これは、学生が地域とどのように関わっていくのか、特に教育の面でどのように関わっていくのかということです。山口大学には学生自主活動ルームがあります。これは実際に部屋がありまして、コーディネーターがいて、学生たちが地域と関わっていくためのつなぎの役割を果たしています。地域のボランティア活動の紹介だけでなく、そこでの実践がどのような学びとなるのかについても指導をしています。

その他にも学生たちが自分たちでプロジェクトを考案する「おもしろプロジェクト」があります。失敗してもいいんだ、チャレンジして、そこから学んでいこう、という試みです。例えば、障害をもった子どもたちと交流をすとか、環境にやさしい街をつくるためにどうしたらいいのかを学生が企画立案し、そして、地域にも出向いて、活動を展開しています。そんなプロジェクトを大学が応援しています。

インターンシップでは、山口県は推進協議会をつくりまして、地域の皆様、企業の皆様をお願いしていることや、PBL (Project Based Learning) といいますけれども、実際に地域の課題に対して、何かのプロジェクトに対して、そこに入っていつて学ぶ取り組みがあります。

最後にグループ⑥の「就職」です。どのような社会人教育をすべきなのかがテーマです。大学生の多くは卒業して就職していくわけですが、就職する力をつけるためにはどうしたらいいのでしょうか。授業としてのキャリア教育も行っていますが、正課内外のキャリア教育に力を入れています。授業と、授業の外で、いろんな人のいろんな働き方、職業について、現実的にリアリティを高めていこうという取り組みです。授業と授業外の活動が連携させる試みで、教育連携・相談重



視をキャッチフレーズに掲げています。学生たちの志向や能力はそれぞれ異なりますので、ひとりひとりのキャリアを大切にひとりひとりと相談しながら、今、取り組んでいるところです。

就職のためには、自分のキャリアをちゃんと自分で考える力が必要です。キャリアを学ぶということは、キャリアの理論を学ぶだけでなく、社会のことを学ぶことも必要ですし、そして、社会人基礎力を学ぶことも重要です。これは授業の中でも、授業外でも取り組んでいます。例えば、学内業界・企業研究会、いろんな企業の方に大学に来ていただきまして、学生にお話をさせていただき、そんな機会もたくさんつくっております。

スクリーンの写真をご覧ください(P. 21の⑫)。1日のインターンシップで、実際に店頭の販売を経験して学んでいる光景です。これは、北九州市立大学と合同で行いました。他大学の学生と取り組むワークショップを実施しました。この写真は、大学の教室です(P. 21の⑬)。前で話をしているのは、企業の方です。「この業界はこういうふうになっている」「働くにはこのようなことが必要です」という話をいただくとともに、しっかり質問も受けていただくような課外教育です。この写真は、食堂「きらら」です(P. 21の⑭)。午後からの会場になりますけれども、ブースをつくって、いろんな企業と懇談をする、そんな場もつくっております。

午後のグループ④、⑤、⑥では、以上のようなことを参考に、熟議をしていただければと思います。

松田：ありがとうございます。今、お話頂きましたように、「育てる」というところで、大学の中での取り組みを紹介させて頂いたわけです。特に、グループ④、⑤、⑥の方は関心をもって聴かれています。このグループ以外の方は、大学の中のことだから関係ないと思われるかもしれませんが、実は、今日の熟議は、大学の教育も含めて地域の皆様とともに考えようという場でございます。平尾先生の話にございました、授業の内容、教育の方法、カリキュラムなどは、普段、地域の方が踏み込むことはほとんどないと思います。特に教育委員会の方、普段教育に携わっている方、あるいは、就職に関わっている方でも、大学の中の話に入っていけないところがあります

けれども、今日は、大学の教育についても一緒に考えていければと思っています。

続きましては、「つながる(地域づくり)」について、山口大学の社会連携を担当しているエクステンションセンター長の富平先生からお話を頂きたいと思います。お願いします。

富平：それでは、3番目といたしまして「Cつながる」の分野につきまして報告いたします。キーワードは「健康」「安心・安全」「農村の再生」「まちづくり」の4つでございます。テーブルは5つ設けさせていただいていますが、この設定に至りました大学の考えや関連のある活動について、ご紹介することを中心に、少しお話をさせていただきたいと思います。

ここから、山口のすてきな景色が出てまいりますので、どうぞ、スクリーンのほうにも注目いただければ、幸いです。先ほど、松田先生のスライドにもはいておりました図でございますけれども、実は、「明日の山口大学ビジョン」に、本日の大きなタイトルABCを重ねてみた、そういうものでございます(P. 22の②)。

松田先生から今日の午前中は山口大学の話が中心だとのお話があり、本当にそうだと思いますが、私の所属しております、エクステンションセンターにおきましては、本日の「熟議 in やまぐち」の実務的なお世話役を拝命いたしました。今日の開催まで、ずっと熟議を重ねてきた思いがふつふつと今よみがえってまいります。

さて、「明日の山口大学ビジョン」の図をよくみますと、研究、教育、社会連携が、山口県を照らす3つの透明な柱のようにイメージされています。すてきな図だなあと思いましたけれども、私ども「社会連携」と携わる者の実感といたしましては、Cはこんなふうに後のAやBとは離れてひとつの柱なのだろうかという疑問が湧き上がってくるのを禁じえませんでした。

大学教員をしていますと、社会貢献や社会連携というものは、研究教育をやっているなかから、自然に湧き上がってくる欲求のようなものでありまして、本来、研究、教育自体が社会に役立つ活動のはずです。それらの先端のところで、地域の方々と、直接、関わる部分が社会連携活動と分類されているに過ぎないとそんな気持ちがございます。

例えば、フィールド研究をされている社会学の先生や医学、医療などはまさにそれだと思いますが、社会と関わることが研究と関わっているという教員の方を除きまして、例えば、私のような文系教員のそのものみみたいな人間にとりましては、「かたち」ができていないとどうやって地域と関わっているのか、きっかけがつかめないものでございます。そこで、社会連携の取り組みはとっても大切なのだと実感としてわかります。

そういう私にできることは、一般市民を対象とした公開講座をすることであつたりします。特にうれしいのは、出前講義に呼んでいただけることです。そういうところにでてまいりますと、たとえ失敗いたしましても、教員はそれに刺激をうけて燃え上がる、というのが、これまた、自分の体の中に記憶として強く残っております。

これからもご要望をだしていただいて、私どもの社会貢献・社会貢献活動を励まして、そして叱りつけていただきたいなあという思いが、この度、改めて湧き上がってきております。

さて、Cの「つながる」のキーワードにいかせていただきます。教員がやっている研究、教育に関わる部分はすべて社会連携になりえるような気がいたしておりますけれども、本日のCのキーワード設定の上で考えましたのは、地域の基幹総合大学として、実質的な役割を果たすために、地域社会が抱えております、喫緊の課題の解決に積極的に協力していくことを抜きにして、われわれの役割はないという使命があらわれているように思います。確かに、密着度という点では、ほかに優れた大学がありますが、私どもも実は、地域活動に関する専門領域で強いスタッフを擁しているという自負があります。

ゆえに、地域の将来に関わる切実な課題を選んで、テーブルのキーワードにさせていただいたようなところがございます。そこでいくつかのテーマを考えてみましたら、このなかに、漠然とではありますが、何かストーリーが出てまいりました。それらについて、これから、各テーブルに関連する写真をみていただきながら、紹介させていただきます。

社会連携の活動は基本的に、地域のコミュニティにご協力する、あるいは、ご一緒に働くことだと考えています。お住まいのコミュニティが元気でありつづけますためには、まず、個人が健康



でなくてはなりません。なによりも大切なものとして考えられます。

写真は、グループ⑦の「健康」についてここ数年来、私どもの公開講座で開講させていただいています、健康管理や病気の予防、或いは病気に対する知識を学ぶといった講座のそれぞれ一コマでございます（P. 22の④）。本学におきましては、医学部や附属病院の先生方のご協力を得て、宇部の会場が多くございますけれども、来年度は5つの講座を開いていただけることになりました。このような機会がたくさんに設けられます。

しかしながら、それだけで、皆さんがご健康でなんにも心配がなければハッピーなんです、いざという時がございませうわけで、これに関しましては、どうしても、自治体や組織化された専門家の集団の出番ということになります。本学が少し、お力添えできている部分といたしましては、地域の緊急体制の整備ということがございまして、ここに写真をのせさせていただいておりますのは、御存知の方もたくさんいらっしゃるかもしれませんが、山口県が、平成23年1月に運用を開始しましたドクターヘリの姿でございます（P. 22の⑤）。基地病院は、本学の医学部附属病院でございますので、宇部のヘリポートが写っておりますけれども、こちらから、ドクターヘリは消防本部からの要請を受けますと5分以内に出発をいたします。ドクターヘリには、緊急医療が専門の医師と看護師が搭乗いたしまして、県内全域、ほぼ、30分以内でカバーしているそうです。皆さんの健康に関する安全づくりに協力することができているということでございます。

次に、グループ⑧の「安心・安全」というキーワードにまいります。これは、いろんな切り口がありうるテーマでございますが、本学の取り組み

のひとつのなかで、昨今、大変関心の高い「防災」をとりあげています。本学の工学部を中心に、日本列島の地震活動やその他、水害等の災害、さらに、防災対策といった研究テーマに関しては、また強力な研究者集団が存在いたしておりまして、地域の防災研修会や防災対策の策定等に講師や助言者を常時派遣いたしております。

特に、スライドの写真は、最寄りの地元の地域さんにはいつの防災研修会の様子を撮影したものでございます（P. 22の⑥）。日本を中心とした全体の基準やその他に関する知識を学ぶ、座学に始まりまして、実際の地図を自分たちでつくって具体的な防災対策を自分たちで考える、そして、避難経路を実際に歩いてみるなどと、きめ細かい活動をさせていただいています。しかし、実は、それに関係しております本学教員にお話をうかがってみましたところ、この防災対策が本当に役立つかどうかは、ひとえに、地元のコミュニティがしっかりと絆をつなげているかどうかにかかっているのだというのが持論であるというそういう発言がかえってまいりました。

そこで、ここからのテーブルは、皆様がお住まいになる村や町がテーマになります。

グループ⑨は「農村の再生」というキーワードを掲げております。後ほど、実は、生まれも育ちも東京の真ん中の私が、ここにはいることになっておりますので、飛んだ攪乱者になるかと思いますが、よろしく願います。それで、農業に携わる本職の方も多数ご参加の、あなどりがたいテーブルであろうと承っておりますけれども、こちらは、テーブルにお入りいただく、農学部の教員が担当している公開講座の学習風景をのせさせていただきました（P. 22の⑦）。ひとつは、小麦の産地地消をめざしております「小麦栽培からはじめるパンづくり」という講座でございまして、小麦が写っているのが、そうでございます。もうひとつ、岩がごろごろとありますところが、皆さんご存知の「秋吉台」でございまして、これは、「歩いて、学んで、理解する。カタログにない秋吉台」という講座でございまして、秋吉台の自然環境を实际歩いて、そして、そこで、その環境を長年守ってこられた地元の方々のお話をきいて学ぶという講座でございます。こちらでも、実は、高齢化過疎化が急速に進行している地域であつてですね、秋吉台は我々が頑張らないと、なかなか

維持できないかもしれないというお話も受け賜わっている次第でございます。

次に、まちづくりの2つのテーブルにいかせていただきます。

⑩aは「ローカル」という言葉で捉える「まちづくり」でございます。ここにありますのは、地元の平川地区に経済学部の学生さんたちと指導教員がはいつの活動の様子でございます（P. 22の⑧）。コミュニティの推進協議会が、まちづくり計画を策定されるのにあたりまして、ゼミ全体で協力し、共に学び、共に考え、共に行動を起こすという活動の様子でございます。

次は、まちづくりのもうひとつのテーブル⑩bは、「グローカル」という言葉で設定させていただきました。グローカルというのは、小さな地域を国際社会のなかで捉えようという考え方でございますけれども、例えば、私の所属している人文学部でアジアから来られた大学院の留学生さんが修士論文の報告会などをなさいますとですね、御自分の地域の今後の高齢化に対する対策がどうあるべきか、現状がどうかという研究テーマがボンボン出てきます。日本が先行地域としてどうしていくのかを、ものすごく高い関心で見守っており、かつ、同情的に同感的にみてくれているのがよくわかります。そんなこともありまして、留学生さんや特にアジア地域の方との交流風景を写真では紹介しておりますけれども、そういう視点で、やまぐちの地域の問題も一緒に考えていただければいいんじゃないかなと思ったりしているのです（P. 23の⑨）。

山口大学の社会連携活動を中心にご紹介してしまいましたが、これは山口県という地域の中で日々推進されている「地域づくり」のそのごく一部にすぎません。午後の熟議では、大学がまだ知らない皆さんの活動、日頃のお考えや思いを自由に発言していただき、山口県の掲げる「住み良き日本一」の実現にむけて一歩でも二歩でも前進したいと思えます。

最後に、このような地域づくりを支える大切な要素を確かめておきたいと思えます。それは、豊かな教養と情操をそなえた個人がいてこそということなのです。ゆえに、Aの「究める」のグループ③に「文学と人間」というキーワードを掲げたテーブルにも、是非、ご注目いただきたいと思えます。

現在は、インターネットを通じてなんでも学べる社会になっておりますけれども、その功罪も明らかになりつつある時期に入りかけているかと思えます。その中で、我々の文科系の公開講座などもその一部でございますけれども、心から発した思いを、教養、あるいは、人とのつながり、情操というものにつなげていくにはどうしたらよいかを考えざるを得ません。インターネットなどを通じて容易く多くの知識が得られ、遠くの地域の「同好の士」とつながって愛好の話題で盛り上がることのできる時代ともいえますが、そのことがまた、同じような考えの人だけが結束してしまってそれとこれとの溝が埋まらないような、結果的に人を分断する機能をも果たしてしまっているように思われる場面もございます。そしてまたそれらの情報は文章にせよ映像にせよ、言語的な記号的な手段で伝達される宿命を負っているにもかかわらず、かえって他人の発した言葉の誠実さに対して疑念を抱くようにもなったのではないのでしょうか。

大学は様々な文化的教養の面における皆さんの活動、例えば歴史探訪、読書、芸術鑑賞、そんな面での道連れになりたいという希望も持っております。しかしながら、それらは、教員の側では、正直、かなりの時間と労力のかかる活動であります。そういう効率性だけではない研究や教育があることも知っていただきたいと思えます。

写真は、これまでたいへんご好評を戴いている「俵山を歩いて暮らしの伝承を学ぶ」という公開講座の1コマで、俵山温泉の薬師寺のご住職からお話を伺っている写真も掲載させていただきました(P. 23の⑩)。これからの生涯学習のあるべき姿というものも、ゆくゆくお知恵を拝借したいと考えております。

私は、今までご紹介したような、顔の見えるコ



ミュニティづくりの、根幹になる個人はどうあるべきなのかということの問題意識をもっているものですから、最後のひとこととして付け加えさせていただきます。どうもありがとうございます。

松田：富平先生ありがとうございました。今日ご出席の皆様、Cの「つながる」、社会連携のところは、地域住民の方にとりましても、密接な問題で、非常に分りやすい内容だと思います。

最後に私のほうから、今日の午後の熟議を進めるにあたりまして、熟議の位置づけを、もう一回、整理させていただきます。ただ今、三池先生、平尾先生、富平先生から「究める」「育てる」「つながる」というところで、大学の「教育」「研究」「社会連携」をご紹介させていただきました。

午後からはグループ討議にはいるわけでございます。その時に、Aの「究める」は3つのグループ、Bの「育てる」は3つのグループ、Cの「つながる」は4つのグループとなっています。キーワードは10個ですが、10番目の「まちづくり」は2つのグループに分かれていますので、合計で11グループになっています。この11グループでは、グループごとに関心のある方々が同じテーブルにつき「広場」が生まれます。皆さんはまず、午前中の発表内容から山口大学についての新たな発見があったと思います。午後ディスカッションすることで、「はぐくみ」ます。そして、さらに、グループごとにかなり焦点を絞って議論がされると思います。そうしますと、あるひとつの方向性、まとめができるのではないかと思います。そして発表をします。これが「かたちにする」ということであり、まさに山口大学の理念とする「発見し・はぐくみ・かたちにする」というひとつのプロセスを経るわけです。このかたちは、皆さんが議論をした結果ですから、最初は単なる広場であったものが「知の広場」となるのです。まさに、今日の「熟議 in やまぐち」のメインテーマとしようとしているところに到達することになります。

そうです。知の広場になるのです。最初、いろいろな人々が集まった「広場」だったものが「知の広場」になる瞬間に皆さんが立ち会うのです。いえ、皆さんがつくっていくのです。これが、まさに「熟議」なのです。

今日グループに入ってください、皆さん、ひとりひとりが主役なんだと思っていただきたいと思います。

す。山口県出身の童謡詩人の金子みすずの詩に「わたしと小鳥と鈴と」というのがあります。

わたしが両手を広げても
お空はちっとも飛べないが
飛べる小鳥はわたしのように
地べたを早くは走れない
わたしが体をゆすっても
きれいな音は出ないけれど
あの鳴る鈴はわたしのように
たくさんな歌は知らないよ
鈴と小鳥と
それからわたし
みんな違って
みんないい

(出典：金子みすず詩集)

というものです。ということは、みんながそれぞれ違うんですね。鈴も、鳥も、私も、みんなそれぞれ違うけれども、「みんな違って、みんないい」わけですね。

様々な立場の、みんな違う方々が、主役として今日の「熟議」に参加されます。私ひとりで行うことは限られていますが、異なる立場から様々な意見が出て議論がなされると思います。ただ、みんなが好きなことを言っていたら、意見が発散してしまいいい方向に向かわない。様々な意見を聞きながら、自身が学びながら熟考して発言し

てみる、いろんな意見のなかに、きっと、ひとつの集約点、一番の最適化、ベストな方向性というのがみえてくると思うのです。そういうのを探す、導き出すということが必要です。

ただ集まって好きなことをいうのではなく、「熟議」することによって、皆さんが一生懸命考えた意見を出して、それを集約することによって、あるひとつの方向性がでるのではないかと、これが今日の「熟議」なのだと思います。それが、大学が地域と共生するということであり、大学が、地域とともに発展し、地域も発展していくようなところに展開できる第一歩として、今日の「熟議」があるわけです。こういう趣旨でございます。

そこで、実行委員の方からひとつの提案があります。今日は、大学と地域の垣根は取っ払いましょう。通常、大学では、先生とか教授というような呼び方をしますけれど、肩書きも取っ払ってはどうでしょうか。ということで、今日は、「さん」づけで呼んだらどうかと思います。丸本学長も午後からは、「丸本さん」でよろしいでしょうか。そんなかたちで進めましょう。シンポジウムが終わりましたら、お昼から、「さん」付けでスタートです、ひとりひとりが主役です。今日の「知の広場」がどのようなかたちになるのか、皆さんにかかっているといえましょう。筋書きのないストーリーなのです。さあ、いよいよ、午後から顔の見えるリアルな熟議が始まります。



熟議シンポジウム

パネリストA



三池 秀敏 (みいけ ひでとし)

山口大学 副学長[学術研究担当]・大学研究推進機構

出身：福岡県太宰府市（天満宮と国立博物館のまち）

専門：非線形科学、視覚工学、映像情報科学

趣味：テニス、園芸（サボテン）、山歩き、太陽光発電（?）

大学では電子工学科で磁性体の物性（相転移）を学び、大学院修了後は液晶の物性と応用、医用電子生体工学、動画像計測処理、化学反応に伴うパターンと流体现象、最近では錯視現象やロウソク火炎の振動を研究対象としています。

パネリストB



平尾 元彦 (ひらお もとひこ)

山口大学 大学教育機構学生支援センター 教授

出身：福岡県行橋市

専門：キャリア教育、地域経済学

大学では都市計画を学び、シンクタンクで経済予測などを担当。偶然の出逢いから大学に移り、ひよんなことから就職支援の道に。平成 15 年から山口大学でキャリア教育・就職支援を担当する。

パネリストC



富平 美波 (とみひら みわ)

山口大学 エクステンションセンター センター長・人文学部 教授

出身：東京都

専門：中国の音韻学の歴史です

ある日本の文化は、近代以前はとりわけ中国と朝鮮半島の、近代には西洋の文化の影響を強く受けて形成されてきました。そういう意味で、私は最近とくに、東アジアと欧米の文化の双方について幅広い知識と興味を持ち続けることが、日本人として逃れがたい営みだと思うようになりました。

コーディネーター



松田 博 (まつだ ひろし)

山口大学 副学長[国際社会連携担当]・大学院理工学研究科 教授

出身：愛媛県松山市

専門：土木工学 地盤工学、耐震工学

専門分野においては、人々が安全に、安心して生活ができる社会基盤の整備を目指しています。

A : 究める (研究) 資料

①

山口大学創設100周年記念

地域と共生する大学づくりのための全国縦断熟議
「熟議 in やまぐち」 2012.3.17



山口大学

②

山口大学創設100周年記念「熟議inやまぐち」

「山口大学の知の広場とは」
A 究める(研究)

- ・教育・社会貢献の要としての研究
 - 1) 研究を通じた人材育成(教育)
 - 2) 研究成果を活用する社会貢献(国際・産学公連携)
- ・山口大学の研究の特徴とは？
「異分野間の融合による新たな分野の創造」
 - ・時間学研究所(廣中学長:2000-) :文理融合
 - ・応用医工学、応用分子生命科学(医・工・理・農融合)
 - ・異分野融合の研究推進体(約10推進体)

山口大学

③

山口大学創設100周年記念「熟議inやまぐち」

1. 異分野間の融合による新たな分野の創成



山口大学

④

・時間学研究所(2000-)



山口大学

⑤

時間学研究所とは？
時間学研究所の発展を期待して



Only One!

山口大学時間学研究所主催
旧正月を祝う会 餅つき大会

<http://www.riy.yamaguchi-u.ac.jp/index.html>

山口大学

⑥

時間学研究とは？



山口大学

⑦

時間学研究とは？



山口大学

⑧

医学・工学・理学・農学の連携による
学際的教育研究の推進
(ライフサイエンス分野)



山口大学

⑨

次世代型再生細胞治療法の確立を目指した
トランスレーショナルリサーチユニット
研究推進体代表:坂井田功教授

次世代型自己骨髄由来培養細胞による肝再生・修復療法

ex vivo expansionによる次世代型細胞治療法の開発

⑩

医学・工学・理学・農学の連携による
学際的教育研究の推進
(ライフサイエンス&グリーンサイエンス分野)

微生物の機能進化と環境適応
研究推進体代表:藤島博教授

- 微生物の多様な機能の進化の解明
- 微生物の環境適応能力増強のための分子機構の解明
- 微生物による水環境浄化や生態系の維持・回復
- 地球温暖化、環境汚染等の問題に対応できる微生物の探索

環境共生フロンティア研究拠点
研究推進体代表:宮本雅樹教授

- 次世代に引き継げる安全・安心の公共インフラ整備のためのライフマネジメント(長寿命化)
- 次世代に引き継げる生態系の保全と修復のための高機能生物の探索・作成・活用
- 次世代に引き継げる安全・安心の低炭素社会実現のための環境技術

⑪

山口大学19研究推進体の中で
個性的で独創的なグループ研究

①メタマテリアルの概念に基づく超機能材料・デバイス創成
推進体代表:真田真志教授

- 負の屈折率を持つ「左手系媒質」や「透明マント」を実現するメタマテリアルの設計・制作・特性評価のための基礎技術の確立と応用

Exploring Artificial Materials:
Metamaterials
Exceeding physical limitation

⑫

山口大学19研究推進体の中で
個性的で独創的なグループ研究

②やまぐち学推進プロジェクト
推進体代表:田中誠二教授

- 山口の歴史・社会・文化さらには東(南)アジアの歴史・社会・文化の発掘に貢献する科学
- 山口県の歴史的・文化的な固有性と普遍性の解明
- 研究チーム:
 - 歴史・文獻班(日本古代～近代)
 - 歴史・考古班(縄文石器、弥生土器、歴史考古学)
 - 文芸・民族班(国文学、民俗学)

⑬

山口大学創設100周年記念「熟議」やまぐち

2. 研究成果の活用による社会貢献

⑭

政府の施策と山口大学の産学連携活動の歩み

⑮

過去20年間の共同研究・受託研究件数の推移

(注) 共同研究・受託研究件数集計 (2002～2021年度)

⑯

山口大学の産学公連携の歩み(1991)

⑰

美州省加45クラスター創成事業(2009-2013)
産学共同研究による地域発イノベーション

①やまぐちグリーン部材クラスター(中核機関:山口県産業技術センター)

- ・研究機関: 山口大学(共友教授)、東京理科大学(戸嶋教授)
- ・LED、太陽電池、液晶等の省エネ・省資源型の高性能部材の開発
- ・ナノ粒子応用グリーン部材の開発、黒シリコンの減産・再生

シーズの「見える化」とイノベーション創出シナリオ

URL: <http://www.ict-yamaguchi.ac.jp/area/cluster/01.html>

⑱

山口大学創設100周年記念「熟議」やまぐち

山口大学

山口大学の研究活動

- ・ 研究組織
 - 1) 研究推進体(19プロジェクト)
 - ・ 世界水準の研究推進拠点
 - ・ 地域の課題研究推進拠点
 - ・ 分野横断的、学際的プロジェクト
 - ・ 重点5分野を対象に大学として認定
 - 2) 研究所等
 - ・ 時間学研究所(山口大学)
 - ・ 安全環境センター(工学部)
 - ・ 中高温微生物研究センター(農学部)
 - ・ 修復医学教育研究センター(医学部)
- ・ 研究支援
 - 1) 呼び水プロジェクト
 - ・ 学長兼理事長による戦略的研究推進プログラム
 - ・ 予算総額8500万円
 - ・ 毎年8-12の研究プロジェクト採択
 - ・ 若手、中堅研究者の支援(競争的資金獲得の呼び水)
 - 2) 若手研究者支援
 - ・ 科学研究費応募への資金援助
 - ・ 申請書のブラッシュアップ
 - 3) 研究活動の広報

B：育てる（教育） 資料

①

熟議 in やまぐち 山口大学の知の広場とは

育てる（教育）



山口大学大学教育機構 平尾元彦
YAMAGUCHI UNIVERSITY

②

学生が 大学で

学ぶこと そして、 身につけること

は、なんでしょうか？

③

道を自ら切り開く力

④

専門教育

キャリア教育

大学生

基礎教育・教養教育

⑤

専門教育

キャリア教育

社会を元気にする 人材を育成

基礎教育・教養教育

⑥

山口大学憲章 基本理念

- 1 「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の創造
- 2 共同・共育・共有精神の涵養
- 3 公正・平等・友愛の尊重

⑦

山口大学憲章 教育目標

- 1 専門性と社会性の育成
- 2 自己啓発・自己研鑽
・自己管理の徹底
- 3 知識社会に応える能力の醸成

⑧

われわれが実現すべきこと

知の広場

⑨

本日のグループ別 **グループ④ 基礎学力**

大学に求められる教育内容について

キーワード

グラデュエーション・ポリシー(GP)
カリキュラムマップ
目標達成型教育 TOEIC
情報基礎 (リテラシー/セキュリティ・モラル)
学生ポートフォリオ

⑩

本日のグループ別 **グループ⑤
コミュニティ・スクール**

学校・家庭・地域の地域包括コミュニティづくりをどうすすめるか?

キーワード

学生自主活動ルーム
おもしろプロジェクト
インターンシップ
PBL (project based learning)

⑪

本日のグループ別 **グループ⑥ 就職**

どのような社会人教育をすべきなのか?

キーワード

正課内外のキャリア教育 職業リテラシー向上
教育連携&相談重視
キャリア学習
①キャリアの理論 ②社会・経済の理解 ③社会人基礎力
学内業界・企業研究会

⑫



⑬



⑭



C : つながる (地域づくり) 資料



⑨

グループ⑩b
「まちづくり～グローバル～」

まちづくりを
グローバルな視点で捉える

自轄まちづくり交流・ワークショップの様子

⑩

～明日の山口大学ビジョン～

- ・心の豊かさの実現、心と体の健康(個人)
- ・環境の維持・保全(自然環境)
- ・文化・歴史の継承(社会・文化的環境)
- ・持続的発展可能な社会の構築(地域社会)

やっぱりいいね
然も 完 顔も山 県
新ぞぞう住みやすき日本一

⑪

みえていますか?
伝統・歴史・文化……。

伝統・歴史・文化

熟議シンポジウム

コーディネーター 資料



③

地域と共生する大学づくりのための全国縦断熟議
「熟議 in やまぐち」 2012.3.17

山口大学

「知の広場」のテーマ

- ・ 地域社会が抱えている課題をどのように解決していけばよいのでしょうか。
- ・ このような課題にわれわれはどのように向き合えばよいのでしょうか。
- ・ 山口大学の「知の広場」に集まり、「熟議」を通じてみんなで考えてみましょう。
- ・ 実りある知の循環をつくりだす第一歩を、今日、ここで生まれる「知の広場」からつくりましょう。



手法としての『熟議』とは

文部科学省 生涯学習政策局生涯学習推進課生涯学習推進係 係長
牧野 浩司

皆さんこんにちは。文部科学省生涯学習政策局の牧野と申します。

先程までの説明を聞いて、「えらいところにきてしまったなあ」と思われている方々、正直に挙手をお願いしたいんですけども。大丈夫ですね。あ、何人かいらっしゃいますか。もう一度お願いします。大丈夫です。もう、逃げられないと思いますので。よろしくお願ひしたいと思います。

私のほうから、手法としての熟議とは、ということで、テーマを与えられておりますので、まず、熟議とは、ということと、文部科学省が取り組んでいます熟議の展開について、説明させていただければと思います。

適宜資料もご参照いただきながら、耳を傾けていただければと思います。

熟議とは、多くの当事者による熟慮と議論を重ねながら課題解決、政策形成をしていくことをいいます。

- 一つ目として 多くの当事者が集まる
- 二つ目として 課題について、学習、熟慮し議論をする
- 三つ目として 互いの立場や果たすべき役割への理解が深まる
- 四つ目として 解決策が洗練される。
- 五つ目として 個々人が納得して、自分の役割を果たすようになる

そういうプロセスのことを指します。

イメージがなかなか湧かないと思いますので、簡単に流れを説明させていただきます。まず、テーマについての課題をみなさんにお配りしている付箋に書き出させていただきます。1行か2行程度です。それを、参加者が発表しながら、模造紙にぺたぺた貼っていく。その作業を行っていきます。次に出された課題についての解決策を同様に、付

箋に書き出して、貼りだしていく。最後にそれらに関連づけて、みんなで議論を行いながら、まとめて、発表していただく。

おおまかな流れを説明させていただきますと以上になります。

こうしたことで、何が起こるかといいますと、いろんな人の意見を聞くなかで、思いがけないアイデアが生まれたりですとか、他者への理解が深まったり、また、自分自身が何をすべきか、そういうことが、明らかになっていくという効果が期待されています。大学の熟議以外にもですね、自治会であるとか、職場、あとは、家族会議とかですね、そういうことにもお使いいただける手法ではないかと思ひます。

先程のシンポジウムで、山口大学の取り組みをご紹介いただきました。なかには、地域の課題とか、山口大学、もっとこうすればいいのではないかと発見できたこともあったように思ひます。短い時間、1時間40分ぐらいの議論が午後からありますが、そうした課題に対する解決策をみんなで育みあいながら、各グループの発表までこぎつけていっていただければと思います。

続いて、文部科学省が行っています熟議のこれまでの状況と、今後の展開について少し述べさせていただきます。文部科学省では、平成22年6月から熟議の取り組みを開始しております。

これまでに150ヶ所で開催されています。山口県内では、昨年1月になりますが、長門市において、地域の特性を活かした初等中等教育の連携について議論がなされたと伺っています。また、最近では、3月11日に発生しました東日本大震災。こちらの震災後の教育、あるいは、地域のあり方を考える被災地での熟議、子どもたちによる子ども熟議の展開も見せております。詳しくは、文部科学省の熟議サイトを開設しておりますので、適宜ご参照いただければと思います。

熟議シンポジウム

こうしたなかで、昨年6月に「地域と共生する大学づくり」を掲げまして、大学リレー熟議を本格的にスタートいたしました。これまでにプレ実施の大学を含めると、7大学で実施されております。資料にありますとおり、来年度には、広島修道大学、富山大学、神戸学院大学と少しずつ広がりをみせている状況でございます。

これまでの開催実績をすこし紹介させていただきますと、琉球大学、トップバッターでありましたけれども、ひとづくりと、まちづくりへの大学の貢献ということをテーマに熟議いたしました。

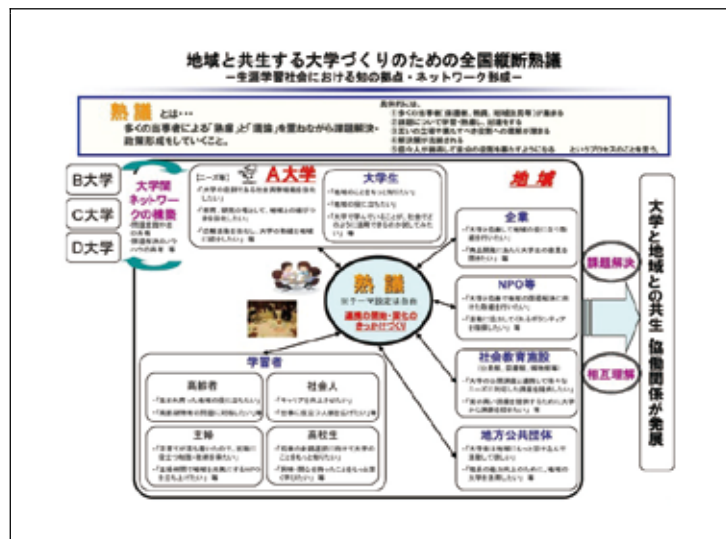
三重大学におきましては、キャリア教育の授業の一環として、大学の1年生がファシリテーターを務めて、様々なテーマを熟議しております。また、北海道教育大学、東京学芸大学、香川大学と続いて今回山口大学で開催のはこびとなっております。いずれの大学も特色を持ちながら、いろんな人たちを地域の人たちを集めて実施しているというふうになっています。

冒頭に城井政務官からもお話がありましたけれども、地域との関係を構築、強化し、今後大学がより一層地域に活用され、地域を元気にすると。今回の熟議をきっかけに大学と地域が双方向性をもった様々な取り組みに発展するきっかけづくりをこれからの熟議で獲得していただければと思います。

最後になりますけれども、先程、松田副学長のほうからご説明いただいた熟議のコンセプト、みんなが主役、金子みすずさんの詩を引用されて「みんな違って、みんないい」のほかに、「気楽にまじめに」ということが熟議のコンセプトのひとつになっています。

この後、昼食をはさんで、少しリラックスした気分で議論に臨んでいただきますので、どうぞよろしくをお願いします。

私のほうからの説明は終わらせていただきます。バトンは、皆様のほうにお預けいたしますので、どうぞ、午後からよろしくをお願いします。



牧野 浩司 (まきの こうじ)

文部科学省 生涯学習政策局生涯学習推進課生涯学習推進係 係長

出身： 忍者の里（三重県名張市）

趣味： 釣り、長距離ドライブ(400km ぐらいなら平気)

大学リレー熟議の初代担当者として、平林課長から『DJ・マキノ』（※）の名を賜り、南は琉球大学から北は北海道教育大学まで7大学の熟議にたずさわる。大学熟議を通して出会う、大学と地域を愛してやまない、時にはかなり暑苦しい情熱に溢れた教職員とのやり取りに喜びを見いだす。

（※）大学熟議 (Daigaku Jukugi) の略らしい。

「グループ熟議」の全体のながれ

辰己 佳寿子

Tatsumi, Kazuko

(山口大学 エクステンションセンター 准教授)

午前中の説明を聞かれて、「えらいところにきてしまったなあ」と思われている方がいらっしゃるようですが、いよいよ本番です。会場をみておわかりのように、午前とは打って変って、リラックスした雰囲気です。「グループ熟議」を行いたいと思います。この会場は、昨日までは、学生や教職員が集う学食でした。昨夜、学生を中心としたスタッフで、力を合わせてこの会場をつくりました。当初は、ホテルで開催する案もあったのですが、大学の「熟議」なので、大学内で開催すべきであり、日常の学食を非日常空間に変えてしまうおうということになりました。「熟議」は、会場づくりの段階から始まったといえます。各テーブルには、付箋やマジック等の「熟議」の道具が置かれています。さあ、「熟議」のハード面の準備は整いましたので、これからはみなさまが「熟議」のソフト面をつくっていただくこととなります。

さて、「グループ熟議」を始める前に、「熟議」参加の五箇条を説明いたします。

- 一、他の人の発言をよく聴きましょう
- 一、発言は、簡潔に分かりやすく伝えましょう
- 一、人を傷つけない発言を心がけましょう
- 一、共感や感想、自分の考えが変わったことなどを伝えましょう
- 一、一回の発言で言いたいことはひとつだけにしましょう

以上の5つのお約束事です。さらにここに、山口大学ならではのローカル・ルールを加えたいと思います。午前中のシンポジウムで提案された、

- 一、「〇〇さん」と呼び合ひましょう！

というものです。肩書きや所属をこえたかたちで、ひとつのテーブルに集い、気兼ねなく「熟慮」と「議論」を重ねる「知の広場」を目指しています。

次にタイム・スケジュールを説明します。まず、これから15時まで各テーブルで「熟議」を行っていただきます。まず、①オリエンテーションでは、自己紹介の後、それぞれのキーワードの課題設定の背景等をファシリテーターが説明します。その後、付箋等を活用して②課題問題点などを出し合い共有化し、③課題を整理・分類し、重要な課題に絞ります。そして、④重要な課題の解決策やそれぞれの役割について意見交換し、議論を深めていきます。後半には、⑤議論のまとめを行います。15時から16時には、グループをこえた意見交換会を行います。他のテーブルではどのような「熟議」がなされたのかご関心があると思いますので、グループをこえた交流を図ってほしいと思います。また、16時から、「A：研究(究める)」、「B：教育(育てる)」、「C：社会連携(つながる)」ごとに簡単なまとめを行い、午前中のシンポジウムと午後の「グループ熟議」の関連性をお示ししたいと思います。

午前中は、ステージという高いところから山口大学の関係者がお話しするシンポジウムであり、みなさまは聞き役でしたが、これからは、軸を逆転させまして、みなさま、ひとりひとりが主役となる「グループ熟議」が始まります。これからは、みなさまが主役でワンシーンをつくりますから、映画の撮影現場等で使われる「カチンコ」を用意させていただきました。よって、「グループ熟議」の始まりは「アクション！」で切り出したいと思います。みなさん、ご準備はよろしいでしょうか、カウントダウンを開始します。

「10、9、8…、…3、2、1、アクション！」

グループ熟議

「グループ熟議」の全体のながれ 資料

①

②

参加の五箇条(「熟議」虎の巻より)

- 他の人の発言をよく聴きましょう
- 発言は、簡潔に分かりやすく伝えましょう
- 人を傷つけない発言を心がけましょう
- 共感や感想、自分の考えが変わったことなどを伝えましょう
- 一回の発言で言いたいことはひとつだけにしましょう
- 「〇〇さん」と呼び合ひましょう!

③

グループ内熟議(13時～15時)

① オリエンテーション
(キーワードの説明、自己紹介の続き)

④

グループ内熟議(13時～15時)

- ② 課題問題点などを出し合い共有化する。
- ③ 課題を整理・分類し、重要な課題に絞る。
- ④ 重要な課題の解決策やそれぞれの役割について意見交換し、議論を深める。

⑤

⑥

⑤ 議論のまとめを行い図式化する。
(ホワイトボードに模造紙を掲示)

⑦

グループをこえた意見交換会
(15時～16時)

⑥ 誰もが説明できるように

⑧

16時～16時半 ABCサブテーマごとの発表

地域住民ひとりひとりが当事者性をもってそれぞれの役割を果たしていくプロセスを構築していくための多様な主体が集まり「熟慮」と「議論」を重ねる(知の広場) UNIVERSITY

大学が研究する意義を考えてみませんか？

～研究・発信・かたちにするために～

林 里織

Hayashi, Saori

(山口大学 産学公連携・イノベーション推進機構 講師)

1. はじめに

大学の本来の使命は、歴史的には『教育』と『研究』である。山口大学では、研究を通じた教育・人材育成が大学の重要使命であることを認識し、研究活動に裏付けられた教育を行っている。近年、社会情勢の変化とともに大学に期待される役割も変化しており、大学の「第三の使命」として『社会貢献』が加わった。人材育成・学術研究そのものが長期的な観点からの社会貢献である一方で、研究成果の実用化・技術移転等を通じた、より短期的・直接的な貢献が求められるようになった。

山口大学では、研究基本指針として、理念である「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」を基本とし、地域の基幹総合大学であるとともに国際社会を見据えた教育研究機関として、個性的・独創的な研究をはぐくみ、人類の英知と幸福に貢献する知の創造・文化の創成をめざすことを掲げている。

7学部・9研究科を有する山口大学は、研究といっても多様な性格や形態があるため、その特徴を鑑みて、今回の熟議では、①最先端研究、②地域連携型研究、③文学・人間、の3グループを設定した。



2. 熟議の内容

グループ①：最先端研究

理系研究を中心とした、山口大学の最先端研究をテーマとした。身近な製品の中に最先端の研究が使用されているなど、研究は決して自分とは関係のない世界の話ではないという事、また大学はそういった先端のサイエンスに触れる機会を創出しているという事を知って頂く場とした。更には、山口大学にどのような研究を求めるかについても熟議する場とした。

グループ②：地域連携型研究

短期的・直接的な社会貢献をもたらす研究を中心に、山口大学の産学公連携を中心とした共同研究と地域貢献をテーマとした。具体的な事例紹介も交えながら、山口大学の地域連携型研究のあり方について熟議する場とした。

グループ③：文学・人間

文系研究を中心に、真理を探究する山口大学の人文科学系の研究をテーマとした。歴史をひも解く研究は、近年メディアなどで歴史の新事実といったかたちで取り上げられるなど知る機会もあるが、理系研究と比較すると目に見えない、触れる機会が少ないと思われる文系研究にはどのようなものがあるのか、またその研究をする意義とは、について熟議する場とした。

3. おわりに

今回は初めての試みという事もあり、『山口大学・研究』という広いテーマでの熟議とした。その一つの理由に、大学が行っている研究は、大学教職員が想像している以上に地域の皆様に伝わっていないので、今回の熟議を通して、まずは山口大学の多様な研究活動の一端を知って頂きたい、というものがあつた。関連する象徴的な出来事が、

グループ熟議

2009 年末の事業仕分けである。天然資源に乏しい日本が、将来にわたって先進国の一員として人類社会の持続的発展に貢献し豊かな生活を実現するために、『科学技術創造立国』をめざしてきた一方で、事業仕分けにおいて、科学技術関連予算が大幅にカットされ、ノーベル賞・フィールズ賞学者をはじめ、大学学長、学部長、学会関係者らが相次いで緊急声明・要望書・提言を発信するという事態が発生した。この事については、様々な見解があるためここでの議論の対象とはしなかったが、少なくとも、「我々研究に携わる人間が、納税者に『分かりやすく』情報を発信してこなかった、説明をしていなかった」という点に異論はないと思われる。

研究、中でも特に基礎研究は、すぐに分かりや

すく目に見える形での何か、というのではなく、10 年後、20 年後、何かの基盤として活用されていけば御の字である。大学での基礎研究は、将来新しい何かを実用化する際に、あるいは既存技術をより良くする際に必要となるであろう原石を磨きながら夢を添えて宝石箱へ並べる、そんな宝石箱がたくさん詰まった壮大な図書館創りを行っているようなものだと思ふ。

今回の熟議で、真理の探究、夢のある研究、地域に根差した研究を行い、相手の立場になって伝え発信し、産・学・公など異なるセクションの人達で課題に向き合うチームを作る、という山口大学の研究のあり方について地域の皆様から提言いただいた。これをかたちにするために次の熟議へとつなげたい。



「A：究める」オーガナイザー



林 里織 (はやし さおり)

山口大学 産学公連携・イノベーション推進機構 講師

出身： 山口県下関市

学歴： 山口大学工学部卒業

2010年4月より現職

A : 究める (研究) 資料

①

A : 究める (研究)
～コーディネーター：林 聖隆～


□ 大学が研究する意義を考えてみませんか？

【学部】
人文・教育・経済・理・医・工・農

【研究科】
人文科学・教育学・経済学・医学系・理工学・農学・
東アジア・技術経営・連合獣医学

【その他】
特設学研究所・医学部附属病院・教育学部附属学校など

- ◆ 最先端研究
- ◆ 地域連携型研究
- ◆ 文学・人間



②


①最先端研究
～ファシリテーター：柏本公一・渡宏守～

□ 山口大学の最先端研究について

【現状・課題】
◆ 大学の研究が外にみえていない

【基礎研究】
◆ ノーベル賞級の研究、夢のある研究を

【応用研究】
◆ 夢の実現化
◆ 山口県らしい研究を



- ◆ 大学経営にも着目している
- ◆ 見る人の立場が重要
- ◆ サイエンスライターとの育成


③

②地域連携型研究
～ファシリテーター：鎌原哲朗・清水谷卓～

□ 山口大学の産学公連携を中心とした共同研究と地域貢献について

【現状・課題】
◆ 連携で何ができる・・・？
◆ 地域課題を解決する研究者がいない
◆ 地域経済の専門家が少ない

【解決策】
◆ 場の提供



- ◆ 「課題解決推進機構」をつくる
- ◆ 行政など学外にも対応組織も必要
- ◆ フットワークの良い人達でネットワーク構築を


④

③文学・人間
～ファシリテーター：山本真孝・吉村眞～

□ 真理を追求する山口大学の人文科学系の研究について

【真理とは何か？】
◆ 文学作品の真理

□ 大勢の人が読み後世に残っていく力
→この方に文学の真理が潜んでいる
→これを追求することが文学の研究



- ◆ 力を言葉にする
- ◆ 人々が身体で生き生きする勇気を与えてくれる

⑤

A : 究める (研究)
～大学が研究する意義を考えてみませんか？～


□ 今後の山口大学に望まれること

【研究】
◆ 真理の探究、夢のある研究、地域に根差した研究を

【発信】
◆ 相手の立場になって伝える

【形にするために】
◆ 産・学・公など異なるセクションの人達で、課題に向き合うチームを作る

⇒ “熟議”



大学の研究に求めたいこと

～最先端を産み出し、伝える工夫・努力をひたむきに～

堤 宏守
Tsutsumi, Hiromori

(山口大学 大学院医学系学術研究科[工学系] 教授)

1. はじめに

大学に求められる機能の中で、最大の比重を占めるのは「教育」である。しかしながら、過去の事実や結果だけを伝承する「教育」のみならず、今、そして未来を作り出す「教育」を行うことも大学教育には求められている。このような教育は、研究とセットになって始めて実施できるものであり、研究を大学で行うことの意義は、ここに集約される。しかしながら、昨今の財政状況の厳しさなどにより、大学において行われる研究に対して、財政面から厳しい査定が行われるとともに、研究内容や研究成果に対する社会への説明も求められている。このような状況下で、大学において研究を行うことの意味や意義について、再度考える必要がある。そこでグループ①においては、大学で最先端研究を行う意味、大学で行って欲しい研究のあり方などについて、熟議を行うこととした。さらに山口大学の研究成果の社会への発信に関しても、参加者から意見を出していただいた。

2. 熟議の内容

内容を大きく分類すると以下の通りになる。なお、本グループは参加者が高校生から企業を定年退職された方まで幅広かったため、かなり幅のある意見があるので、無理にまとめることはせずに、意見などを箇条書きで示すこととした。

(1) 大学の研究に求めたいこと

(基礎的な研究に関わる部分)

- ・ 夢の持てる研究
- ・ 一般企業が手を出しにくい研究（長期のもの、非常に基礎的な研究）
- ・ 先端研究を通じて人を育てる研究
- ・ これまでの概念を壊すような研究
- ・ ノーベル賞級の研究



- ・ 基礎的で基本的な研究（直ぐには役に立たないかも知れない研究、時間をかけてじっくりと）
- ・ もうけを求めない研究
- ・ 基礎研究は、得られた成果が、異なる研究分野への発展も期待できる（思わぬところで、新しい展開がある可能性あり）

(2) 大学の研究に求めたいこと

(応用的な研究に関わる部分)

- ・ 実社会に還元できる研究
- ・ 大学の所有する特許を整理して、大学発企業を作って欲しい
- ・ 研究後の将来展望を持った研究

(3) 山口大学に実施して欲しい研究テーマ

(具体的な内容)

- ・ 環境関連の研究
- ・ 震災復興に役立つ研究
- ・ 省エネ、産業の強化につながる研究
- ・ 山口県らしい研究
食品（例：かまぼこ）／シリコンなどの半導体材料／高分子材料などの材料関連の研究／秋芳洞の研究（例えば、景観の保存、苔の繁茂を防ぐ、など）

- (4) 最先端研究を伝えることの重要さと難しさ
- 大学の研究が分かりにくい、Web ページを見ても分かる言葉で書かれていない
 - 受賞などで社会に始めて分かってもらえる研究が多い
 - 山口大学の中の研究が見えない、分からない
 - 研究成果の発信は、大学経営にも直接つながっている
 - 研究と経営の密接なリンクを意識した活動の必要性
 - 研究成果の実用化などには、きちんとしたバックアップが必要(例えば、山口 TLO のような活動) → 関西 TLO はかなり広い活動を行っている
 - 大学内の密接な連携が重要
 - 地域との交流の重要性
 - 見る人の立場を考えた広報、アピールの重要性
 - 研究情報などの情報を集める仕組みの重要性
 - モラル、説明責任の重要性、このためにも広報活動が重要
 - 時間学研究所も、広く知られてはいない
 - 一般の新聞もきちんと科学的な内容を伝え切れていない
 - サイエンスライター的重要性、育成

(5) その他、皆さんから出た意見など

- 学生の育成に研究を活かして欲しい
- 博士学生の出口確保には、やはり地元企業があることが重要
- 山口県における地元定着率を上げるためには、大学の研究をベースにした新しい企業誘致、産業創造が不可欠

3. おわりに

当初、考えていた「大学において最先端研究を行うことの意義」については、議論できるところまでは至らなかった。それ以前の課題として、「大学の研究成果」の発信方法が浮き彫りになってきた。これは、一研究者が時間を割いて Web ページに自分の研究を易しく解説する、というようなことで解決できる問題ではなく、大学内の研究者の研究テーマを分かりやすい言葉で説明するような専門職員(サイエンスライター)による取り組みが必要と考えられる。また、山口県への若者の定着率を高めるためには、企業誘致による雇用の確保が不可欠であり、その際に、企業に対して大学の魅力をどれくらい示すことができるか、言い換えれば、「山口大学の持つ研究力に期待して山口県に企業の研究所を設置した」と言ってもらえるような大学になりうるかどうかであり、ここでも大学の研究力が問われる時代となっている。さらには、若手研究者の確保には、博士人材の輩出も不可欠であり、その点も今後の検討課題であると考えられる。



グループ熟議

グループ①への参加者

1	川村	宗弘	地方独立行政法人山口県産業技術センター
2	橋本	忠典	周南市在住
3	藤村	靖	宇部市産業経済部工業振興課
4	三池	秀敏	山口大学（副学長[学術研究担当]）
5	宮本	晃伸	広島県立府中東高等学校（生徒）
6	望月	愛己	広島県立府中東高等学校
7	柏木	公一	宇部興産株式会社
8	堤	宏守	山口大学大学院医学系研究科[工学系]（教授）
9	石底	大海	山口大学理学部（学生）

ファシリテーター（学外）



柏木 公一（かしわぎ きみかず）

宇部興産株式会社 研究開発本部企画管理部

出身：鳥取県境港市

専門：有機化学、触媒化学

趣味：散歩

ファシリテーター（学内）



堤 宏守（つつみ ひろもり）

山口大学 大学院 医学系研究科[工学系] 教授

出身：長野県塩尻市

専門：機能高分子化学、電気化学など

趣味：読書、旅行（のんびりした旅）、
電子工作（愛読書：トランジスタ技術）



グループ② 地域連携型研究

山口大学の産学公連携を中心とした共同研究と地域貢献

清水谷 卓
Shimizutani, Takashi

(山口大学 産学公連携・イノベーション推進機構 産学連携コーディネーター)

1. はじめに

地域経済と社会が疲弊している昨今、その地域にある大学だけが発展することはあり得ず、大学の産学官連携の取り組みに関して、単なる産・学のシーズ・ニーズ・マッチングの時代から、地域創造に視点を向けた取り組みが重要になりつつある。そこで、本学の知を利用した産学公連携も、地域創造に寄与することが重要であると認識されている。地域性を有しない大手企業との産学連携の議論と対比して、本グループにおいては、山口地域の特性や課題を踏まえて、本学が地域創造に寄与する産学公連携を中心とした共同研究に関して熟議を行った。

2. 熟議の内容

本学の地域連携型研究の熟議にあたり、次の3つのステップで熟議を進めた。

- ステップ1： 地域連携型研究を行うに当たっての課題の抽出
 ステップ2： それぞれ示された課題についての類型化
 ステップ3： 類型化された課題に対する解決策の提案

ステップ1では、19もの課題が抽出された。

次に、ステップ2として個々の課題の類型化を行った結果、抽出された19課題は3つに類型化された(①方法論、②専門分野、及び③大学組織内の問題)。類型化された3つの課題の概要を以下に示す。

①方法論

大学内には地域連携が必要な地域の課題に対応する積極的な組織が不在である一方、地域の課題



を受け止める地方行政の担当窓口の対応が悪く、地域の声を汲み上げる仕組みがない。具体的に、中心市街地空洞化や山口市阿東地区(中山間地域)の活性化などの課題に対して、大学と行政が連携して、それらの課題の解決の模索や、情報発信を行う場の創造が必要であることが指摘された。

②専門分野

地域特性に基づいた循環型経済の構築が山口地域にとって必要であるという認識がグループメンバー間で共有された結果、当該地域において地域経済分野や漁業・林業分野の専門家の必要性が指摘されたが、本学において、これらの分野を専門とする教員層が希薄であることが課題として抽出された。

③大学組織内の問題

上述の2つの分野に収まらない課題を集めた結果、大学組織内の問題として取り扱うことで、1つの共通点が見いだされた(具体的な例：“大学は共同研究の件数重視でフォローアップがない”、“山口大学は企業との連携が弱い”、“大学はどこまで地域貢献する気があるのか?”、“研究テーマ・内容の紹介などはあるが現実的に社会でどれだけ活用されているか把握している人がいる

グループ熟議

か?”、“本学の学生が地域企業を知らない”。

最後に、ステップ3として類型化された課題に対する解決策を議論した結果、類型化された3つの課題のそれぞれに対して、解決策がまとめられた。

「方法論」の課題の解決策としては、極端な解決策ではあるが、「課題解決推進機構」のような積極的に地域の課題解決に働きかける組織を学内に設立する一方、行政側も、それに対応する組織を形成し、両者が連携し情報発信しながら解決していくという結論を得た。しかし当面は、フットワークの軽い人員によるネットワークで乗り越えるのが現実路線であることが付け加えられた。

次に「専門分野」の課題の解決策としては、将来的には、大学内に地域ニーズを解決できる人材を雇用していくことが求められる一方、現実的には、大学間の人材的連携を深めることにより、地域に必要な専門家を外部から調達するという結論に至った。

最後に「大学組織内の問題」の解決策としては、

大学組織の問題として具体的に議論を進め、改善していくという結論に至った。

3. おわりに

全体的には、グループメンバーの多くが互いに初対面にも関わらず、熟議のテーマについての共通認識がなされていたため、枠を外れた議論が回避され、本テーマに関する積極的な議論がなされた。参加メンバーの多くが、この度議論された結論に対して、「具体的な取り組みにつなげなければ意味がない」という認識であった。

予想外の効果としては、偶然にも山口市に拠点を置くメンバー（住民、行政、企業体、大学）が多く集まったため、新たな具体的連携活動の約束がメンバー間でなされる等、グループ熟議における議論の化学反応がみられた。

今後の取り組みに関しては、整理された3つの課題に対する解決策が、直ちに解決が見込めるものではなかったため（①大学と地域行政が共同で作りに上げていくべきもの、②大学内で長期的に作り上げていかねばならないもの、及び③大学内組織の任務の徹底や改造の必要性に関するもの）、地道な改善を重ねていくことの重要性が示唆された。

参考文献

- ・ 関西ネットワークシステム編『現場発！産学官民連携の地域力』2011年、学芸出版社



グループ②への参加者

1	有田	實	山口市中心市街地活性化協議会
2	石川	貴之	山口市企画経営課
3	笹原	裕	株式会社山口銀行地域振興部
4	菅波	智洋	岩手大学地域連携推進センター
5	福永	伸二	山口大学大学院教育学研究科（大学院生）
6	村田	尚士	山口市商工振興課
7	吉見	正孝	阿東文庫
8	篠原	哲朗	やまぐち産業振興財団
9	清水谷	卓	山口大学産学公連携・イノベーション推進機構
10	黒木	健吾	山口大学工学部（学生）

ファシリテーター（学外）



篠原 哲朗（しのはら てつろう）

財団法人やまぐち産業振興財団 CO2 排出削減コーディネーター

出身：福岡県福岡市

大手住宅メーカー退職後、2011年4月より現職

ファシリテーター（学内）



清水谷 卓（しみずたに たかし）

山口大学 産学公連携・イノベーション推進機構 産学連携コーディネーター

出身：鳥取県米子市

2010年9月より現職、前職は広島大学産学連携センター特命准教授



文学の「力」

～人間を探求する～

吉村 誠

Yoshimura, Makoto

(山口大学 教育学部 教授・大学教育機構学生支援センター センター長)

1. はじめに

山口大学の研究活動の一端として「文学」を取り上げ、外部から見た研究の現状や成果、欠点などを指摘されながら、その在り方を議論する場としてテーマ設定を行う。

2. 熟議の内容

- (1) 古典文学が読み継がれていく力とは何か。また現代の文学作品でどれが後世に残るか。
- (2) 文学作品は、追体験させる力があり、自分の世界観が広がる。
- (3) 世の中で起こっている様々な事象を目の当たりに再現させる力を持っている。

【課題】

- ・ 事実とは何なのか？真理とは何か？
- ・ 裏紙の色は本当に白色なのか？何色に見えるのか？
- ・ 私たちは今どんな時代を生きているのか？
- ・ 歴史書は事実なのか？古事記に書いてあることは信用できない（歴史書信用しているが、誰も体験や確認していない）
- ・ 文学の事実と真理の違いとは何か？
- ・ 文学とは？文学に法則性があるのか？

【解決案】

- ・ 真理はその人の考え方や感じ方
- ・ 事実は無数にある
- ・ 事実の積み重ねが真理の道しるべ
- ・ 事実とは共通認識（概念を崩してみる→大学で新事実発見？）
- ・ 事実はある時点で起きた事象、観念的なもの
- ・ 主観…自分にとっての真理
- ・ 学ぶために生き、生きるために学ぶ（Live to learn. Learn to live.）



- ・ 文学小説は面白いから読む、真理探求が目的ではない
- ・ 法則性が真理（理系の考え）は法則性の導き、事実の積み重ねが実験、再現ができる
- ・ 生きるために生まれ、愛するために生きる（Born to live. Born to love.）
- ・ 文学は主観的に残したいもの
- ・ 文学的な価値、合わせてきたものが残るべきものが資料、文献としての要素
- ・ 真理は後付け、人間の心をえぐりかえすもの

【その他の意見等】

- ・ あかあかや
あかあかあかや
あかあかな月（川端康成）
- ・ 埋もれていく資料、社会的評価
- ・ 知識の倉庫、大学の役割

【まとめ】

- ・ 文学の真理とは共感できるもの、追体験できるもの、時代をこえて生きていくもの
- ・ 文学は人を救うことができる
- ・ 文学のちからを言葉にしていくこと→大学での文学の探求

【感想】

- ・ 本を読む楽しさ
- ・ 文学的な真理の考えを思い返す
- ・ 言葉の力、文学の持つ力を言葉によって改めて表しに行く
- ・ 多くの人に共感に巻き込み次の世代に残っていく文学の面白さ（魅力）ってなんだろう
- ・ 他人を知って自分を深める、他人の理解を知って人間を知る
- ・ 力のある言葉…生きる力、幅が広がる、人生観が深まる、価値のあるもの、残していく作業

3. おわりに

「文学」とは、人間に内在する様々な問題を描き出し、追体験することによって認識を深め、人生の糧となるものであるという結論に達したが、その作用を理論的な言葉で議論するには到らなかった。強いて言葉にするのが「研究」であるのかも知れないが、我々の考える研究とは、真理のコードを見つけ出し、その視点から文学性を分析することにある。そういう意味では一般の人と研

究者の間には認識の開きがあり、議論がかみ合わない。従って今後人文系の問題を議論に載せるには、「真理を探究する研究」ではなく、「文学の力とは何か」を山口大学はどのように教育しているかという教育活動の方がお互い同じ土俵で議論出来ると思う。

参考文献（ちょっと専門的ですが…）

- ・ 「万葉集原論」中西進、おうふう、1976、中央公論社（中西進全集所収）（万葉集研究にあたって、現象学的方法の紹介）
- ・ 「日本文学講座 方法と視点」西郷信綱他、1978、大修館書店（歴史社会学的方法による文学へのアプローチを説明）
- ・ 「折口信夫全集 1～3」（古代研究）、1975、中央公論社（折口民俗学による古代文学の分析とその方法論の解説）
- ・ 「共同幻想論」吉本隆明、1982、角川書店（改訂新版）（我々の持つ認識の追求であり、文学のコードの探求には不可欠なもの）

※まだまだ紹介したいものがありますが、まずはこのぐらいで。



グループ熟議

グループ③への参加者

1	織田	愛美	山口県立日置農業高等学校
2	竹田	正之	周南市在住
3	田中	豊	山口市在住
4	田中	里絵	山口大学人文学部（学生）
5	田吹	東悠	山口大学教育学部（学生）
6	山本	寛孝	俵山温泉薬師寺
7	吉村	誠	山口大学教育学部（教授）・大学教育機構学生支援センター（センター長）
8	辻野	健吾	山口大学工学部（学生）

ファシリテーター（学外）



山本 寛孝（やまもと かんこう）

俵山温泉薬師寺

出身：山口県美祢市伊佐町（長門市俵山在住）

職業：浄土宗僧侶

<熟議での出会い>個人的に、珍しい出会いがございました。お隣の男性から、「どちらからですか」と尋ねられましたので、「俵山からです」と答えますと、「母は、室積女子師範学校の2期生で、卒業後の初任地が俵山でした」と。「私の祖母も2期生で、初任地は同付属小学校でした。」珍しい出会いを、ありがとうございました。

ファシリテーター（学内）



吉村 誠（よしむら まこと）

山口大学 教育学部 教授・大学教育機構学生支援センター センター長

出身：奈良県奈良市

専門：万葉集を中心とする古代文学

趣味：日本刀の鑑定と鑑賞

口癖：「まあ、一杯飲もう」

世界遺産の中で育った。遊び場は春日大社（の森）。しかし奈良よりも、平安貴族の世界に憧れていた。貴族は和歌を上手に詠むので、自分でも和歌を作りたいと思っていた。そして『万葉集』に出会い、平城宮跡を見ているうちに育った所が栄えていた頃のことを知りたくなった。気がついたら『万葉集』の研究者になっていた。



B : 育てる (教育)

社会を元気にする人材育成とは

辻 多聞

Tsuji, Tamon

(山口大学 大学教育機構学生支援センター 講師)

1. はじめに

1990年はじめのバブル景気の崩壊、2008年のリーマンショック、これらが日本の経済に与えた影響は非常に大きい。景気を見る指標の一つとして、日経平均株価がある。1990年頃は40,000円近くあったものが、現在はご存じのように10,000円を割り込んでいる状況である。一応「平成景気」と呼ばれるものが2002年から5年程度続いていたようであるが、実感していた人は非常に少ないであろう。とにかく、「バブル景気以降景気は悪い」というのが一般的な意見といってもよい。

景気が悪くなると企業では、経費を削減する。企業に限らず、国も税収が下がるため経費を削減する。削減される経費項目は多岐に及ぶが、中にはもちろん人件費という項目がある。人件費削減とは、単に雇用者の給料を減らすことだけでなく、解雇や新規雇用の抑制も意味する。2008年に日比谷公園にできた年越し派遣村がまさにその影響の象徴である。そして、ことあるごとにメディアから流れる大学生や高校生の就職難に関する情報、実際にリーマンショック以前と比較すると、この数年の山口大学の就職率は5%ほど低下している。



そこはかたなく万人が感じている「元気がない日本」。新しい日本を生み出すのは、言うまでもなく若い世代である。その若い人材の多く輩出する大学は、学生にどのような教育をしていくべきなのだろうか。そこで、「B : 育てる (教育)」では「社会を元気にする人材育成とは」をメインテーマとすることとした。

2. グループのテーマ設定

この熟議では、上記メインテーマを以下の3つの視点からアプローチし、それぞれのグループでのテーマを以下のようにした。

- ・ グループ④基礎学力
大学に求められる教育内容について
- ・ グループ⑤コミュニティー・スクール
学校、家庭、地域の地域協力コミュニティーをどうすすめるか
- ・ グループ⑥就職
どのような社会人教育をすべきなのか

3. 各グループのまとめ

それぞれのグループでの詳細な熟議内容は別ページを参照していただきたい。ここでは、各グループのテーマに対するまとめを記載する。

- ・ グループ④基礎学力
大学の教育内容の改善ももちろん必要ではあるが、これからの大学教育には地域による教育が重要となるであろう。よって地域とコラボレートするような取り組みを多く取り入れていくべきではないだろうか。
- ・ グループ⑤コミュニティー・スクール
大学(学生)はある一つの世代にすぎない。しかし学問ではない「生きる学び」には世代を超えることが必要であろう。これは学生への教育・成

グループ熟議

長であると同時に、地域への教育・発展にもつながる。これからの大学は地域と連携した多世代の学びあい育ちあいの仕組みづくりを考えていくべきではないだろうか。

・グループ⑥就職

そもそも社会人教育の担当者は、学校でも家庭でも地域でもなく、それぞれがみんな担当者である。だから互いがその課題や責任を押し付け合っても始まらないと思われる。おのおのができる事をみつけ、学校、家庭、地域など社会全体で学生を育てていくべきではないだろうか。

4. まとめ

驚いたことにそれぞれ異なったテーマで熟議されたにも関わらず、「地域との連携」という共通のキーワードが浮き彫りとなった。組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力を社会人基礎力という。この社会人基礎力は社会人になるまでに完全に形成しなくてはならないものではないが、ある一定レベルは身に付けておかなければならない（数値ではなく、就職面接での質疑応答にて感覚的に量られる）。社会人基礎力の基となるのは、「基礎学力」、「専門知識」、「人間性、基本的な生活習慣」の3つである。「基礎学力」の担当は小・中学校や高等学校、「専門知識」の担当は大学や企業、「人間性、基本的な生活習慣」の担当は地域や家庭、といったように、これまでは知らず知らずのうちに、こ

の3者の担当が完全に縦割りのとらえられていたのかもしれない。もちろん特性に応じた主担当というのは必要であるが、これからの教育は学校・家庭・地域・企業の連携を強くはかかっていく必要があるようである。特に大学はいずれとも連携をとりやすい立場である。現在の大学に求められることは、学校・家庭・地域・企業の連携をはかる仕組みづくりではないだろうか。また「基礎学力」、「専門知識」、「人間性、基本的な生活習慣」はそれぞれ独立に発達させても社会人基礎力の育成にはつながらない。3者を「キャリア教育」という形で連携させることも大学に求められていることであるように思われる。このようにして育った学生が巣立つことで社会を元気にしていくと同時に、成長過程にある学生は地域をそして日本を元気にしていくのではないだろうか。

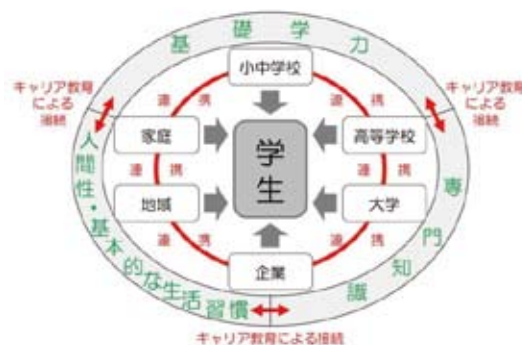


図 社会を元気にする人材育成に関する概念図

「B：育てる」オーガナイザー



辻 多聞 (つじ たもん)

山口大学 大学教育機構学生支援センター 講師

出身： 京都府京都市出身、1971年5月生まれ

学歴： 鳥取大学大学院連合農学研究科にて博士（農学）取得

家族： 独身落武者（貴族というほど収入もなく）

平成14年8月に母校である山口大学に赴任できました。農学を専攻していたにも関わらず、当初の業務内容は就職支援サーバーの管理と就職支援業務。その後「キャリアデザイン」の講義を担当することになりました。最近では環境教育に足を踏み入れるような展開になっています。積み上げてきたものがくずれ、また積み上げなおす、まさに賽の河原のような人生。私の人生が成功なのか失敗なのかはわかりません。ただ私は生きています。つまり「間違っていない」、これだけは確かです。

B：育てる（教育） 資料

①

グループ B

オーガナイザー
辻 多輝
(大学教職課程・講師)

育てる（教育）

**社会を元気にする
人材育成とは？**

④基礎学力
⑤コミュニティ・スクール
⑥就職

②

④基礎学力
大学に求められる教育内容について

【現状と課題】

- 大学のカリキュラムの問題（高校教育の両七不良など）
- 教育制度の問題（中・高の学力不足など）
- 内容の問題（入力の教育が欠如など）
- 学ぶ意欲（授業へのつながりが弱体化）

【対策など】

- 基礎教育充実アラカルトメニューから定食へ
- 地域の人材育成力を活用すべき
- お互いが授業（教育内容・現場に關する）を共有する
- インターンシップなどで学びの意欲をつくるべき（拡充）

地域とのコラボレートが重要

③

⑤コミュニティ・スクール
学校、家庭、地域の地域協力コミュニティづくりをどうすすめるか

【現状と課題】

- 内容や目的が理解されていない
- 情報（理念や目標）の共有（学校・家庭・地域）が必要

【対策など】

- 3者においてそれぞれ研修の機会が必要
- 相互の対話の機会作りが必要
- 学校地域をつなぐコーディネーターが必要
- コミュニティ・スクールへの学生の積極的参加
- コミュニティ・スクールをよく理解した教員の養成
- 地域課題の共有

多世代の学びあい育ちあいの仕組みづくり

④

⑥就職
どのような社会人教育をすべきなのか

【現状と課題】

- 学生資質の問題（コミュニケーション能力低下・仕事としぶんがわからない）
- 環境の問題（地方であることの情報格差・経済格差）
- 親の問題（親も就職問題を理解すべきでは）

【対策など】

- 親・学校・企業）わかりあうのは難しい
- さまざまな問題のギャップ、を共有することその場をつくる

**課題や責任を押し付けあってはじまらない
これから社会に出る学生をみんなで育む**

⑤

グループ B 「育てる（教育）」
社会を元気にする人材育成とは

【今後の山口大学に望まれること】

基礎学力・コミュニティ・スクール・就職の観点から
地域とともに人づくりを行う仕組みづくり
が重要となるのではないだろうか。

大学に求められる教育内容とは

小川 勤
Ogawa, Tsutomu

(山口大学 大学教育機構大学教育センター 教授)

1. はじめに

大学教育は現在、教育の質保証が求められている。しかし、それを実現するためにはさまざまな課題が山積している。そして、その課題は大学だけで解決できない課題も多く含まれている。そこで本グループでは今大学に求められている教育内容とはいったい何であるかをテーマに、学内外の参加者がそれぞれ立場から課題や問題点を出し合い、協議した。そして、提出された課題をいくつかのグループに分類し、課題グループごとにどのような対応策や解決策が考えられるかを熟議した。

2. 熟議の内容

最初の 10 分ほどで各自が大学教育において課題であると考えられる点について、ポストイットに一つずつ記入してもらい、その後、順番にその課題を模造紙に貼り付けた。一人の発表者が設定した課題に対して他の参加者が同様の課題を発見していた場合には、自分のポストイットを随時追加して貼り付けていった。その結果、以下の 4 つの課題グループに分類することができた。

＜大学教育を巡る 4 つの課題＞

(1) 大学の基礎教育（カリキュラム）の問題

コミュニケーション力の不足。山口（郷土）に対する教育の不足。社会人としての基礎教育の不足。生活に直面した課題を解決することができる学習の不足。

(2) 学ぶ内容の問題

作文力や読書量の不足。リベラルアーツや学際的な教育内容の不足。

(3) 教育制度（基礎学力を支える環境）の問題

知識量偏重の入試制度。高校段階でのキャリア教育不足。小中高の基礎学力の不十分さ。理数科目が苦手（論理的な思考力不足）。大学の

教員集団がすべての課題の解決を任せられる困難さ。入試制度の本来の機能（適切な人材の選択機能）を果たしていない（機能不全）。基礎教育を充実させる環境の未整備。

(4) 学ぶ意義・意欲（将来へ繋がる）の問題

勉強の意義がわからない。学ぶ楽しさが不足。志（こころざし）が不足。

提案された上記の 4 つの課題グループに対して、熟議の後半ではそれぞれの解決策・対応策を協議した。

＜課題解決のための提案・対応策＞

(1) 大学の基礎教育（カリキュラム）の問題の解決策・対応策

教育放送や放送大学の録画や教材を使って学ばせる。初年次に学ぶ内容（単位数）を減らす（キャップ制）。初年次のカリキュラムは選択メニューから定食メニューへ（学部が 4 年間一貫した学士課程教育に対して責任を持つ）。

(2) 学ぶ内容の問題の解決策・対応策

初年次から平易な英語教材を使った授業を実施。ボランティアや交流学习を充実させる。日本や郷土のことを知ることができる教育の充実。

(3) 教育制度（基礎学力を支える環境）の問題の解決策・対応策

ひとをじっくり育てる教育の充実。他の組織の内容を知る必要がある（双方向の出前授業の実施）。社会人基礎力の育成を重視した教育制度の転換。地域の人材のさらなる活用。教員に対して現場体験（社会体験）を増やす。人文系や理学系が就職しやすい人材市場の開発。

(4) 学ぶ意義・意欲（将来へ繋がる）の問題の解決策・対応策

初年次から有力資格を紹介する。板書中心の

授業からより学生参加型授業の実施。インターンシップや先輩訪問などを積極的に導入。

3. おわりに

今回は学内外の参加者に提案してもらった課題を4つにまとめ、それぞれの解決策や対応策を話し合った。しかし、この4つの課題はよくよく考えてみると実は相互に関連し合っている課題であるということに気が付く。また、それぞれの課題の解決策も結局は相互に繋がっているということである。例えば、教育制度の解決策として取り上げた入試制度の改革の提案でも、もっと人材選抜機能という入試本来の機能を果たすべきであるという主張は、結局は大学はじめ高校・中学・小学校が相互にそれぞれの教育内容・教育方法を理解し合う必要性へと結び付く。そのためには本グループでは「相互出前講座」を実施した方がよいという具体的な提案も出た。また、地域の人材を小・中・高校さらには大学で活用することは、地域の教育の充実を図るだけでなく、山口大学に優秀な人材を呼び込む手立てとなる。また、地域と大学がコラボレートすることにより、従来のようにさまざまな教育課題を大学だけに押し付けるのではなく、大学とともに地域が課題を共有し、相互に支え合う教育基盤を作っていく第一歩になると考えられる。そこで本グループでは「大学は地域とのコラボレートできる（外との交流をからませる）機会（会合）を今後、積極的に増やし協力して課題解決に当たる必要がある」という結論に達した。ただし、具体的なコラボレートの方法に

については、今後の課題として残っているということを確認して熟議が終了した。

参考文献

- ・ 宮浦崇・山田勉・鳥井朋子・青山佳世、「大学における内部質保証の実現に向けた取り組み」、立命館高等教育研究大学第 11 号、2011 年、151-165 頁
- ・ 土橋信男、「大学の教育力と学士力形成に関する一研究」、大学アドミニストレーション研究創刊号、2011 年、11-24 頁
- ・ 川嶋太津夫、「ラーニング・アウトカムズを重視した大学教育改革の国際的動向と我が国への示唆」、名古屋高等教育研究第 8 号、2008 年、173-191 頁
- ・ 鹿住大助・前田早苗・白川優治、「カリキュラム・マップの理論と実践」大学教育学会第 32 回大会発表要旨集録、2010 年、116-117 頁
- ・ 沖裕貴・田中均、「山口大学におけるグラデュエーション・ポリシーとアドミッション・ポリシー策定の基本的な考え方について」『大学教育』第 3 号、2006 年、39-55 頁
- ・ 沖裕貴、「観点別教育目標から考えるカリキュラム・ポリシーの構造」『立命館高等教育研究』第 7 号、2007 年、61-74 頁
- ・ 小川勤、「学士課程教育の質保証のための組織的カリキュラム改善の取組—教育改善 FD 研修会を通じたカリキュラム改善の試み—」『京都大学高等教育研究』第 16 号、2011 年、13-24 頁



グループ熟議

グループ④への参加者

1	安藤	繁之	山口県公立高等学校 PTA 連合会
2	井上	迪子	山口市在住
3	小林	聖	山口大学経済学部 (学生)
4	中谷	仁美	山口市学校教育課
5	羽田野	袈裟義	山口大学大学院理工学研究科[工学系] (教授)
6	原田	剛	山口県立大津・大津緑洋高等学校
7	久芳	善人	山口県公立高等学校 PTA 連合会
8	小川	勤	山口大学大学教育機構大学教育センター (教授)
9	一松	晃弘	山口大学工学部 (学生)

ファシリテーター (学外)



久芳 善人 (くば よしと)

山口県公立高等学校 PTA 連合会 事務局長

出身：山口県宇部市出身、1950年2月生まれ

学歴：熊本大学理学部数学科卒

家族：妻のみ (2人の息子は独立)

平成22年高校の教育現場に終止符を打ち現在に至る。縁あって平成22年9月愛媛県で開催された「熟議」を経験。これからの地域づくりの一手法として見ていた。平成23年1月開催された長門市での「Real 熟議 in 長門」をお手伝いすることになった。今回の「熟議 in やまぐち」の波紋を広げていき地域づくりを具体的なカタチにしたい。

ファシリテーター (学内)



小川 勤 (おがわ つとむ)

山口大学 大学教育機構大学教育センター 教授

出身：静岡県静岡市

専門：比較教育学、高等教育論

趣味：散歩、ラクビー観戦、海外旅行 (東南アジア)

大学院の時は、情報教育の比較研究をしていました。今の職場に変わって、高等教育そのものを研究対象に研究するようになりました。大学は現在、混沌の中にあります。山口大学が地域や世界から評価され、きらりと光る大学になるべく微力ながら頑張ろうと考えています。



グループ⑤ コミュニティ・スクール

学校・家庭・地域の協働による地域教育コミュニティづくり

～地域とともにある学校をめざして～

長畑 実

Nagahata, Minoru

(山口大学 エクステンションセンター 教授)

1. はじめに

社会経済環境が悪化する中、学力問題、児童生徒の問題行動等の増加、家庭・地域の教育力低下などが大きな教育的課題となっている。このため、2004年6月、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」が改正され、「学校運営協議会」の設置が可能となり、保護者や地域住民が一定の権限と責任を持って学校運営（運営方針、教育活動、人事等）に参画する仕組みが法制化された。学校運営協議会が設置された学校をコミュニティ・スクールという。

この学校運営協議会制度を通じて、地域住民、保護者等が、教育委員会、校長と責任を分かち合いながら、学校運営に携わっていくことで、地域に開かれ、地域に支えられる学校、すなわち地域とともにある学校づくりを推進し、地域教育力の向上、地域の活性化に貢献することが期待されている。コミュニティ・スクールは、2011年4月現在、32都府県で789校が指定されており、前年比160校増加と全国的に拡大を続けている。全国のコミュニティ・スクール実践校では、子どもたちにとって豊かな育ちの機会が拡大したこと、学校にとって学習活動の幅と深さが拡大したこと、地域にとって地域資源の再発見、活用により地域教育力が強化し、地域が活性化したことなどの成果が確認、報告されている。

また、2006年には、教育基本法が改正され、第13条で、「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする」との条文が新設され、学校、家庭、地域住民など社会を構成する全ての者が、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚し、相互に連携協力を努めるべきことが規定された。



こうした法制度の改編により、コミュニティ・スクールをはじめ、学校支援地域本部事業、放課後子ども教室事業の展開を通じて、地域とともにある学校づくり、地域づくりの拠点としての学校を実現する取り組みが全国で推進されている。山口県内では、柳井市、山口市、美祿市、長門市、萩市、平生町などでコミュニティ・スクールが導入されており、2012年4月には、周南市、防府市の全小中学校がコミュニティ・スクールに移行することが決定されたことで、山口県は全国でも有数のコミュニティ・スクール導入県となっている。

本グループ熟議「コミュニティ・スクール」では、以上の現状を踏まえて、山口県内のコミュニティ・スクール推進の現状と課題、課題解決策を熟議した。

2. 熟議の内容

(1) コミュニティ・スクール推進の現状と課題

- ・ 実践校では、地域住民の学校支援ボランティア活動が多様な形（読み聞かせ等）で行われており、子どもも住民も元気になっている
- ・ 地域住民に対するコミュニティ・スクールについての周知が遅れている

グループ熟議

- ・ 保護者の理解、参加が進んでいない
- ・ 山口県内のコミュニティ・スクールの事例を知りたい
- ・ 地域住民がどのような具体的な支援をしたらよいかわからない
- ・ 学校運営協議会が形式化していないか
- ・ 学校運営協議会委員の選定の仕方が問題
- ・ 教員は通常業務で多忙のため、押しつけ感、負担感がある、説明不足
- ・ 学校評議員、学校評価委員との違いが不明確

(2) 解決策

- ・ 保護者、地域住民にコミュニティ・スクールの意義について共通理解を図る広報や研修の強化が必要
- ・ 学校・家庭・地域の定期的な交流の機会、拠点が必要
- ・ 学校側のニーズを明確化して、地域支援を依頼することが必要
- ・ 学校と地域をつなぐ有能なコーディネーターが必要
- ・ 小・中・高等学校のPTAの連携による、人材ネットワークの構築が必要
- ・ 大学の若い人材が、コミュニティ・スクール活動に参加してもらうことが必要
- ・ 大学の教員養成課程でコミュニティ・スクールに関する教育を行うことが必要
- ・ 学校運営協議会を活性化するため、研修機会の拡充や大学の協力が必要
- ・ 地域の拠点としての学校づくりへの学校長の意識改革、リーダーシップが必要
- ・ 先進事例の普及、教員研修の拡充、担当職員制の導入など学校教員の意識改革を進める取り組みが必要
- ・ 学校運営協議会における学校評価の活用法の検討が必要
- ・ 放課後子ども教室の充実（学童保育との連携）が必要
- ・ 退職教職員や大学生を活用した土曜寺子屋（教室）の開催、拡充が必要
- ・ 地域の社会教育施設（博物館、図書館等）の積極的な活用が必要

3. おわりに

今回のグループ熟議を通じて、次のようなコ

ミュニティ・スクール推進の要件が明らかとなった。

- (1) コミュニティ・スクールの意義・役割を周知するため、教育委員会主導による多様な情報の発信、研修機会の拡充が必要である。
- (2) 地域住民、PTA、保護者OB、卒業生、大学生、一般応募者、地域団体、企業等が参画する多彩な地域ボランティアの組織化が必要である。
- (3) 教育委員会による学校と地域をつなぐコーディネーターの育成・研修制度の確立が必要である。
- (4) 県内のコミュニティ・スクール実践校の成果を、県民に広く周知するとともに、学校・家庭・地域の対話・交流を促進するフォーラムを、県内各地で継続的に開催することが必要である。
- (5) 学校運営協議会の運営を活性化するために、産官学民の多様な地域人材による委員構成とすること、学校評価を活用し、子どもたち、保護者、住民の意識や活動の変化を分析し、活動の継続的改善方針を明確にすること、学校長、教頭のリーダーシップを発揮することが必要である。
- (6) コミュニティ・スクール継続のための財政基盤の確立が必要である。
- (7) 県内のコミュニティ・スクール実践の分析、検証にあたる全県的なプラットフォームの構築が必要である。



グループ⑤への参加者

1	明日香 加代	山口市在住
2	伊藤 夏希	文部科学省生涯学習政策局
3	木村 卓夫	山口県公立高等学校 PTA 連合会
4	久木田 和裕	山口市学校教育課
5	坂本 紘二	山口大学（監事）
6	松島 渉	山口県立萩商工高等学校
7	千原 竜朗	周南市教育委員会
8	長畑 実	山口大学エクステンションセンター（教授）
9	山内 康平	山口大学工学部（学生）

ファシリテーター（学外）



千原 竜朗（ちはら たつろう）

周南市教育委員会 教育部生涯学習課生涯学習担当

平成 23 年 4 月から現職、現在の主な仕事内容－周南市社会教育委員会議関連業務、第 2 期周南市生涯学習推進プランの進捗管理

ファシリテーター（学内）



長畑 実（ながはた みのる）

山口大学 エクステンションセンター 教授

専門：社会教育学、博物館学

委員：山口県立図書館運営協議会会長、山口県環境学習推進協議会会長、周南市社会教育委員副委員長、防府市生涯学習アドバイザー、防府市地域コミュニティ検討協議会委員・アドバイザー

学会：日本ミュージアム・マネジメント学会理事、日本社会教育学会、コミュニティ政策学会、全日本博物館学会、日本環境教育学会



就職する力をはぐくむ

～豊かな人生と新しい社会を自ら切り開く力をつけるために～

平尾 元彦
Hirao, Motohiko

(山口大学 大学教育機構学生支援センター 教授)

1. はじめに

就職氷河期が出現して10年以上が過ぎ、氷河はすっかり日本社会に定着している。あたり前のように厳しい就職戦線が訪れ、疲弊する学生、活動途中でリタイアする学生、そもそも活動していない学生の存在も広く知られることになってきた。就職せずに卒業する学生、就職したものの数ヶ月で離職する若者も少なくない。

大学設置基準の改正によって、キャリア教育が義務化されたことは記憶に新しい。山口大学では「キャリア教育の基本方針」を定めて、全学推進にむけて動き出した。キャッチフレーズは「キャリアも大学で学ぶことのひとつです」。大学でキャリア意識をはぐくみ、就職する力をつけていくためには、どうしていけばいいのか。キャンパスの中だけではなく、地域の問題として考えることはできないだろうか。そんな問題提起から熟議はスタートした。

2. 熟議の内容

「学生さんって、たいへんですよね～」。そのとおりではあるが、評論していてもしょうがない。まずは問題を出し合うことから始まった。



(1) 学生の資質

～そもそも学生の力が落ちた！？

- ・何をしたいかわからない
- ・やる気のない学生が多い
- ・自己肯定感が低い
- ・就職して人間関係を学ぶのは難しい
- ・コミュニケーション能力を鍛えるべき

(2) 学生をとりまく環境

～地方の問題・お金の問題・親の問題

- ・都市に行くのはお金がかかる
- ・情報もはりにくい
- ・大学でもっと就職支援する
- ・大学が就職を重視しすぎると専門学校化してしまう
- ・親の発言がけっこう影響する
- ・子どもの将来を自分で選ばせなくちゃ

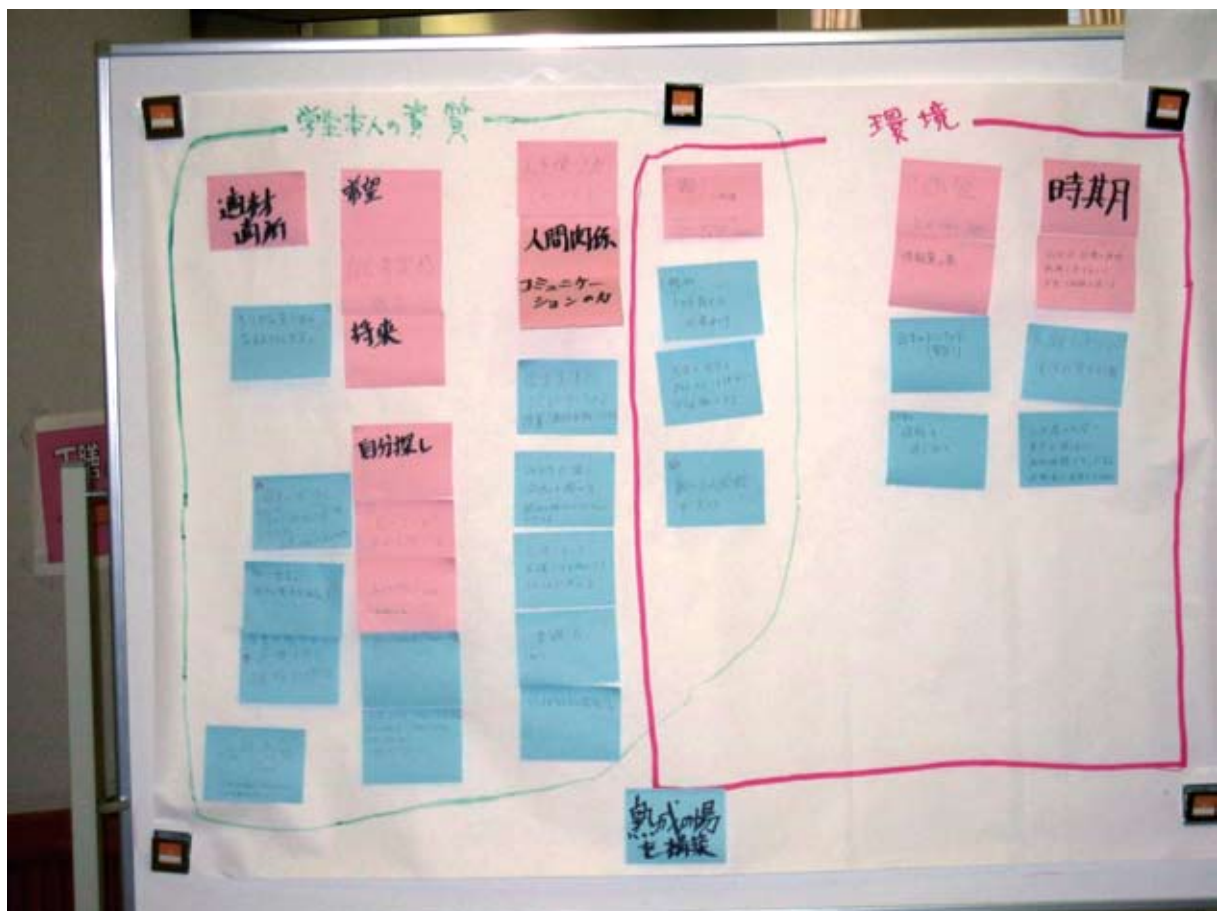
では、どうしたらいいのか。学生の資質や環境の両面を通じて、とくに地域社会との関係のなかでは、①低学年からチャレンジをし、かつ、成功体験を積んでいくこと、②コミュニケーションの場をつくること、③インターンシップで働くことを理解させることなど、様々な提案が出された。まとめると、大学は学問を通じて自分自身をはぐ

くむ場。豊かな人生と新しい社会を自ら切り開く力をつけていくことが必要だ。傍観者でもなく評論家でもなく、一人ひとりが行動する存在として、学生を支援していきたい。

3. おわりに

大学とはいったい何なのか…就職の熟議のはずが、行きつくところはココだった。大学で学ぶことで「就職する力」をはぐくむことに地域の方々

も理解を示していただいた。少々意外な感じもしつつ、嬉しくもあった。ただ、学問を通じて力がつくはずではあるが、はたしてそうだろうか。自己肯定感やコミュニケーション能力は、大学で身につくはずと言えそうなのかもしれない。が、成果があがっているかという自信がない。結局のところ、就職のための教育ではなくて、大学教育の充実こそが求められている。就職問題は大学教育そのものであることを感じた熟議だった。



グループ熟議

グループ⑥への参加者

1	飯田	恵子	山口県立大津緑洋高等学校
2	小笠原	新	山口県立水産高等学校
3	亀田	雄二	山口市商工振興課
4	辻野	明	山口県公立高等学校 PTA 連合会
5	馬場	豊	株式会社コマーシャルアーツ
6	望月	香里	文部科学省生涯学習政策局
7	田中	久美子	山口県若者就職支援センター
8	平尾	元彦	山口大学大学教育機構学生支援センター（教授）
9	林田	久恵	山口大学人文学部（学生）

ファシリテーター（学外）



田中 久美子（たなか くみこ）

山口県若者就職支援センター キャリアカウンセラー

出身：山口県出身

学歴：山口大学教育学部卒

山口県若者就職支援センターが新山口駅前に設置された平成 16 年から同センターにかかわり、のべ数百人の若者の就職相談にかかわってきた。多くの山大学生がお世話になる頼りがいのある存在。

ファシリテーター（学内）

平尾 元彦（ひらお もとひこ） ※16 ページを参照してください



C：つながる（地域づくり）

人々がどのようにつながることが社会を元気にしていけるのでしょうか？

辰己 佳寿子

Tatsumi, Kazuko

（山口大学 エクステンションセンター 准教授）

1. はじめに～研究・教育を基盤とした地域課題へのアプローチ～

日本では、「無縁社会」という言葉が登場するほど、人と人との関係性の希薄さが露呈されてきていたが、東日本大震災以後、人々の絆、家族や地域社会の重要性が改めて見直されている。この重要性は、誰もが認識していたとしても、どのようにつながることが良いのか、どのようにつながりをつくることができるのか、という点は議論の余地がある。つながり方というのは、状況に応じて、様々な形態が想定されるため、当事者間の「熟議」を通して、互いの理解を深めながら、よりよい関係性を構築し続ける必要があるだろう。

このたびの「熟議 in やまぐち」は、「地域と共生する大学づくりのための全国縦断熟議」の一環であることから、山口大学が主体となって「熟議」を行う「知の広場」である。一見、「地域と共生する」ということであれば「C：つながる（地域づくり）」が主流となると捉えられるかもしれないが、山口県の基幹総合大学としての山口大学が地域づくりの課題を検討する場合には、研究と教育抜きでは語れないのである。ゆえに、「熟議 in やまぐち」では、「A：究める（研究）」「B：育てる（教育）」の後の「C」として、実践的な側面である「つながる（地域づくり）」を位置づけた。

2. 各グループのテーマと「熟議」のポイント

「C：つながる（地域づくり）」では、⑦健康、⑧安心・安全、⑨農村の再生、⑩まちづくり、という4つの視点から、5つのグループに分かれて「グループ熟議」を行った。各グループでの詳細な熟議内容は別ページを参照していただくとして、ここでは、各グループのポイントを整理する。

まず、何を行うにしても、個人々人が健康であることが必須であるため、グループ⑦「健康」では

「健やかに実りある生活をするために何をすればよいのか」というテーマを掲げて「熟議」を行った。その結果、個人は、生活習慣の改善を行い、ポジティブ・シンキングをもつことであり、大学は、医療を提供する役割、行政は、市民への健康に関する情報を提供する役割を担いながら、大学と行政が提携し、よりよい環境を築いていくことが重要ということが浮き彫りになった。さらに、それぞれが役割を担うことは重要であるが、それが重荷になるという逆機能が生じないためにも「無理をしない、思いこまない、みんな違ってみんないい」という姿勢が大事であるとの見解に至った。

個人が元気であれば、次に、生活者が安心・安全に暮らせる環境が必要となる。「安心・安全」は幅広い領域を含むが、グループ⑧「安心・安全」では、防災に焦点を絞って「熟議」を行った。防災に興味を持つ人が少ないことや、地域がどんどん高齢化していくことが現状問題としてあげられたが、それでも、高齢者もがんばりたいと思っていることが確認できた。そのためには、大学の若い力が大きな影響力をもつとの意見が出た。「防災」は特殊な取り組みに思われるかもしれないが、「防災」はオールラウンドなものである。ゆえに、防災対策にどんなに力を入れても、コミュニティが機能していなければ意味がないという根本的な指摘もあった。

となると、次に、コミュニティや地域社会の役割が問われてくることになる。かつて相互扶助や助け合いが機能していた地域社会はいまや変容している。特に、山口県は、農山漁村の範囲が広く、第一次産業をベースとしてきた地域社会の問題が喫緊の課題となっている。この問題にアプローチするために、グループ⑨「農村の再生」では、「衰

退していく農業・農村をどう再生していくのか」という課題を掲げて「熟議」を行った。昨今、都会から農村への新規定住が促されているが、現状は、農村には都会と違う難しさがある、農業の現実には予想以上に厳しいという問題が浮上した。対応策として、農家になる前に、その地域で暮らしてみるべき、多様な雇用形態をもつ産業を農村にも創出することや新規就農を受け入れる会社を設立し、そういう取り組みに何らかの補助をしていくべきという意見があった。大学への要望は、経営感覚のすぐれた人材を育てて欲しいとの声があった。

往々にして、都市の農村と二項対立で捉えられる傾向があるが、混住社会、多文化社会、大学が立地する社会、立地条件、気象条件等、地域づくりにおいては、さまざまな条件が異なる。⑩まちづくりでは、「まち」における地域づくりについて、ローカルな視点とグローバルな視点から2つのグループに分かれて「熟議」を行った。

⑩a「まちづくり～ローカル～」では、「住みやすい地域にするために住民・企業・大学・行政に何ができるのか」という課題を掲げた。その結果、住民がつながり、行政とつながること、地域を愛するひとりひとりが営業マンになってまちづくりの仲間を増やすこと、大学は、地域を愛し、地域のために働く人をつくるだけでなく、学生も教員も地域と交流しつながること、企業は、地域にあるビジネスチャンスの種をつなぐことなど、それぞれの役割を担いながら、実りあるつながりが重要で「みんながプレーヤーとなるまちづくり」というスローガンが提示された。

最後に、⑩b「まちづくり～グローバル～」では、グローバル化が我々の生活の隅々まで浸透している現状では、ローカルな課題に立ち向かう、

まちづくりでさえも「グローバルな視点で捉える」必要があるとの視点で「熟議」が展開された。重要なのは、まずは、地域住民が問題を解決する熱意をもつことであり、遠慮せずにさまざまな課題を大学や行政等にぶつけることである。そして、大学は各主体をグローバルに「つなぐ」ことが可能な立場にいるため積極的に取り組むべきであり、それに対して、行政は喜んでお手伝いをするという、個人や組織の役割が明確となった。

3. おわりに～多面的な地域課題に接近する複合的なアプローチ～

言うまでもないが、地域の課題は、多面的で複雑である。⑦から⑩の「熟議」の成果は全てが関連しているといえる。さらに、多面的で動的な地域課題に接近する場合は、ひとつの専門分野では対応できず、①「最先端研究」や②「地域連携研究」などの学際的な研究も必要である。また、実践においては、大学や地域における人材育成(④「基礎知識」⑤「コミュニティ・スクール」⑥「就職」)が欠かせない。そして、個人が様々な社会(組織や地域社会、国際社会)とつながり、それぞれの役割を担い、アイデンティティを形成するにあたっては、「③文学・人間」でとりあげられたように、豊かに生きることはどういうことなのか。本当の幸せとは何かなどの根本的な問いを探求する姿勢も忘れてはならないのである。

このたびの「熟議」は、短い間であったため、不完全燃焼の部分があったかもしれないが、3月17日の「熟議 in やまぐち」は、これから何かが動きだすための「第一歩」であると位置づけたい。この「熟議」は、まさに「つづく」という言葉で締めくくることができ、この続きは、次は、参加者ひとりひとりが所属している地域社会もしくは人生の舞台にて展開されることと信じてやまない。

「C：つながる」オーガナイザー



辰己 佳寿子 (たつみ かずこ)

山口大学 エクステンションセンター 准教授

出身： 広島県広島市

専門： 地域社会学、村落社会学

趣味： 山登り（「山ガール」を目指しています）

山口県で地域の方々と出会い、凛とした生き方、哲学などに触れ衝撃を受ける。さらに海外（主にヒマラヤ）でも同様の衝撃を受ける。人々の暮らしの真髄を探りたく、地域社会の変容に関する調査研究を行っている。

C : つながる (地域づくり) 資料

①

②

グループ⑦「健康」
 健やかに実りある生活をするために
 何をすればよいのか

③

個人と行政と大学と・・・

- ・ 個人でできること: 生活習慣の改善、ポジティブシンキング
- ・ 大学: 医療の提供
- ・ 行政: 市民への健康・情報の提供、大学との提携
- ・ **無理をしない、思いこまない、みんな違ってみんないい**

④

**グループ⑧
「安心・安全」**
 防災対策は
 コミュニティ
 づくりから

⑤

防災はオールラウンド

- ・ 防災に興味を持つ人がすくない
- ・ 地域は高齢化
- ・ 高齢者もがんばりたい
- ・ でも、大学の若い力がほしい。

⑥

**グループ⑨
「農村の再生」**

衰退していく
 農業・農村を
 どう再生していくのか？

⑦

農村で暮らす！

<現状>

- ・ 農村には都会と違う難しさがある
- ・ 農家になる前に地域で暮らすべき
- ・ 農業の現実は厳しい。

<提言>

- ・ 多様な雇用形態をもつ産業を農村にもできる。
- ・ 新規就農を受け入れる会社を補助する。

<大学へ>

- ・ 大学では経営感覚のすぐれた人材を育てる。

⑧

**グループ⑩a
「まちづくり～ローカル～」**
 住みやすい地域にするために
 住民・企業・大学・行政に何ができるのか

⑨ 「みんながプレーヤーとなるまちづくり」

- 住民がつながり、行政とつながる
- 地域を愛するひとりひとりが営業マンになってまちづくりの仲間を増やす
- 大学は、地域を愛し、地域のために働く人をつくる
- 学生も教員も地域と交流し、つながる
- 企業は、地域にあるビジネスチャンスの種をつなぐ

⑩ グループ⑩b
「まちづくり～グローバル～」

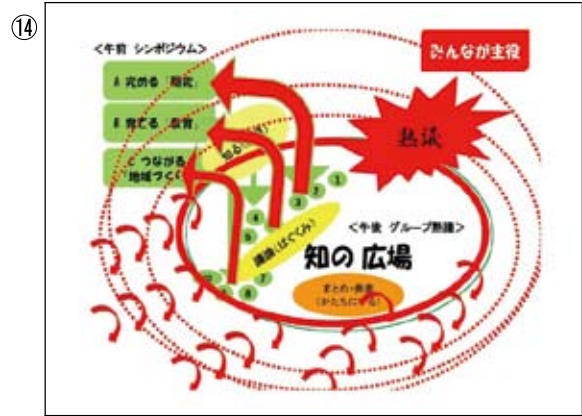


⑪ 「グローバルなつながり」

- 地域が問題を解決する熱意をもつ。
- 地域も遠慮せずに課題を大学や行政等にぶつける。
- 大学が積極的にグローバルに「つなぐ」役割を担っていく。
- 行政は喜んでお手伝いをする。



⑬

グループ⑦ 健康

健やかに実りある生活を送るために

上田 真寿美
Ueda, Masumi

(山口大学 大学院医学系研究科[医学系] 准教授)

1. はじめに

健康は、今や私達の最大の関心事である。少子高齢化が急速に進む我が国は、医療・福祉など健康に関わる様々な問題が浮上している。このような中、私達が健やかに実りある生活を送るにはどうすればよいのだろうか。

グループ⑦健康では、健康に暮らすために普段の生活で心がけていることなどの個人レベルから、まわりの人々の健康を支え・守るための地域活動、また健康関連施設・制度などの行政のレベルへと目を向け、私達が健やかに暮らすための健康観や行動について議論を深めたい。そして大学はこの課題について何ができるかを考えていきたい。

2. 熟議の内容

(1) まず、「健康で楽しく過ごすために心がけていること、実践していること」を各々出した。

その結果、①生活習慣（運動、食事、睡眠への配慮）②ポジティブ思考（趣味；旅行、歌う、読書、笑う）③抗ストレス（おしゃべり；他人と悩みを相談・共有する）が多く出された。また、「生かされていることへの感謝」「年寄りの言うことを聞く」「文



化（施設・催事）の充実」などの意見もあった。このように個人レベルでは、健康に対する関心度またマスコミ等の情報の豊富さもあって、健康に対する知識や実践が昔（数十年前）より格段に進んでいることは、これはメンバーの意見が一致するところであった。しかしながら、依然、健康に対する不安が大きいこと、自殺者は高い水準であることなどメンタル面の健康問題は解決できていないとの意見もあった。また、情報が多すぎて、どれが、何が正しい情報なのかがわからないこともこれらの問題に関係しているのではないかとの意見も出た。

(2) 次に、「健康で楽しく過ごすために何が必要か」を出し合った。

その結果、上記(1)で出されたことの他に、地域のつながりや行政の支援などの意見が出てきた。

(3) そして、「健やかで実りある生活に向けて、これらの問題を乗り越えるには」について議論が進んだ。

個人レベルでは、人生での目標を見つけること（楽しみ、趣味、継続する、軸）、地

域レベルでは、他者との繋がり（周囲との相互理解、交流の場の提供、文化）、行政レベルでは、医療への円滑なアクセス（薬の処方、受診、検査）や情報提供などの充実があがった。議論の中で、行政サービスの地域格差や各市町村の予算配分の話が出た。これについて学外ファシリテーターが宇部市の取り組みについて紹介をした（ポイント制介護、がん患者の方が生活しやすい街づくりなど）。行政への支援の要望も重要だが、財政も関係することから簡単な解決は難しいと考えられる。まずは個人で、そして地域でできる活動を行うこと、それらの活動を通して、個人や地域レベルでは解決できないことや現在行政が行っているサービスへの改善点などを要望していくことが大切であるとの意見も出た。

最後に、健やかで実りある生活を送るには、無理をしない・思い込まない・みんな違ってみんないいの精神で、互いに認め合い、一人一人の生活を大切にしていくことだという結論に至った。

3. おわりに

学内ファシリテーターの感想として、皆さんが意見を積極的に出してくださったので、とても充実した議論になったと思います。ほんとうにありがとうございました。やはり心の健康が大切と思われる方が多く、人と地域とのつながりが何

より大切であると再認識しました。学外ファシリテーターの吉武様には進行・調整役とともに宇部市の健康関連行政についてもご紹介頂きました。とても勉強になりましたし、こんなにも行政は頑張ってくれているんだと一市民としてもうれしく安心した次第です。大学も市区町村と連携した健康・医療事業を進めておりますが、今回の地域住民との熟議によって実施している事業の問題点も多く気づくことができ、地域貢献を進めるにあたって何よりの機会となりました。

参考文献（少しかたいですが）

- ・「ストレス危機の予防医学-ライフスタイルの視点から-」、ISBN4-14-001782-1
- ・「健康行動と健康教育-理論、研究、実践-」、ISBN4-260-00350-X



グループ⑦への参加者

1	石田	久美子	山口市在住
2	清友	紘代	宇部市在住
3	瀧	優子	山口市在住
4	西田	輝夫	山口大学（副学長[総務企画担当]）
5	山本	直樹	山口大学理学部（学生）
6	吉武	智子	宇部市総合政策部政策推進課
7	上田	真寿美	山口大学大学院医学系研究科[医学系]（准教授）
8	豊嶋	啓彰	山口大学経済学部（学生）

ファシリテーター（学外）



吉武 智子（よしたけ ともこ）

宇部市役所 総合政策部政策推進課

出身： 山口県宇部市

専門： 公共経営学

健康のため、毎朝 30 分間、シベリアンハスキーに引きずられながらの散歩を 14 年間継続中。仕事で溜まったストレスは、DVD 鑑賞と旅行で発散。研究活動の一環として、国内外の自治体調査に出かけたときには、空いた時間を使って、町歩きをしては、その土地ならではの発見を楽しんでいます。

ファシリテーター（学内）



上田 真寿美（うえだ ますみ）

山口大学 大学院医学系研究科[医学系] 准教授

出身： 香川（うどん）県、高松市

専門： 健康行動学、健康科学

マイブームはピラティスです。スポーツが大好きで小学 3 年から大学まで水泳をしておりました。今はもっぱらヘルシースイミングで、怒・嫌・哀・辛 etc. 涙なことがあったらプールに通い、水に流しています。山口大学に来て早 10 年、宇部は第二の大切な故郷となりました。



防災対策はコミュニティづくりから

瀧本 浩一
Takimoto, Koichi

(山口大学 大学院理工学研究科[工学系] 准教授)

1. はじめに

近年、国内外において自然災害が増加、激甚化の傾向にある。このような災害に対して、地域が防災力を持つことが必要である。しかし、高齢化や少子化、それに伴う限界集落の発生、農業・林業等の衰退、そして、コミュニティの希薄化により、防災力の母体となる地域力が低下している。農業等に関しては、他のグループでの熟議が行われるが、本グループ⑧では、コミュニティに光をあて、大学の“知”をいかに還元するか、あるいは、学(大学)、官(行政)、民(住民)が連携して、この課題にあたることができるのかを、熟議した。

2. 熟議の内容

熟議をするにあたって、まず課題の抽出を行い、それをもとに議論をすすめていくことにした(写真1参照)。もちろんテーマ自体は大変に解決困難な問題であるので、結論ありきでの議論は避けるようにした。また、熟議の際にはルールで肩書なしでの議論を進めるということであったが、参

加者各自の意見については、参加者の「大学関係者」、「行政(国)」、「行政(地方自治体)」、「民間(企業)」、「民間(福祉系)」、「民間(地域住民)」という立場を踏まえて議論してもらった。

(1) キーワード出し

アイスブレイキングも兼ねて、まず「防災といえば？」ということで、参加者から思い浮かぶキーワードを出してもらった。そして、キーワードから、KJ法を用いて整理すると、以下の項目に整理ができた。なお、キーワードは、各自の肩書(所属)を反映するものが多く出された。

人間	地域	情報	つながり
自然現象	学	社会	福祉
行政	対策	要援護者	



写真1 議論の仕方



写真2 出されたキーワード
防災から浮かぶキーワードは？

(2) 具体的な課題創出

次に、これらのキーワードをより具体的なものにするために各自の立場、経験を踏まえて、具体的な課題について一人ずつ説明を行った。その際に抽出された課題について列挙する。

- ・ 安全安心は地域総動員
- ・ 日本はものづくりに成功したが子づくりに
は失敗
- ・ 地域の災害特性を知って、いかに持続でき
る防災対策を構築するか
- ・ 高齢者の防災対策
- ・ 地域づくりは人づくり、コミュニケーション
ネットワークの構築

(3) 課題解決に向けての熟議

上記課題においてその中心に「人」がある、あるいは重要であるということを確認できたので、「人」を中心に議論を深め、以下の意見を得た（一部意見を集約）。

- ・ 過度なコンプライアンスを見直す、例えば、
寺・宮のコミュニティの活性化を行う
- ・ 地域間交流、世代間交流、異業種交流とそ
のつぼをつくる
- ・ 世代間の理解(生活課題を含む)を深める、
すなわち、若者は高齢者を、高齢者は若者
を理解する
- ・ 高齢者が中心になって、キャスティング
ボードをとり、小中学生を取り込む、同時
に社会人の若い男女の協力を得る
- ・ 幼稚園、小中中学の先生と子どもたちに活
躍してもらう
- ・ 大学の若い力の活用、学生を中心とした防
災グループづくりを行う

(4) まとめ

以上の熟議を続けた結果、結論には至らなかったが、学、官、民のそれぞれの方向付けについては、以下のような知見を得ることができた。

- ① 学：「若者」元気パワーがあるので、大学において、ある程度知識を有し、継続性を持ったグループのあり方を考える。
- ② 官：行政は定期的異動するためプロがいない、育たない。そのために大学などの支援がほしい。また、行政側でも出来ることはなんでもする姿勢があるので、コミュニケーションをはかりたい。
- ③ 民：地域には若い力が欲しい。また、大学からの“知”を提供し、それを参考にもしたい。そのためには、大学、学生には、地元、地域を知ってほしい。

3. おわりに

以上、グループ⑧の熟議の報告を行った。熟議を通して、何が課題であるのかを明らかにした。このような防災を意識したコミュニティのあり方について、大学、行政、民間の自分たちが日ごろから思っている問題や課題を出しあう機会はない。そういった意味で相互の理解の第一歩であったと評価できる。また、テーマが大きく、重いために、結論に至ることはできなかった。しかし、解決に向けての方向性やそれぞれの立場で何ができるのかは共有できたといえる。

まとめにおいて得られたものには、「…したい」という要望があった。これらを受け、今後は、この要望にどう応えていくか、あるいは実現するかについて、解決できていない項目も含め、繰り返し熟議が必要であるといえる。



グループ熟議

グループ⑧への参加者

1	川瀬	成彦	文部科学省生涯学習政策局
2	中尾	豊樹	周防大島町役場
3	福田	直三	復建調査設計株式会社九州支社
4	丸本	卓哉	山口大学（学長）
5	村岡	和満	国土交通省中国地方整備局山口河川国道事務所
6	吉村	美穂	福岡市城南区社会福祉協議会
7	米倉	一夫	平川コミュニティ推進協議会
8	山崎	隆弘	NPO 法人ぼうぼうネット
9	瀧本	浩一	山口大学大学院理工学研究科[工学系]（准教授）
10	佐藤	和生	山口大学経済学部（学生）

ファシリテーター（学外）



山崎 隆弘（やまざき たかひろ）

NPO 法人ぼうぼうネット 事務局長

出身： 山口県防府市出身、1958年3月生まれ

学歴： 徳山大学経済学部経済学科卒

家族： 爺婆妻子（長男1長女1）の6人

平成6年に地域づくりの手法である「ワークショップ」とめぐり合い、地域住民が主役のまちづくり活動を支援するまちづくりグループ（黒子型）を立上げ、山口県内を中心に「地域活性化・元気づくり」の活動（アクション型）を積極的に進める。

ファシリテーター（学内）



瀧本 浩一（たきもと こういち）

山口大学 大学院理工学研究科[工学系] 准教授

出身： 福岡県田川市（！）

専門： 地域防災マイスター（新潟の方が命名）、地域防災プランナー（自称）

趣味： 家庭菜園、豆腐づくり、カメラ、流離の絵描き

口癖： 「そのうち、きますからね！」

小学校3年のころに見た映画「日本沈没」を見て、触発！映画中で東京大地震で燃え上がる東京を見つめ首相（丹波哲郎役）が自問自答した。「国民の生命、財産を守るとは、一体どういうことなんだに！？」に答えるべく、その時から防災へのめりこむ。



グループ⑨ 農村の再生

農村に暮らす

～農村で暮らしていけるようにするための支援のあり方を考える～

高橋 肇

Takahashi, Tadashi

(山口大学 農学部 教授)

1. はじめに

グループ⑨は、地域づくりのなかでも「農村の再生」をテーマに熟議した。農村は、過疎高齢化が進んでいると言われて久しいが、山口県でも限界集落と呼ばれる崩壊寸前のものが多数存在し、すでに集落そのものが崩壊してしまったところもある。農業に対する補助金は、こうした問題を解決しようと設けられているものであり、この補助金が正しい方向に向けられることで「農村の再生」を図ることもできよう。そこで、本グループでは、農村で暮らしていけるようにするためには補助金をどのように用いれば良いのか、目指すべき支援のあり方を考えることを目的とした。熟議の参加者には、農業に専門的に関わる人から農業に関する知識をほとんどもたない人まで様々であったが、農林水産省の白書を資料に基礎的な知識を共有したうえで議論をすすめた。

2. 熟議の内容

(1) 農村の現状を知る

グループ⑨には、農業についてほとんど知識のない人がいる一方で、山口県の農林水産部で行政に携わっている人、市役所で中山間地域を担当する人、農業高校で後継者を育てている人、Iターンで都会から農村に移って暮らしている人、長年専業農家として暮らしてきた人など専門家と呼べる人もいて、参加者の間に基本的な知識の違いがあることが想像された。そこで、議論をはじめる前に農林水産省が刊行する「平成 22 年度食料・農業・農村の動向」という白書を用いて、農村の再生に係る基本的な知識を確認した。

本白書の「第 3 章、農村の活性化に向けた取組」に「農村で生活するうえで困ること、不安なこと」に関する調査結果が列挙されていた。農村に暮ら



す人は、「付近に耕作放棄地が増加してきたこと」、「農地の手入れが十分にできないこと」、「サル、イノシシ、クマなどの獣が現われること」、「近くに働き口がないこと」の 4 項目について困難、不安を感じながら暮らしていることを確認した。

さらに、「集落の維持・活性化のために農業者自らが行っている取組」についての調査結果が示された。農村に暮らす人は、「農業用水、農道、ため池等農業用施設の維持・管理」、「草刈り・清掃・街路樹の剪定等による景観の保持」、「寺・寺社の維持・管理」、「集落活性化のための行事等の企画・実施」、「伝統文化の維持」、「集落の見回り・高齢者のお世話（防災・防火を含む）」などに取り組んでいることを確認した。

農村の再生を図るためには、まずは農村に一人でも多くの方が暮らしてくれることが前提となる。農村は、そこで生まれ育った人が都会に出て行ってしまったために、過疎高齢化してきた。都市と交流するなかで、都会の人に農村に帰ってきてもらわなければならない。白書には、「都市と農村の交流にかかわる多様な形態」が紹介されていた。交流のあり方には、①定住、②二地域居住、③一時滞在の 3 つがあることが紹介され、一時滞在から二地域居住までの都市農村交流をグリーン・

ツーリズムと定義していた。グリーン・ツーリズムには、農家民宿・農家民泊といった一時滞在の取り組みに始まり、滞在型市民農園のような二地域居住に近い取り組みまであり、農作業体験、観光・レクリエーション、食育教育、援農ボランティアなど様々な形態があることが紹介されていた。

(2) 農村で暮らす難しさを考える

これらの基本的知識を共有したうえで、議論を始めた。まずは、参加者に農村を再生するうえでの問題点を挙げてもらうことにした。「農家の暮らしが補助金で支えられていること」が最初に問題点としてあげられた。

Iターンで農村に暮らしている方から、「草刈りなど、地域の作業を行うことで日当が支払われる」ことが紹介された。まさに、「都会と農村とのギャップに驚かされた」一例である。この日当も「中山間地域等直接支払い制度」や「農地・水・環境保全向上対策」といった補助金から支出されているものである。ただし、これらの補助金は、「農家は農産物を生産しているだけではない、多面的機能を持って、環境保全にも役に立っている」との考えのもとで支出されているのである。

地域周辺の草刈りにはじまり、農村にはその集落独自の共同作業がたくさんある。「不合理と思われることでも集落内に暮らすからにはやらなければならないことがある」ということが都会との違いであり、都会の人が暮らす上でのハードルとなる。「土地の流動、流用が難しい」、「農業は途中でやめることができない」なども、都会で生まれ育った人には受け入れ難いことである。

(3) 農村の人間関係

農村は人口が少ないために、日頃同じ人とばかり付き合うことになってしまうことも問題点であるといえる。「中山間地域では農業の担い手が70歳から75歳くらいの人が多い」、「人間関係が難

しく、とても新しいことに取り組める体制ではない」、「たとえ補助金が出ると言われても、人間関係で活かしきれない場合もある」、「集落内での信頼関係を築くことが先決となる」、「米中心農家はスタンドプレーになりがち」など、農業・農村の事情をよく知っている参加者から若い人が自由に身動きしづらい実態が明らかにされた。「農村には昔から水争いがあり、「我田引水」のような言葉もある、例えば、用水には昔からの権利が残っていて農地や水門などの扱いが難しいということもある」、このような近所関係のしごらみがあっても、その土地を離れることができず、いがみ合いながらもそこに暮らし続けてきたというのも農村の実態の一面である。

(4) 誰でも農家になれるわけではない

農村は、様々な理由から今も過疎高齢化が進行している。とにかく一人でも多くの人に“農家”となってもらいたいのであるが、誰でも農家になれるわけではない。農家になるためには、「畑を5反持っていないと農家と認められない」という条件をクリアしなければならない。しかも、農家になったとしても「農家は設備投資額が他の企業に比べて非常に高い」という問題ももつ。では、農業高校を卒業する若者は、どのようにして就農しているのだろうか？農業高校の先生からは、「農業高校を卒業しても農家にならずに企業に就職している」という実態が明らかにされた。Iターンの方も、現在は就農しているわけではなく、農村にしながらIT関係の仕事をしているそうである。「新規就農を果たす前にまずは農村に住み、農村で暮らしてみることが必要」と考えているとのことであった。

(5) 働く場が必要

農業高校の卒業生も、地元で農業外の企業に就職できれば兼業で農業をする機会に恵まれる。「農村には働く場が必要である、専業農家で生きていくことは難しいため、兼業農家になる方が現実的である」というのが実態のようである。「昔は、農家は人手が必要だったが、今は機械を使用して作業するようになり、作業時間も人手も必要なくなっている」ことから、農業外の企業で収入を確保しながら、余暇を利用して農作業にあたれば十分にやっつけられる。ただし、「農村に新しい人材を受け入れる場所がない」ために、そこで暮らすこともできなくなり、過疎化が進んでしまう。



農村には、雇用の場としての企業の存在が必要なようである。「農家は個人に対して農地を貸すのは難しいが、企業に対してであれば農地を貸すことができる」ようであり、農地の受け皿としての企業が存在すれば、耕作放棄地の増加にも歯止めをかけられるのかもしれない。「土建業、サービス業、福祉業が農村に進出している」例もあり、こうした企業に就業しながら農業を兼業するようにしていくことが必要なのかもしれない。

“誰でも農家になれるわけではない”という仕組みは、一方では「農地を他の目的で利用しないための仕組み」であり、農地を無計画に宅地や商業地などにしてしまわないために必要なことである。そういう意味からも、“会社”そのものが農地を所有することも制限されている。近年、山口県では、集落営農法人の設立を図り、農地を集約し地域が会社組織を作って農地を守っていこうとしている。ただし、「農業法人は存在するがまだ若い人を受け入れられる態勢ではない」のが現状である。政府は、専業農家や集落営農法人を農業の担い手として支持していくために、「専業農家に補助金を支出し、集落営農法人（会社）も専業農家と同じく補助金を支出している」。

(6) 求められる担い手像

これまで、「農家は作物の栽培しかしない、販売などは農協に頼りきっている」というのが実態であった。「米の値段が下がっていることに困っている」、「生産調整をするのは大変なので誰もしたがらない」、「農家の経営は補助金があってこそ成り立っている」のようにこれまでの農家のあり方では、もはや集落を支えていくことはできない。「農業にも多様な雇用形態が必要」であり、こうしたことを受け入れることのできる優秀な人材が必要である。「農家にも経営感覚が必要. 少なくとも簿記くらいは学んでほしい」、「大学と農業法人との結びつきを強くしていく必要がある」という声もあり、大学にもこうした要望に応えられる人材を育て、地域に送り出す使命があるようだ。

(7) 農村で暮らしていけるようにするために何をすれば良いのか？

議論の最後で、「農村の再生」のための、農村で暮らしていけるようにするための支援のあり方を次のようにまとめた。

- 企業の就業時間の中に農業のためにさく時間を作ってもらう。このように少しでも農業を

やっている企業には補助金を出す。

- 企業そのものが大規模農業経営を行う。このような会社では多くの社員が農業以外の仕事に従事するなかで数人の社員がオペレーターとして農作業を担当する。
- 若い農業人材をたくさん雇った企業に補助金を支出する。
- 大学は優れた経営感覚を培った人材を育成する。
- モデル地域を作って、その営農法人組織に農業経営のできる大卒の人材を雇用してもらう。
- 農家は、自身の子どもには農家にならないように勧める。子どものころからそのように言われると農家になりたくなくなる。親も子どもも、“農家楽しい、やりがいがある”と思えるようにする必要がある。

3. おわりに

「農村の再生」の問題は、山口県にとって、さらには日本全体にとっても、深刻なものであり、なんとしてでも解決しなければならないことである。それだけに、熟議をはじめるとあって、「2時間議論して満足した」、「良い議論ができた」、「充実した時間を過ごした」のようなものはいけなさと考えていた。様々な思いで本テーマに臨んでくれた参加者が、この2時間の議論を通じてこの問題について「現実に解決への一步を踏み出した」という実感が得られるような結論を得ることを本グループの使命とした。資料を提示して解説するなど、意見を誘導するようなこともあったとは思いますが、最後には新たな提言を得るに至った。本グループの参加者がこの結論を各自の今後の活動に活かし、今後関連する他の議論の場で活かしてもらうことができれば、今回の議論を行った意義もあったということができよう。大学に対しても貴重な提言をいただいた。私たち教員は、学生をしっかりとして教育し、地域に優秀な人材を輩出するという教育者としての不変の使命をあらためて認識させられる提言をいただいたのだと思う。

参考文献

- ・ 農林水産省、「平成 22 年度 食料・農業・農村の動向」（第 177 回国会＜常会＞提出）、http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h22/index.html

グループ熟議

グループ⑨への参加者

1	明日香 健輔	阿東文庫
2	奥野 忠	山口県立日置農業高等学校
3	富平 美波	山口大学人文学部（教授）・エクステンションセンター(センター長)
4	中野 邦夫	山口県農林水産部農業経営課
5	林 孝之	宇部市総合政策部企画課
6	藤坪 翔太	山口大学教育学部（学生）
7	永嶺 克博	秋芳梨生産販売協同組合
8	高橋 肇	山口大学農学部（教授）
9	江崎 真未	山口大学農学部（学生）

ファシリテーター（学外）



永嶺 克博（ながみね かつひろ）

秋芳梨生産者組合 組合長・とってゆかいな秋吉台ミーティング事務局

出身：山口県美祢市秋芳町出身

専門：梨の栽培

趣味：魚釣り

口癖：「おーい、ひろこ（妻の名前）」

くせ：すぐに場を仕切る

秋芳梨ブランドの二十世紀梨を生産するとともに、高級梨「新高」を栽培して「銀座千疋屋」に出荷もしている。とってゆかいな秋吉台ミーティングの事務局長も務める。このミーティングでは、これまでに「ワイズユース」を基本に秋吉台の草原を保全する活動を続けてきた。

ファシリテーター（学内）



高橋 肇（たかはし ただし）

山口大学 農学部 教授

出身：東京都

専門：作物学

趣味：クロスカントリースキー

口癖：「熱燗おかわりもう一本！」

小学校6年のころに団地の前の花壇でダイコンを栽培したことをきっかけに農業にあこがれる。稲穂のマークを見て早稲田大学農学部を目指したが叶わず、ボーイズ・ビー・アンビシャスのクラーク先生を知って北海道大学農学部に入ることにした。赤ちょうちんの無い田舎には住めない自分に葛藤を覚えながらも、あこがれの農村のために教育・研究に限らず、様々な活動に取り組んでいる。

グループ⑩a まちづくり～ローカル～

住民・行政・企業・大学がつながるまちづくり

～それぞれの舞台としてのコミュニティ～

鍋山 祥子
Nabeyama, Shoko

(山口大学 経済学部 教授)

1. はじめに

近年、まちづくりは新たな段階を迎えたと言われている。まちづくりをコミュニティ形成の動きとして捉えると、まちづくりは、そもそも高度経済成長によって引き起こされた住環境の悪化などへの住民運動として 1960 年代に始まった。それから半世紀近くの間、むらおこしや町並み保全運動など、地域に起こる問題を解決する手段として、絶え間なく、まちづくりは続けられてきたのである。最近、このまちづくりにおいて、特段の問題解決の手段としてではなく、その地域に住んでいる住民が主体となって「よりよいまち」をつくっていくという動きが全国各地に見られるようになってきた。そのなかでワークショップという方法が用いられ、住民自身が集まり話し合いながら、自分の住んでいる地域を知り、価値を見つけ出し、愛着を感じながらまちをつくっていくという意味でのまちづくりが盛んになっている。

こうしたまちづくりの流れの中で、地方都市山口において、住民、行政、企業そして大学がどのような役割を担いながら、まちづくりに参画すればいいのかについて、熟議をおこなった。熟議の参加者には、地域の住民でもある大学生、コミュ

ニティ推進協議会のメンバーや行政の担当者、また、地元企業で働く人や大学の教員などである。

2. 熟議の内容

まちづくりを考えるにあたって、まずは、どんなまちにしたいのかという参加者それぞれの理想を語り合うところから始めた。

(1) どんな「まち」が理想なのか？

1-1 理念

- ・ 人々が生きていく場所＝舞台として地域を捉える

例えば、高齢化に対する危機感から、近年では「高齢者が暮らしやすいまちづくり」という問題設定がされることも多いが、人は地域で生まれ、育ち、働き、老いていく。このようなライフステージを通じての舞台としてコミュニティを捉え直す必要がある。

そうすると、将来、地域を背負って立つ子どもたちが希望を持てるようなまちであることが重要であるし、そのためには、今いる大人たちが元気で生き生きと過ごしているまちであることや、例えば老いても、安心して暮らしていけるまちであることが大切である。

- ・ 「つながり」がみえるまち

互いの顔が見え、互いに関心を持ちつつ、和気あいあいと過ごせる居心地のいいまちが理想である。知り合いの笑顔が多いまちであれば、それだけ安心して過ごせるということである。

そのような知り合いを増やすためには、老若男女が集えるイベントが地域で開催されることが有効であるし、その他



にも、住民がつながることのできるしくみづくりが必要になる。

- ・ ここで一生暮らしたいと思えるまち
地域のファンをつくるのが、まちづくりの担い手をつくることにもなり、住民一人一人が、自分の住んでいる地域をよりよいまちにしようという意識が高まることに繋がる。
そのためには、子どもの頃から、地域行事などへの参加を促すと同時に、自分の住む地域をテーマにした教育なども積極的にこなうことが重要である。

1-2 地域整備

- ・ コンパクトな距離感が大切
歩いて行ける範囲に、病院やスーパーや学びの場があることが望ましい。子どもでも高齢者でも利用できるような徒歩でアクセスできる範囲に必要な施設があるまちが理想的である。
もし、徒歩圏内に必要な施設を集めることが難しいのであれば、公共交通の利便性を高めるなどして、自家用車での移動を基本としないまちづくりが求められる。

以上のように、理想のまちとして、ソフト面とハード面の両方からの意見が出された。では次に、そのようなまちづくりをするために、住民・行政・大学・企業のそれぞれはどのように関わればいいのか、ということについて熟議を展開した。

(2) 住民に求める「まちづくり」への関わり

- ・ プレイヤーとして動く
まず、住民同士がつながることが基本である。それは、日々のあいさつの交換であったり、自治組織の「役」や当番を断らないことであったり、地域のイベントに積極的に関わることによって、同じコミュニティの住民としてのアイデンティティの確立が基本となる。住民の一人一人が、自分がコミュニティを形成する当事者だと自覚することによって、まちづくりに主体的に関わる契機となり、まちづくりのプレイヤーとなる。
- ・ まずは、住民同士の繋がり強化
上から下へのまちづくりにならないためには、行政と住民との意思の疎通が

できていることが重要である。そのためには、まず住民同士が日頃からコミュニケーションを密にし、意思の疎通がとれていることが必要である。住民同士によって、自分のまちの問題点や要求についての合意形成ができていることで、行政への要求もしやすくなるし、まちづくり協議会などのしくみを十分に機能させることができる。

- ・ 地域のファンを増やす
地域に関することを「他人事」ではなく「当事者」として多くの住民が捉えるためには、今、地域に関心を持っている一人一人が地域の「営業マン」となって、隣の人を引き込んでいくことが重要である。そうして、子どもから高齢者まで、働く人も男性も女性も、地域のファンを増やしていくことが、よりよい地域を作っていくことになる。

(3) 行政に求める「まちづくり」への関わり

- ・ 地域の一員として動く
一歩下がらず、日頃から地域住民と対話をするべきである。その中で、地域のニーズを把握したり、住民にとっての身近な存在となることができる。
- ・ 長期的視野に立った基盤づくりを
地域で機能する仕組みをどう作るのかということに関して、長期的視野に立ったり、法律知識が必要なので、住民のニーズを把握しつつ行政による仕組みづくりをすることが重要である。

(4) 企業に求める「まちづくり」への関わり

- ・ 地域にあるビジネスの種を見つける
利益を出しながら地域貢献をするということも可能である。企業は、地域の課題解決のために、いろいろな主体を連携させることによって、まちづくりに、また自社の利益にもつながるように動くことができる。
- ・ 働く場所としての地域を一緒に考える
企業で働く人たちもまた地域住民である。労働者が当事者として自分の住む地域を愛せるように、地域のことを考える機会や時間を与えるように積極的に動くことが必要である。

(5) 大学に求める「まちづくり」への関わり

- ・ 地域に出て、交流する

学生も教員も職員も、学校の中だけにとどまるのではなく地域に出向き、イベントに参加するなど、住民と交流することが大切である。

教員も学生も、地域にある学びの種と一緒に育てるといった交流の方法があってもいい。例えば、行政と大学(研究者)が協働して地域の問題に取り組むなどが考えられる。

- ・ 学びの場を提供する

大学の内から外へというベクトルとは逆に、地域住民に対して学びの場を提供するという交流の仕方もある。

日頃は知ることのできないそれぞれの立場を理解する契機ともなった。

ただ、2時間という短い時間は議論を深めるには到底足りず、同じテーマを段階的に掘り下げる意味でも、第2回、第3回と熟議を継続していく必要性を感じた。

参考文献

- ・ 田村明、『まちづくりの実践』、1999年、岩波新書
- ・ 日本建築学会、『まちづくりの方法』、2004年、丸善

3. おわりに

今回の熟議では、中心テーマである「住民、行政、企業そして大学がどのような役割を担いながら、まちづくりに参画すればいいのか？」について、それぞれの立場に属する参加者が意見を出し合うことができた。普段から、当事者としてまちづくりに関わっている人々の意見は、おのずから同じような問題点に集約していくこともあれば、



グループ熟議

グループ⑩a への参加者

1	池田	瑞穂	大学（学生）
2	上野	新次	山口市在住
3	小野寺	雅子	山口県総合政策部広報広聴課
4	林	道彦	おおどのコミュニティ協議会
5	村田	信弘	山口ケーブルビジョン株式会社
6	山内	克也	文部科学省生涯学習政策局
7	加藤	美和子	平川コミュニティ推進協議会
8	鍋山	祥子	山口大学経済学部（教授）
9	佐々木	瑞枝	山口大学経済学部（学生）

ファシリテーター（学外）



加藤 美和子（かとう みわこ）

平川コミュニティ推進協議会

出身：旧秋穂町出身、平川在住

学歴：山口女子大学（現山口県立大学）食物栄養学科卒

家族：夫と今年成人する長男、高校1年生の次男、三男扱いのラブラドール（犬）の5人家族

栄養学科卒なのに保育士免許をとって、保育士としてぼちぼち仕事しながら、育児支援サークルを立ち上げたのをきっかけに、市民活動支援センターで2年間勤務。センターの仕事で平川に入ったのをきっかけに、コミュニティ米倉会長から声をかけていただき現在に至る。人見知りがなく、だれとでも話ができるのが長所であり短所でもある。気ままな人生を送っています。

ファシリテーター（学内）



鍋山 祥子（なべやま しょうこ）

山口大学 経済学部 教授

出身：福岡県北九州市

専門：福祉社会学、地域福祉、高齢者福祉、ワーク・ライフ・バランス

大学卒業後、4年間のサラリーマン生活を経て、大学院で再び社会学を学び直す。修士論文のテーマは「尽くす女は、何故、幸せになれないのか？」である。その後の研究では、超高齢社会において、ケアをする方もされる方も、互いが消耗しないケアのあり方を探っている。近年は、遠距離介護とワーク・ライフ・バランスの関連について考察している。

グローバルなまちづくりは可能か？

～大事なのは問題を解決する熱意～

松田 博

Matsuda, Hiroshi

(山口大学 副学長[国際・社会連携担当])

1. はじめに

グローバルという言葉は、まだ聞きなれない言葉である。過疎と高齢化が進んでいる日本において、海外の人々、外国人留学生は日本の地域のまちづくりがいかに進められているかという点についてどのように見ているか、まずは現状の認識が必要である。地域の問題はいうまでもなくローカルなものであるが、グローバル化が進む現在においては、ローカルな課題解決にもグローバルな視点が必要となっている。本グループ⑩b では、グローバルな視点から地域（＝ローカル）再生の方向を探るということで、「グローバルなまちづくりは可能か」というテーマを掲げて熟議を行った。



2. 熟議の内容

(1) 事例分析

1-1 周南市鹿野渋川の「渋川を良くする会」のむらづくり

- ・ 「渋川をよくする会」はもともと小さなこと（＝ローカルなこと）からスタートした。
- ・ 儲ける仕事にはつながらなかった。金儲けをすれば人を呼び込めるから過疎化を防げる。
- ・ キムチを学びにいこう！（グローバルに挑戦）→キムチの商品化。
- ・ 外国との交流を実施して、身内も仲良い関係になる。
- ・ テレビ等の報道を利用して過疎化を食い止めようとした。
- ・ 相変わらず過疎は続いている。やはり、問題なのは後継者集め！

1-2 道の駅

- ・ 作ったものをしっかり売っていくシステムを作ろうとしている。

- ・ 地域の特産はこれで、どうで…個性のある商品、多品目。
- ・ 行政が手をさし延べるべき！

1-3 地産地消のパン作り～パン研究会～

- ・ いつの間にか外の方から学びに来る！たかがパン作り、されどパン作り。
- ・ それぞれにいろんなつながり方がある！
- ・ まず、自分の足元をみよう。近いところに外につながるものがあるかもしれない。これぞ、グローバルではないか。

1-4 限界集落に古民家設置

- ・ 外部から人を呼び込もう。一人でも住めば成功としよう。イベントをしよう！
- ・ 最近では何千人も来た。知ってもらえることが出来た！リピーターが多くなった！
- ・ 地域外の人が愛着をもってくれたため、成功かな！

1-5 貸家バンク

- ・ 良い物件がない…
- ・ 荷物の移動が面倒→だから貸さない。

1-6 周南市の取り組み

～修学旅行生を引き受けよう！～

- ・ いろんな人の家に泊まってみよう！→生活

体験！結構好評！

- ・ ホームステイ受けたほうが幸せになれる！日頃と違う体験ができる！
- ・ 良い思い出になるし、後々良い結果をもたらすかもしれない。
- ・ 来てもらうだけでうれしい！ある程度の経済的なものも多少ある。
- ・ 最初は拒否する人もいた。同じような感じで生活しとったらいけんよ！…あんたがたが変わらないと…とか言われて。結局、良かったという経験もあるから、そういうのが次につながるのでは！
- ・ かなり気をつかってしまうこともあるかも。→受け入れ体制は、いつもどおりでいいんじゃないかなあ。
- ・ いろんな発見があるのは良いけど、すぐ過疎化対策になるとは限らない。でも何かヒントがあるかもしれない。

(2) 何が問題なのか

2-1 成功例をどう普及させていくのか

- ・ 活動の紹介（ホームページ等）→成功例はすでに紹介されている。
- ・ **FACEBOOK** 等からの情報→外に目をむける良い方法かもしれない。
- ・ 成功例があったとして、そうなった過程を他人が知って生かせるか。
- ・ どういったアプローチをすべきかをきちんと把握し、伝えていく必要がある。
- ・ 市と県と同様、過疎化については問題となっているから、成功例を活用して、どう変えていけるか考えてもらうべき。解決の方法をまとめていく作業が必要。
- ・ 伝えていくことでグローバルにつながる。

2-2 交流を通して地域が元気になるためには！

- ・ 観光地って感じがしない→観光という資源の活用が出来ていない
- ・ きれいですが人を呼び込む力がない。発見したとしても発信しないと意味がない。
- ・ 散歩にいいよとか、小さなことからでもいいのに！
- ・ 山口型ツーリズムを作るべき。
- ・ 向こうの人は学んだ、だけど、こちら側は何を学んだというのか。そういったことを意識して、今後に生かさないといけない。交流を持って、その結果として、「はい楽し

かった…」、「あなたも大変ね…」、ではダメ→そこから問題解決できるとは限らない。

- ・ 受入体制をしっかりとっておかないと。
 - ・ 空き家あるけど、貸さない家主もいる→山口は保守的？
- #### 2-3 どういう行動を起こせばよいのか
- ・ 具体的にどう動くべきか解らない。各町で、自分達で、何とかしてくださいと言われてるが…
 - ・ 資金は頂いている。できることをできる範囲で…、でない資金が莫大なものになる。
 - ・ うまくやってる町を見に行くべき。仕組みから考えていこう！という町もある。
 - ・ 小銭を稼いでいくことが第一歩。
 - ・ 意識改革から！地域の皆さん自身で。
 - ・ 手法を大学などに求めたい。
 - ・ ある程度動きだすまでは面倒みてほしい。あとは自分達でやります！
 - ・ グローカルな視点で…という意味ではまだ無理かなあ。
 - ・ グローバルになる場合、やはり言葉の問題が大きい。

(3) 課題解決のために

- ・ 地域の人たち自身の気持ちがないとダメ。→これがなければ支援をしてもダメ。
- ・ たとえば大学はいろんな頭脳を持っているから、課題を打ち破るキッカケとなるように大学が情報提供などを行うべき。留学生を呼びたい。
- ・ 大学が、研究と教育と社会連携でなくて、研究を教育の中に入れるべき。
- ・ 熱意を持った学生を育てるのが大学の役目！そういう機会がほしい！
- ・ 大学と地域をつなぐコーディネーターが必要。山口大学の自主活動ルームの活動の幅が狭い。ポテンシャルはある。
- ・ 地域の問題を考えてるんだけど、これは山口大学の課題にも直結しているのでは！
- ・ 個人と大学とのつながりの間に行政が入るとよいが、担当が変わるとガラッと変わっちゃう。
- ・ 行政はちょっとだけ費用を出して支援。行政は国内のことが多い。だから、大学と行政の連携が必要なのでは。行政や大学が提案してくれると動きやすい。

- ・ 一方で、地域が自分達の問題をしっかりと大学に説明することも重要。
- ・ 共通認識が持てる場の形成。地域と大学の交流集会や地域での勉強会、地域の全員参加のイベント等の開催。地域リーダー育成など。
- ・ 「知ること」から始めよう。

3. おわりに

参加者から「グローバルという言葉は、自分達の課題を自分達だけで考えるのではなく、他の視点や意見を取り込んでいくことにあるのでは」という意見や「山口の地域の過疎化や高齢化という課題解決において、留学生や他県から来た学生が何らかの役割を果たす可能性があるわけだから、このためには教育にどのように組み込んでいくかが重要では」という意見があがったように、本グループでは、ローカルが元気であるために、外部的な視点およびグローバルな視点をどう活かして

いくことができるのか、という点を意識した熟議となった。

ローカルな課題が切迫しているなかで、グローバルなまちづくりを掲げることは容易ではないかもしれない。ただ、本グループは「グローバル」という、敢えて、大きなテーマを掲げたことによって、足元の「あたり前」のことを確認できたのではないかと思う。

今回の熟議においては、地域は遠慮せずに、課題を大学や行政等に投げかけ、その際に、大学は、国内外の人々の「つながり」をグローバルな視点で積極的に形成していく役割を担い、これらに対して行政は喜んでお手伝いをするという構図を展開すべきであって、行政もそれを期待しているということが確認できた。また、このような心意気と関係性は、ローカルでもグローバルでも通じることであり、その中で最も大切なことは、地域が問題を解決する熱意を持つことであるということをも改めて認識する場となった。



グループ熟議

グループ⑩b への参加者

1	今津	武	山口大学経済学部（教授）
2	徳永	豊	スリー・ヒルズ・アソシエイツ
3	鳥羽	めぐみ	山口大学理学部（学生）
4	畠中	篤	山口大学（顧問）
5	福間	康憲	山口市在住
6	藤永	静恵	周南市在住（農家レストラン「金峰[みたけ]の郷」）
7	安村	崇	山口市協働推進課
8	藤永	勝喜	周南市在住
9	松田	博	山口大学（副学長[国際・社会連携担当]）
10	大上	美南	山口大学経済学部（学生）

ファシリテーター（学外）



藤永 勝喜（ふじなが かつき）

周南市鹿野在住

出身： 島根県旧柿木村

30 数年、某保険会社で「あってはならない家族の不幸、なくてはならない生命保険」をポリシーに活躍をしてきた。退職後も、保険業務は継続し、人々の幸せづくりのお手伝いをしている。周南市鹿野渋川に平成 15 年に定住し、地域づくりのお手伝いにも励んでいる。妻の静恵さんと一緒にグループ熟議に参加。静恵さんは、農家レストラン「金峰の郷」で地産池消にこだわった料理を通して地域づくりに貢献している。夫婦で田舎暮らしを楽しんでいる。

ファシリテーター（学内）

松田 博（まつだ ひろし） ※16 ページを参照してください



聴講者の声

グループ熟議を観察する

午後からのグループ熟議では、グループに入らず、各テーブルの議論を観察する聴講者もいました。聴講学生の感想を紹介します。

- ・ 周りから見えていましたが、各テーマ本当に白熱した議論がなされていたので、私としても面白かったですし、大変勉強になりました。時間がなく全てのテーブルを見て回れなかった事がとても心残りです。もっと多くの学生も議論に加わることができたなら、より一層「熟議」に繋がるのではないかと思います。（磯貝）
- ・ 少し怖かった、というのが初めて熟議に参加させていただいた正直な感想です。自分が知らないことについて様々な人が議論をしているのを目の当たりにし、自分が無知であることを嫌でも自覚させられました。それと同時に、私も自分の考えを発言できるほど、自身の興味・関心のある分野について突き詰めていきたいと強く感じました。（上野）
- ・ 普段の生活からは聞けない、いろんな人たちの生の声がきけて、自分の大学生活での視野が広がりました。この体験から、授業をどのように生かすか、または講義での伝えたいことなどを意識するようになりました。もっと大学生生活を有意義のあるものにしたいです。（越智）
- ・ この度の熟議では、様々なジャンルでテーブルが分けてありました。それぞれのテーブルの司会者の進行方法が、各テーブルで特徴があって、テーブルによって、人の意見の出る早さや意見の出しやすさなどがあるのだなと感心していました。私も今回の熟議を糧にして、機会があればこのような談議に参加してみたいと思いました。（新田）
- ・ 熟議をしている人の全員が自分の考えをもたれていて、色々な意見が飛び交っていて面白かったです。（北菌）
- ・ 参加する前は議論をするということで固いイメージをもっていました。実際に見学してみると、年齢、職業などに関係なく皆自分の意見を素直に言えていたので良い話し合いの会だと感じました。また行われるのであれば、次は議論をする者として参加したいです。（清水）
- ・ 分野ごとに話をすすめていたので、自分の興味がある話を聞くことができました。次は話し合いに参加してみたいです！（姫野）
- ・ 熟議を通して人はいろんな考えを持っており、価値観は多種多様にあると思いました。自分の興味のある分野だけの議論を見るだけでなく、他の議論を見るのも楽しかったです。特に基礎学力の議論はあまり興味がなかったけど、自分が商業高校出身で普通科とのギャップがあることは感じていたのでそのことを自分の意見として議論に出せたのは良かったと感じました。（藤島）
- ・ 熟議では、様々な立場の人の意見を得られ、とても貴重な体験ができた。テーマはまちづくりで、一体どんな難しい意見がでるのかと思っていましたが、それぞれの立場から見てきたその人なりの経験や想いを知り、自分自身にとってもプラスとなった。ここでの経験を自分なりに活かせるようにしたい。（佐古）
- ・ 記録係として参加しましたが、熟議には様々な立場にいる方が参加していて驚きました。このようなイベントに参加したのは初めてだったので、とても新鮮でした。また機会があれば、参加してみたいです。（佐々木）

グループ熟議

聴 講 者

1	阿字雄 徹	山口県立大津緑洋高等学校
2	池田 浩弥子	山口大学情報環境部学術情報課
3	岩村 智子	山口県 PTA 連合会
4	及川 幸史	岩手大学地域連携推進センター
5	木村 太祐	広島修道大学学術交流センター
6	平岡 健	広島修道大学学術交流センター
7	栗原 伸治	広島修道大学総合企画課
8	多々良 健司	山口県公立高等学校 PTA 連合会
9	野口 玲子	山口県公立高等学校 PTA 連合会
10	早川 浩之	岩手大学地域連携推進センター
11	藤村 典久	株式会社アシスト
12	宮川 潤人	株式会社リバーズ
13	松岡 茂	山口市協働推進課
14	磯貝 理恵	山口大学経済学部 (学生)
15	上野 愛実	山口大学経済学部 (学生)
16	越智 穂奈美	山口大学経済学部 (学生)
17	北蘭 広樹	山口大学経済学部 (学生)
18	清水 大樹	山口大学経済学部 (学生)
19	姫野 初美	山口大学経済学部 (学生)
20	藤島 弘祐	山口大学経済学部 (学生)
21	村上 綾	山口大学人文学部 (学生)
22	新田 誠敏	山口大学経済学部 (学生)
23	佐古 裕也	山口大学経済学部 (学生)
24	宮原 千聡	山口大学教育学部 (学生)
25	石橋 かれん	山口大学人文学部 (学生)
26	金重 暁子	山口大学経済学部 (学生)
27	佐野 淳也	山口大学人文学部 (学生)
28	佐古 千尋	山口大学人文学部 (学生)
29	坂井 伸伍	山口大学人文学部 (学生)
30	島内 勝矢	山口大学教育学部 (学生)
31	市山 雄祐	山口大学教育学部 (学生)



熟議の様子を熱心に観察する聴講者



交流会会場の撤収作業の風景
(裏方を担当する学生たちもいました)

講評

文部科学省 生涯学習推進課 課長

平林 正吉

山口大学 学長

丸本 卓哉

平林 正吉

たいへん熱心にご議論をいただきました。どうですかね。みなさん、いかがでしたでしょうか。しゃべりつかれた方もいらっしゃるでしょうか。もしくは、言い足りなかった方もいらっしゃるかもしれません。いろんな意見を持たれているかなと思います。

また、学内外のファシリテーターの皆様方、いかがでしょうか。皆様方、バランス良く発言してもらうことができましたでしょうか。あるいは、自らしゃべりすぎたかなという反省ももしかしたらあるかもしれません。

このような形で、多様な考えを発表していただいて、よく聞いて、自分なりに考えて、修正して、また新しい考えを持っていくというのが「熟議」の良いところではないかなと思います。

はじめに、肩書きもなく、大前提のお約束があったおかげで、まさか、大学の経営陣のトップの方々が入っていたとは思ってもよらずに、議論が進んでいたのではないかなと思います。

テーマが非常に幅広かったので、正直、私は危惧しておりましたが、ご報告がありましたように、いろんな意見がありまして、こういう意見があっ

たのかと気づかされるような意見が多かったように思います。まさしく「熟議」のおかげかなと思います。

まとめにありましたように、それぞれのテーマがありますけども、このテーマが別のテーブルにいきますと、新しい化学反応を起こすのではないかという可能性を秘めた議論もあったように思います。この後の意見交換会があると思いますので、さらに深めていかれることが可能かなと思っております。

テーマによって、大学とのかかわりには濃淡もあったかなと思っております。課題解決におきまして、大学および大学関係者がストレートにできる課題もあれば、一方で、大学が少し離れて、政策的な部分、直接当事者というよりは、広く一般的な議論というものもあったのかなと思います。

ただ、お願いしたいのは、是非とも、本日の議論をきっかけとしていただいて、引き続き、大学の皆様方におかれましては地域とのコミュニケーションを取っていただいて、今回のつながりを大事にしていただければと思います。関係者の方々におかれましては、同じように引き続き、今後は、大学とともに考えていただいて、大学にかかわっていただいて、それぞれお立場で、それぞれ取り組みをしていただいて、その成果や考えたことなどをまた大学にフィードバックしていただけるとありがたいかなと思います。

今、全国縦断熟議と称しまして、いくつかの大学で熟議の取り組みが始まったところです。ここでのノウハウを、他の大学にも継承なり、教えていただければと思いますし、それによって、「熟議」が洗練されて、手法としていろいろと高まっていくのではないかなということを期待したいと思いません。



講評

感想めいたものでありましたが、是非とも、引き続き、山口大学と一緒に、地域づくり、あるいは、大学づくりに取り組んでいただけますことを心よりお祈りいたしまして簡単に講評にかえさせていただきますと思います。

丸本 卓哉

講評というよりは、皆様方にお礼を申し上げたいと思います。今日は、丸一日、本当に熱心なご議論をしていただきありがとうございました。むしろ時間が足りなかったかなと思うぐらいの「熱気」であったと私は思います。

私、今日は、グループ熟議では、グループ⑧の「安心・安全」に参加しておりましたけども、11グループでこのような議論をしたのは初めてではないでしょうか。メンバーには、県内各地からお越しのいただいております、県外からの方もいらっしゃっています。これほどの人が集まってくさるとは思ってもみませんでした。もちろん、学内からも多くの方が参加しており、本当によかったなと思います。

山口大学は地域の基幹総合大学でありますので、地域とはできるだけ密接に活動したいということで活動しておりますが、今日のようなかたちで小テーブルを囲んで実施したのは、私の記憶のなかでは、地域交流会に続いて2度目であります。たいへんよかったなと思います。

ただ、最初に何人かの方に申し上げましたが、今日の熟議は「始まりである」と思います。先程、辰己先生が「続く」と言われました。そうです。これをこのイベントだけで終わると意味がありません。



今後も、山口大学主催で、それぞれの課題について議論を続ける努力をしなければならないと思っております。なぜなら、議論を続けていかなければ課題を本当に解決することにはならないからです。そういう意味では、今日の内容を整理しまして、まとめますと同時に、今後の議論に続けていきたいと思っております。

大学が地域と共生するということは最も重要なことでございます。ただ、我々の研究・教育は、世界との競争の中で、グローバルな競争の中でやっておりますので、即座に、地域に還元できるかどうか分からない分野もございます。しかしながら、我々の研究そのものは、必ず、社会の発展に役立つと思っております。そういう意味では、日頃、我々がやっておりますことも、地域の方々へ情報を提供したいと思います。できるだけ、状況を共有しながら、ご理解いただき、そして、私共を育てていただきたいと思っております。

今日は、丸一日、熱心にご議論いただきましたことに対して、心より御礼を申しあげまして、私の挨拶にかえさせていただきますと思います。本当にありがとうございました。

講評者①



平林 正吉 (ひらばやし しょうきち)

文部科学省 生涯学習推進課 課長

出身：東京都出身、1961年8月生まれ

学歴：東京大学卒

1986年文部省入省。1994年徳島県教委義務教育課長、1998年在ドイツ大使館一等書記官、2006年生涯学習政策局社会教育課長等を経て、2012年4月より現職。

講評者②

丸本 卓哉 (まるもと たくや) ※4ページを参照してください

学長の一文字

山口大学 学長
丸本 卓哉

実は、本日の「熟議」の実行委員会から、「学長が参加するだけではもの足りません、宿題をもうひとつ与えます」といわれまして。「今日の熟議を全部通して、感じたことを一字で書いてほしい」、というのです。この宿題、昨日、急にいただいたわけです。ですから、練習する暇もありません。今日一日、皆さん方の熟議の様子を感じておりました。一字は決定しております。最後の役目を果たしたいと思います。特別、字が上手ではありませんが、これも学長ということで仕方ありません。なんとか気持ちを込めて書かせていただきたいと思います。

【清書中…沈黙】

「氣」という字でございます。

今日の熟議、元気に、活気があって、熱気があつ



たと思います。

これに通じる「氣」を書かせていただきました。

【拍手】



地域との連携を!

和歌山県二子推進協議会長
米倉一夫

山口大学から世界へ

大いなる飛躍を地域に!

平林正吉 @ 文相省

林、也るが芳八進みまおう
有田

継続こそ力なり

牧野 @ 文相省

平川で遊ぶ!!

知事
3次本誌!!
ふじのふたご

日本の国際競争力は
教育の質変化から。
村田野

学生さんへ! 阿東で
合宿をして下さい。阿東康
吉見正孝

武道
村
新山利博

里山の空気が好き
大空の心が好きなのは
孫 可

住みやすいまちづくり

を目指して産学公の連携を!!
村田尚士

方向を出す

激茶活

笑顔と、いっしょ
眼帯

楽しさがエネルギー
金久山

地域と共に...
林 里織

山に森を生かす
林 里織

気は心、花に言葉と添え
言葉に花を添えて 田中豊

180元気、カキの尾飾
ハク09源、カニハロウ
瀧 優子

山口大学、頑張る下
フル、フル、
井上 進子

SEMANGAT

R ISMA-UNS
INDONESIA 7/...

悦ばれ!

山口野

頑張れ

山口大学 山内光也

熱魂 馬場 豊

敦

山口をより良く
福永 伸二

向上心

山本直樹

コミュニティ・スクールを通して
学校、そして地域をより良く!!

同前村教員 千原
お言葉がはります。 竜明
永藤

教育から
地域の活性化へ
藤平 翔太

地産気と育てる
明日香

力

を

好

む

か

か

か

か

か

か

か

皆さん、学生さん
あーっ!!
吉平

Spamara
Tomoko

よう

に

皆

農

志 純

周達、T村さん
辻 多聞

新山利博
あーっ!!
1/18

新山利博に感謝 吉川

気

もうひとつの「熟議」

～「熟議 in やまぐち」の舞台裏～

山口大学 エクステンションセンター 准教授
辰己 佳寿子

1. それは「熟議」から始まった

山口大学での「熟議」を開催するにあたって全学的な実行委員会を立ち上げた。発足後、まず初めに行ったことは、コアメンバー会議による「学内熟議」であった。大学内には、いくつかの対外的な部署があるが、山口大学の対外対応のポリシー、教育・研究・社会連携の3本柱の関係性など、根本的な議論をやってきたとはいえなかった。ゆえに最初の「熟議」は予想以上に白熱した。そして、「熟議 in やまぐち」は、地域と共生するという公の目的に向かっていくと同時に、学内の様々な部署が連携を強化するきっかけにもしたいという問題意識をもって取り組むことができた。

2. 徹底的にテーマにこだわる

最初に取り組んだのはテーマ設定であった。何度も何度も「熟議」を繰り返す。徹底的にテーマにこだわった。テーマにそんなに時間をかけてどうするのかと言われても譲れなかった。様々な案が浮上したが、結局のところ、山口大学の基本理念「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」であった。身近なところに答えはあったのである。

もちろん、大きなテーマだけでは物事は進まない。テーマを組み立てる必要がある。ここで、最初の「学内熟議」の内容に立ち返ることになった。地域と共生する大学といっても、大学は教育機関であるため、社会連携は、教育と研究を基礎にしている。これを踏まえただけで、地域における大学の役割を考えていく必要があり、それを地域に示す必要があるのではないかと。

よって、「A：研究（究める）」「B：教育（育てる）」「C：社会連携（つながる）」という大枠を設定し、そのうえで、地域社会の課題について多種多様な主体が集まる「熟議」を創出したいと考えた。そして、各グループでは、①最先端研究、②

地域連携型研究、③文学・人間、④基礎学力、⑤コミュニティ・スクール、⑥就職、⑦健康、⑧安心・安全、⑨農村の再生、⑩まちづくりという具体的な論点を取り入れた。

3. 厳選されたファシリテーター

テーマ設定後はファシリテーターの選考であった。ファシリテーターとは、支援的・促進的・利他的な他者に対する働きかけをする人である。テーブルの数だけ人を集めればよいのではなく、大学主催の「熟議」であるから各キーワードの専門家に登壇していただいた。学外ファシリテーターには、学内ファシリテーターが日頃から共に取り組んでいる仲間を呼んできてもらった。「グループ熟議」はこれまでの社会連携から生まれた関係によって推進する体制をとったのである。

4. つくりだされた「熟議」会場

当初、会場はホテルの予定であった。しかし、「知の広場」はつくりだすものと銘打っておきながら、すでに出来合いの会場で開催するのでは趣旨に反する、との委員の瀧本浩一准教授のひとことで、事は一転。「グループ熟議」は、学生食堂で開催することとなった。



もうひとつの「熟議」

開催前日は、天気予報との睨めっこから始まった。会場にテレビやホワイトボード等を運ぶためだ。天候をみて、いざ！と、熟議スタッフ総動員で準備を行った。寒さが残る3月なのに汗をかきながら荷物を運ぶ人、小雨が降るなかビニールでテレビを覆って運ぶ人々、机や椅子を運ぶ人々、熟議グッズを準備する人々。教職員や学生のスタッフが一体となり、騒然としたなかで準備が進んだ。会場が出来上がった瞬間、思わず拍手があがった。さあ、これで準備万端だと…。

5. スタッフの自覚

準備万端と思った矢先、暗闇の食堂の床でうごめくものがあった。委員のひとり、辻多聞講師であった。「明日はご高齢の方も来られます。コードに引っかかって躓かれてはいけませんから…」と、ひたすらガムテープで床のコードを覆っていたのである。また、事務総括補佐の山崎行宏副課長の事務室は夜遅くまで明かりがついていた。

黙々と準備をしている彼らの後ろ姿は、他のスタッフに大きな影響を与えた。実施要領に役割分担等は明記していたが、それぞれスタッフが、その場その場で臨機応変に対応し、主体的な動きをみせ始めたのである。

6. 舞台をいかに演出するか

当日のシンポジウムの会場では、いつにない緊張感が漂っていた。「これはまずい、場を和ませねば」と思った瞬間、たまたまカバンに入っていたカチンコが目に入った。「これしかない」と感じた私は、急遽、グループ熟議の開始時にカチンコを使うことにした。そもそも、「知の広場」という舞台をつくるのだから、映画と同じように考えてもよいはずだと。

思い付きであったため、打ち合わせなど全くなかったが、一瞬にしてスタッフは私の意図を理解してくれたのである。それは、約半年間、「熟議」を繰り返してきた仲間だったからであろう。

7. 完璧ではなかったが…

今回の「熟議」は、完璧であったとはいえなかった。テーマを構造的に設定したつもりであるが、①～⑥までのAとBでは山口大学がどうすべきかという議論に重点が置かれ、⑦～⑩までのCでは地域がどうあるべきかという議論に重点が置かれ



る傾向が強く、前半のAとBの研究・教育と、Cの実践面がうまくつなげられたとは必ずしもいえない。また、全学的な取り組みとして、対外的な部署の横断的な関係は構築できたが、部局との連携は不十分であった。その他、反省点はたくさんあるが、ただ、この「熟議」を通して、何かが変わったことだけは事実である。

8. 何かが変わった

丸本学長が「氣」という一文字を掲げたように、「氣」が結集した会場に一体感が生まれたことは紛れもない事実である。表面的で具体的な変化が起こったわけではないが、ここでいえるのは、表面下の関係性に変化が起こったということである。

地域と大学の関係、地域の人と人の関係、学内の人々との関係、さまざまな人と人の関係性においてである。そう、目には見えぬ化学反応みたいなものであろうか、何か起きたのである。それを実証することはできないが、参加者の笑顔を見ればわかる。

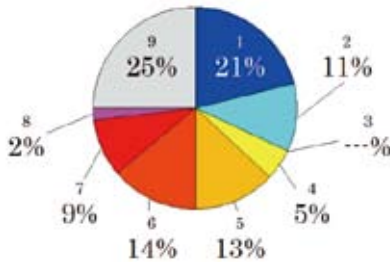
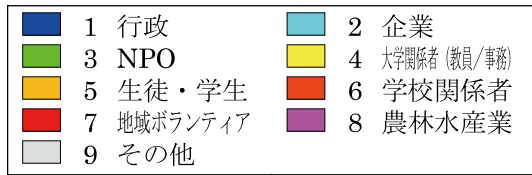
ここで生まれた「氣」を循環させていくために、今後も「熟議」の舞台づくりを続けていかなければならない。やはり、カチンコは手放せない…



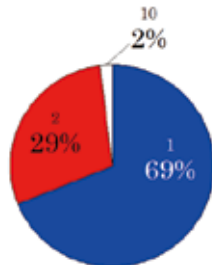
「熟議 in やまぐち」アンケート結果

1. 本日、どのようなお立場で参加されましたか、
当てはまるものに○をつけてください。

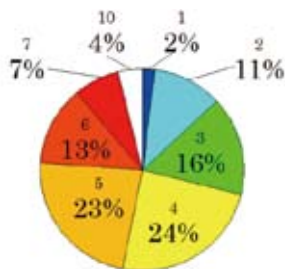
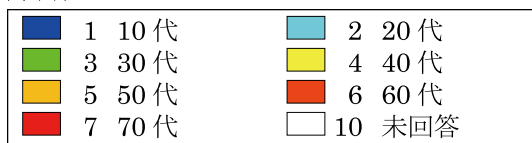
(職業など)



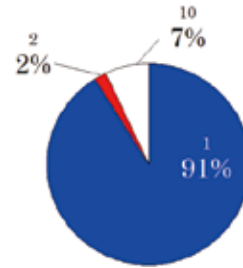
(性別)



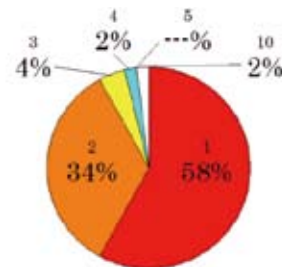
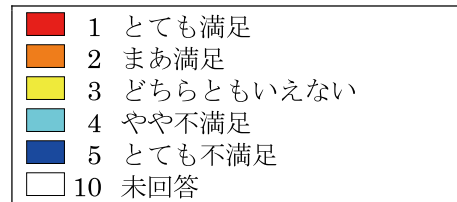
(年齢)



(参加状況)

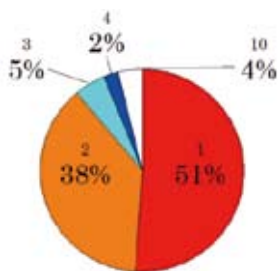
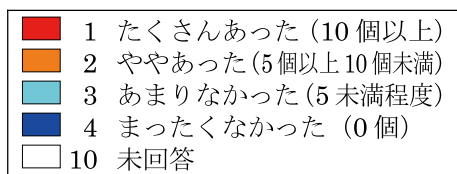


2. 本日参加された満足度をお知らせください。



「熟議 in やまぐち」アンケート結果

3. 本日の熟議で、「とても参考になった」「ためになった」他の参加者の発言・コメントはありましたか？



4. 本日の熟議で、どのようなことに気づきましたか？ご自由にご記入ください。

(多種多様)

- ・ 色んな立場の方の意見の違いがおもしろかったです。学問をされている方のお話はおもしろい。興味深く思いました。
- ・ それぞれの立場での観点のちがひ。
- ・ いろいろな立場の方が知恵を出し合うことの大切さ。
- ・ 立場が違う方との話し合いの必要性。
- ・ 立場が異なっても分かり合えると思う。理解と行動あるのみ。
- ・ 多様な考えも理解できる、熟議だった。
- ・ いろいろな立場の方が地域というものに関心を強く持っていること。
- ・ 色んな立場の人達、同じテーマで話し合うことは、お互いに良い相乗効果になったと思います。
- ・ 様々な考えや思いが重なって社会が形成されていること。
- ・ ほかのテーマと共通するところが意外と見られた。
- ・ 老若男女がすばらしい。頭の体操になりました！！
- ・ 様々な立場の人が集まり、議論したことで化学反応が起きたような結果になりました。

(議論)

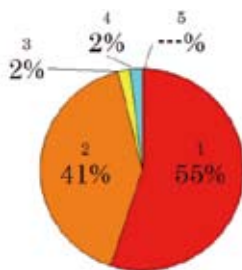
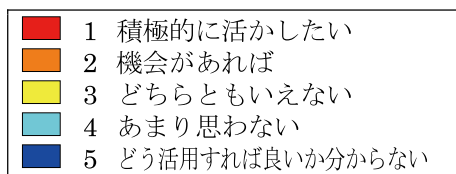
- ・ 他人の意見を取り入れてすぐに自分の考えを発言するのは難しかった。
- ・ 討論によって自分の考えが変化すること。

- ・ 意見を述べることと、主張することの違い。思いは述べていながらも、思いが過ぎると自己主張になってしまう。
 - ・ ファシリテーターの方の気づきがとても良かったです。気持ちよく参加できました。
 - ・ 小さい田舎の地域での話でなく、山口県下全体より集まった学習を積んだ人の集まり、1語1語重みあり楽しく話が出来ました。
 - ・ 普段の関係の中では聞けない深い意見を聞くことができた。
 - ・ 意見を述べるのは自由ですがもう少し簡潔にしてほしい。
 - ・ 日本人のコミュニケーション能力の低さが問われている中、自分の考えを発表できる機会が持てることはとても重要だと思った。
 - ・ 時間の流れに押し流される毎日の繰り返しで、ある程度、まとまった時間を確保して話し合うということが無くなり、現在の閉塞感が出ているようにも感じます。このような現状に刺激を与えるという意味でも、この取り組みは良かったと思います。
 - ・ 特定の人に発言時間が偏っている印象を受けました。もう少し (特に) 女性に発言機会・発言時間を与えるべきでした。その為にはもう少しテーマの内容をしばり、発言内容を書いて持参するのも一考でしょう。
- (自身への気づき)
- ・ 自分が先ず活動することが大切 (5%の人になりたい)。情報発信。
 - ・ 知らなかった事、気づきなど課題が見えた。
 - ・ 自分が地域のことについて何も知らないこと。熟議に参加できるレベルに達していないこと (もう少し勉強する必要がある)。
 - ・ 自分自身の知識の無さ。「防災」に関して、とても難しい問題であることが、改めて感じられました。
 - ・ 自分が知っていることの少なさ。
 - ・ 自分の経験の少なさと、知識量の少なさを実感した。
 - ・ 視野を広くもつこと。
 - ・ 地域を愛されている方が多くとても感動しました。
 - ・ 専門的に農村で農業をいとなみ、農村問題と向きあっている人が多くいた。
 - ・ 新しい発見があった。

(見えてきたこと)

- ・各主体が相互の情報を余り認識していない。これが理解されれば、今にでも答えが出ることがあるのに気づいた。
- ・日本の教育の実質化を求める気持ちを皆さん強く持っていることがわかった。
- ・具体的に進めることができる可能性。
- ・大学側も地域を出るのに抵抗を感じている。
- ・大学も地域を意識した取り組みを推進されている。
- ・地域と大学のつながりが大事。
- ・行政で実施している様々なメニューが利用者である市民にあまり伝わっていない。
- ・大学の方々、行政の方支援応援の必要性。
- ・地域の課題解決のために産学公の連携が必要である。

5. 本日の熟議の経験を、今後の活動で活かしたいと思われませんか？



6. 本日の熟議を受けて、今後どのようなことをやってみたいと思いましたか？

(熟議)

- ・熟議を自社内でもやってみたい。
- ・地域の社会人と学生、親と子で熟議をやりたいと思いました。
- ・熟議のような話し合いの機会を設けたい。
- ・熟議の手法を多くの場で広めるといい。
- ・今回のやり方を使ってみたい。
- ・ディスカッションで積極的に議論を…
- ・学生の育成の手法として取り込みたい。
- ・かまえて発信しなくても、このような機会はどんどんもうけるべきだと思った。

- ・ワークショップのファシリテーター。
- ・職場でも、課題発見、解決策策定のためにこの手法を使ってみたい。

(地域において)

- ・地域での活動をはじめたい、地域の方との熱意を持って活動していきたい。
- ・地域のつながり。地域の活性化。今後、具現化していきたい。
- ・農村問題を解決しようとする子どもの育成を目指す。
- ・地域貢献のできる情報を扱った仕事をしていきたい。
- ・具体的なテーマを有しているので、今回のNetworkを生かしたい。
- ・コミュニティ・スクールにおいてコーディネートのお手伝いをしたいです。
- ・地域の課題解決に向けて様々な主体の連携促進が必要。

(産学官民の連携の可能性)

- ・産学公の共同研究プロジェクト。
- ・大学との連携。地元地域の大学や学生をまき込んだ地域ネットワークを構築したい。
- ・大学を支援する地域の組織づくり。
- ・H25 年度全国高 P 連山口大会で熟議を実施予定。本会（山大）とコラボできれば。
- ・産学官の連携を具体的な組織化していくこと。
- ・地域の課題と、大学の知識、企業のノウハウの結びつけ。
- ・大学とのコラボを今以上にやっていきたい。
- ・本日知り合った高校の先生と共同して活動したい（高大連携）。
- ・山口大学が地域向けに発信している情報を積極的に活用したい。
- ・まず、連携のための準備組織を立ち上げたい。
- ・行政で実施しているメニューをよりわかりやすく知ってもらうために PR 活動をする。
- ・大学との連携はしているが、まだ足りないと思った。もっと間口を広げないといけないと思った。もっと積極的に取り組まないといけないと思った。
- ・地元、山口市と一緒に、よいまちづくりに協力して欲しい。

(個人)

- ・具体的な行動というより、他人の意見や考え方を積極的に聴くように心がけたいと思った。

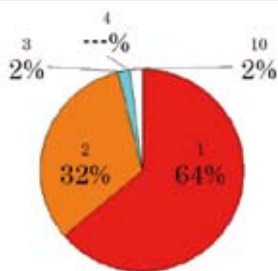
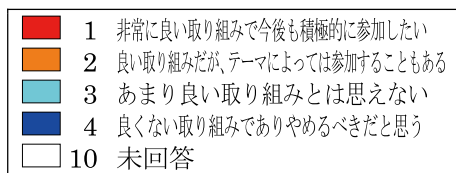
「熟議 in やまぐち」アンケート結果

- ・ 今回の熟議での考え方や物事のとらえ方を生かして、新聞や本を読んでみる。
- ・ 5月にワールドカフェをする予定にしていたのでとても参考になりました。
- ・ 熟議の講義の時、むずかしく途中帰ろうかしらと思いましたが、後半、参加して良かったように思います。
- ・ 今までの継続と、思いついたことについて、声をあげてみる。

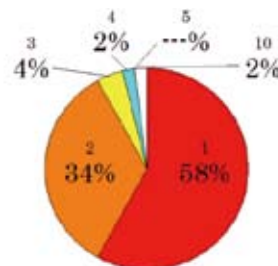
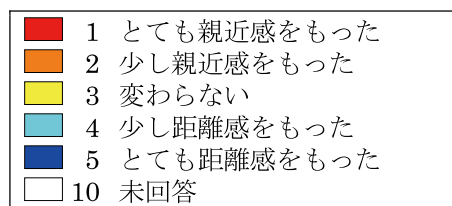
7. 本日の熟議で伝えきれなかった、あなたの行われている活動やお考えがあればお書きください。

- ・ 人づくり、仲間づくり。
- ・ 学校教育(学習内容)から大学初年次教育へのスムーズな接続の仕組み作り。
- ・ 若者が活動するための理解や支援がもっと必要。お金や責任とかではなく、後押しやエールがほしい。若者の気持ちに寄り添い、くみ取る事が本当は大事。大人の勝手や指揮で若者をつぶさない様にする事。
- ・ 若い人を多く入れて続けて欲しい。
- ・ 東北の震災をうけて、東北の復興の手伝いや、山口自身の発展に力になりたい。
- ・ ファシリテーターであったので意見を言う立場でなかったが、木や森林を生かした産業(住宅産業)につなげてゆきたい。
- ・ 過去の経験、学習はあまり伝えられなかった。
- ・ 平均年齢80歳近い集落の取り組み方。

8. 「熟議」という取り組み自体について、あなたはどのようにお考えですか？



9. 山口大学への親近感もしくは距離感は変わりましたか？(○はひとつだけ)



10. ご感想・ご意見等があれば自由にご記入ください。

(継続)

- ・ おそらく次の課題は、このような取り組みの継続性の確保であり、さらには、何らかの成果が得られれば、もっと良いと感じます。
- ・ 積み重ねて、熟成させることを必要に感じる。継続の検討をしてみても、いかがでしょう。
- ・ このやり方を繰り返すことにより、議論の運営がより向上すると期待される。
- ・ より多くの幅広い分野の人たちが参加できるよう広げていただきたい。
- ・ 大学の先生、研究者とざっくばらんに話ができる機会が増えたら良いなと思いました。
- ・ このような熟議が今度は学生だけでも開かれるとよりよいものになると思う。
- ・ 次は、学生を巻き込んで大きくなると良いですが。彼らも一見、バラバラに見えますが、現状を良くしたいというベクトルは、教員よりもしっかりしているかも知れません。
- ・ 現在の就職状況などにみる社会からの厳しさは、学生の不満を増加させ、やる気を削いでいる様にも感じます。就職や働くことに関する熟議が、学生参加熟議の議題かなと思います。働くことの意味を自分なりに整理する場、就職について、少しでも早く意識してもらう場が必要だと思います。彼らの漠然とした不安を解消するためにも。
- ・ また機会があれば参加したいです。

- このような場の提供を多く行って欲しい。本日はありがとうございました。
 - 具現化に向け、本活動を継続したい。
 - 定型的なイベントにならない工夫が必要。
- (その他、感想)
- 大学の多種多様な頭脳を積極的に外部へ出せばものすごいことが出来ると思います。おかげで元気が出ました(地域も個人も)学生も出して欲しい。
 - 地域貢献、地域への還元の有り方については、今後も一緒に考えさせていただきたいと思っています。
 - 大学の先生とガチンコで議論できてよかったです。
 - よくここまでしっかり話をできる方を、人を集められたと感心しました。勉強になりました。
 - 山口大学の先生方が熱心に関わられていた。
 - 山口大学もどうしたらよいか悩んでいるんだ〜と意外な感じがした。
 - とりまとめがさすがに上手ですね。話も上手でした。ありがとうございました。
 - 大学の質の保証、就職についての支援体制(組織)作りを進める熟議を仕掛けましょう。協力はします。
 - 本日の方向性を早く具体化できる組織、仕組み作りについて動いてください。産も協力します。
 - 本学は、一般、社会人と学生が共に聴講できる制度はすばらしい。今度も受講します。
 - お世話になりました。初めて山大の大学会館、食堂に入りました、学生の生活を見る機会があれば又良いと思います。
 - 知らない単語をわかりやすく教えてくださってありがたかった。
 - 今日は大変良い機会を持つことが出来参考になること多々有りました。ありがとうございました。
 - 「熟議」という言葉は以前から知っていましたが、参加させていただき、「百聞は一見に如かず」でした。
 - 驚く出会いがございました。
 - 今後もいろいろな形で皆様と交流させていただき、私も夢を『発見し・はぐくみ・形にして』いきたいと思っております。
 - 一人で参加したため不安だったのですが、とても温かく接していただき心強かったです。
 - 今回の出会い「縁」(ゆかり、えん、えにし)を大切に、これからもぜひ交流させていただけたらと思います。
- (熟議実施についての課題等)
- 「熟議」の言葉が堅く、かなり身構えるものがあった。
 - 周囲のテーブルが近すぎて声がきこえづかった。備品(パネル、マジック等)が足りない。途中のお茶タイムは15時以降で良かったと思う。
 - 討議内容の種類が多すぎます。もう少し的を絞ってみてはいかがでしょうか。
 - 各テーマの関連性がややないように感じた。テーマをしぼってやった方が分かりやすい。
 - テーマ設定のねらいが必ずしも明確でなかった。
 - 短時間でやることのよさ。シンプルな中にすでに答えが出ていた。
 - 参加者の事前準備が必要です。自分の意見を述べる際ペーパーにその内容趣旨をまとめてみてはどうでしょうか。
 - 事前の資料配付があると良かったと思う。機会があればまた参加したい。
 - 最後のオーガナイザーは早口でわかりにくすぎました。ご高齢の方も多く、すべての方に配慮した進行は大切です。地域に入るにはこのあたりが非常に重要です。お疲れ様でした。
 - 浅い実践的でない話に終始するのはもっていきかたが悪いので、地域でやるグループワークはもっと切実で具体的、なんだか集めてやったという形優先の会であった。

2012年3月17日 熟議「やまぐち」アンケート

※このアンケートに回答いただいた情報は、議会の公開情報として取り扱われます。
 [回答は自由に行ってください]

1. 本日の熟議の感想をお聞かせください。

1. 形式	+ 熟議の形式が地域活性化の	1. 話し手は	2. 熟議の場は
2. 内容	6. 話し手は	3. 熟議の場は	7. 熟議の場は
3. 内容	8. 話し手は	4. 熟議の場は	8. 熟議の場は

2. 本日の熟議の感想をお聞かせください。

1. 話し手は	2. 話し手は	3. 話し手は	4. 話し手は	5. 話し手は
1. 話し手は	2. 話し手は	3. 話し手は	4. 話し手は	5. 話し手は

3. 本日の熟議で、「とても参考になった」「ためになった」他の参加者の発言・コメントはありましたか？

1	2	3	4
たくさんあった (10個以上)	ややあった (5個以上10個未満)	あまりなかった (5未満程度)	まったくなかった (0個)

4. 本日の熟議で、どのようなことに気づきましたか？ご自由にご記入ください。

5. 本日の熟議の経験を、今後の活動で活かしたいと思われませんか？

1	2	3	4	5
積極的に活かしたい	機会があれば	どちらともいえない	あまり思わない	どう活用すれば 良いか分からない

※このアンケートに回答いただいた情報は、議会の公開情報として取り扱われます。
 [回答は自由に行ってください]

1. 本日の熟議の感想をお聞かせください。

1. 形式	+ 熟議の形式が地域活性化の	1. 話し手は	2. 熟議の場は
2. 内容	6. 話し手は	3. 熟議の場は	7. 熟議の場は
3. 内容	8. 話し手は	4. 熟議の場は	8. 熟議の場は

2. 本日の熟議の感想をお聞かせください。

1. 話し手は	2. 話し手は	3. 話し手は	4. 話し手は	5. 話し手は
1. 話し手は	2. 話し手は	3. 話し手は	4. 話し手は	5. 話し手は

3. 本日の熟議で、「とても参考になった」「ためになった」他の参加者の発言・コメントはありましたか？

1	2	3	4
たくさんあった (10個以上)	ややあった (5個以上10個未満)	あまりなかった (5未満程度)	まったくなかった (0個)

4. 本日の熟議で、どのようなことに気づきましたか？ご自由にご記入ください。

5. 本日の熟議の経験を、今後の活動で活かしたいと思われませんか？

1	2	3	4	5
積極的に活かしたい	機会があれば	どちらともいえない	あまり思わない	どう活用すれば 良いか分からない

アンケート用紙（原寸は A4 サイズ）

地域と共生する大学づくりのための全国縦断熟議



熟議

in

やまぐち

発見し、はぐくみ、かたちにする知の広場
実りある知の循環をつくりだすために

日時 平成 24 年 3 月 17 日 (土) 10:30~17:00

場所 山口大学 吉田キャンパス (大学会館 / きらら)
山口市吉田 1677-1

【主催】 山口大学、文部科学省
【後援】 山口県、山口県教育委員会、山口市、山口市教育委員会



～実りある知の循環をつくり出すために～

熟議

in やまぐち

地域社会が抱える課題をどのように解決していけばよいのでしょうか。
 このような課題にわれわれはどのように向き合えばよいのでしょうか。
 山口大学の「知の広場」に集まり、「熟議」を通じてみんなで考えてみましょう。
 実りある知の循環をつくり出す第一歩に参加してみませんか。

参加費：無料

プログラム

10:00 開場（受付開始）
◆ 第1部（開会・シンポジウム） 10:30～12:00
 10:30 開会、主催者挨拶、文部科学省挨拶、
 来賓挨拶
 11:00 シンポジウム
 「山口大学の知の広場とは」
 12:00 休憩

◆ 第2部（グループ熟議） 13:00～17:00
 13:00 グループ熟議
 15:00 交流・ディスカッションタイム
 15:30 プレゼンテーション
 16:30 講評
 17:00 閉会

◇ 意見交換会・交流会 17:00～18:30

熟議テーマ

次のサブテーマA・B・Cに分かれてグループ熟議を行います。

A 「究める(研究)」

大学が研究する意義を考えてみませんか？

キーワード

- ① 最先端研究 ② 地域連携型研究
 ③ 文学・人間

B 「育てる(教育)」

社会を元気にする人材育成とは？

キーワード

- ④ 基礎学力 ⑤ コミュニティスクール
 ⑥ 就職

C 「つながる(地域づくり)」

人々がどのようにつながることが社会を元気に
 していけるのでしょうか。

キーワード

- ⑦ 健康 ⑧ 安心・安全
 ⑨ 農村の再生 ⑩ まちづくり



熟議 (じゅくぎ) とは？

熟議とは、多くの当事者による「熟慮」と「議論」を重ねながら政策を形成していくことです。
 具体的には、政策を形成する際の、下記のようなプロセスのことを言います。

- ① 多くの当事者が集まって、② 課題について学習・熟慮し、議論をすることにより、
 ③ 互いの立場や果たすべき役割への理解が深まるとともに、④ 解決策が洗練され、
 ⑤ 個々人が納得して自分の役割を果たすようになる。

詳しくは、文部科学省のサイト「熟議カケアイ」をご覧ください。 <http://jukugi.mext.go.jp/>

「熟議 in やまぐち」参加申込書

FAX・E-mailにてお申込み下さい。

申込締切：2月28日(火)

先着80名(定員になり次第締め切り)

フリガナ 氏名	性別	年齢	所属先など
〒 住所：	TEL		FAX
E-mail	@		
「熟議」 参加形態	シンポジウム・グループ熟議		聴講
	希望する順に、キーワードの番号を【 】に記入して下さい。 第1希望【 】 第2希望【 】 第3希望【 】 ① 最先端研究 ② 地域連携型研究 ③ 文学・人間 ④ 基礎学力 ⑤ コミュニティスクール ⑥ 就職 ⑦ 健康 ⑧ 安心・安全 ⑨ 農村の再生 ⑩ まちづくり ご希望に沿えない場合もありますので、あらかじめご了承ください。		聴講のみ参加【 】 グループ熟議には参加できません。 意見交換会・交流会 参加費：2,000円（学生：1,000円） 参加 ・ 不参加

昼食はご準備下さい。なお、希望者には弁当(500円)を手配いたします。 弁当： 要・不要

国立大学法人山口大学の保有する個人情報の管理に関する規則にのっとり、個人情報は本事業以外に使用いたしません。

問い合わせ・申込み先

山口大学エクステンションセンター

E-mail exten@yamaguchi-u.ac.jp FAX.083-933-5029 TEL.083-933-5059

「熟議 in やまぐち」実行委員会

委員長	松田 博	副学長（国際・社会連携担当）
副委員長	富平 美波	エクステンションセンター センター長
事業コーディネーター	辰己 佳寿子	エクステンションセンター 准教授
編集委員	辻 多聞	大学教育機構 学生支援センター 講師
事務総括	原田 道雄	学長戦略部長国際・社会連携課 課長
事務総括補佐	山崎 行宏	学長戦略部長国際・社会連携課 副課長
	瀧本 浩一	エクステンションセンター 主事
	小川 勤	大学教育機構 大学教育センター 教授
	林 里織	産学公・イノベーション推進機構イノベーション支援部門 講師
	清水谷 卓	産学公・イノベーション推進機構産学公連携支援部門 コーディネーター
	佐藤 晃一	学生支援部教育支援課 課長
	溝端 登紀男	学術研究部産学連携課 課長
	平石 憲良	総務部総務課 課長
	梅木 哲也	総務部広報課 課長
	須藤 馨	財務部財務課 副課長
	平岡 朋子	学長戦略部国際・社会連携課社会連携係 係長

編集後記

編集を行い、改めて「熟議 in やまぐち」には、地域、企業、大学、学生などの様々な思いが一堂に会していたのだと痛感しました。熟議において大事なこととして、解決策などの結論を出すだけでなく、様々な感性による様々な視点に触れ、自らの思いを省みるがあると思います。熟議は公的なイベントとは限りません。職場での会話、家庭での会話、井戸端会議でも、様々な思いを互いに語りあえば立派な熟議です。熟議を行い、自らの視点や感性を広げながら、自身のコミュニティーも成長させていく、そのようなきっかけとして本書が用いられれば幸いです。

最後になりましたが、「熟議 in やまぐち」の場内撮影をしてくださった総務部広報課広報係の山中清治様、場内撮影および記録映像編集をしてくださった株式会社ブイ・ドライブの小林努様、この報告書の編集をサポートしてくださった学長戦略部国際・社会連携課の渡邊早苗様、そして当日の運営をサポートしてくださった学生スタッフの皆様に対して、厚く御礼申し上げます。（辻・辰己）

地域と共生する大学づくりのための全国縦断熟議

熟議 in やまぐち 報告書

平成 24 年 7 月 7 日 発行

編 者 編集委員 辰己 佳寿子・辻 多聞
発 行 所 山口大学 エクステンションセンター
〒753-8511 山口県山口市吉田 1677-1
印 刷 所 有限会社 いづみプリンティング

ISBN978-4-9906598-0-6

「熟議 in やまぐち」は、山口大学
創基 200 周年記念事業の一つです



氣